

松江市文化財調査報告書 第96集



文化財愛護
シンボルマーク

出雲国分寺跡発掘調査報告書

2004年3月
松江市教育委員会

松江市文化財調査報告書 第96集

出雲国分寺跡発掘調査報告書

2004年3月
松江市教育委員会

例 言

1. 本書は、平成10年度～14年度において松江市教育委員会が国庫補助事業により実施した出雲国分寺跡発掘調査事業の報告書である。本書に掲載したのは寺域確認調査にかかる報告であり、平成14年度に史跡指定地内で実施した中門跡、回廊跡の確認調査の報告は掲載していない。
2. 本事業は、文化庁記念物課および島根県教育委員会の指導を受けて、松江市教育委員会において実施した。
指導・助言 文化庁記念物課、島根県教育委員会
主 体 者 松江市教育委員会
事 務 局 松江市教育委員会生涯学習課文化財室（平成10年4月～平成13年3月）
松江市教育委員会文化財課（平成13年4月～）
3. 発掘調査にあたっては、地権者である遠田元男、小川吉代夫、小川進、菅井一志、菅井勝美、菅井武夫、菅井勉、菅井剛、菅井花子、菅井久志、角清利、西島昭子、西島正道の各氏から多人な協力を賜った。記して衷心より謝意を表したい。
4. 本報告書の執筆担当は次のとおりである。
編 集 松江市教育委員会文化財課 飯塚康行
執 筆 松江市教育委員会文化財課 飯塚康行
卒平成12～13年度分は古藤博昭が執筆したものを飯塚が一部加筆
遺物実測 （平成10年度）飯塚康行、山根克彦、近藤雅彦
（平成11年度）飯塚康行、山根克彦、近藤雅彦
（平成12年度）飯塚康行、山根克彦、下田幹子
（平成13年度）飯塚康行、山根克彦、下田幹子
（平成14年度）飯塚康行、山根克彦、飛田恵美子
遺物整理 （平成10～14年度）荻野哲二
図面作成 （平成10～14年度）飯塚康行、古藤博昭、原英誓、飯塚将太、小山泰生
5. 本書に掲載した出土遺物、写真、実測図などの資料は、松江市教育委員会文化財課で収蔵・保管している。

文化財愛護シンボルマークとは…

このマークは昭和41年5月26日に文化財保護委員会（現文化庁）が全国に公募し、決定した文化財愛護の運動を推進するためのシンボルマークです。

その意味するところは、左方にひろげた両手の掌が、日本建築の重要な要素である斗拱、すなわち斗と栱の組み合わせによって全体で軒を支える腕木の役をなす組物のイメージを表わし、これを二つ重ねることにより、文化財というみんなの遺産を過去・現在・未来にわたり永遠に伝承していくというものです。



文化財愛護
シンボルマーク

目 次

第1章 出雲国分寺跡の概要

(1) 周辺の歴史的環境.....	5
(2) 出雲国分寺跡の文化財指定.....	13
(3) 史跡内の整備状況.....	15

第2章 事業の概要

(1) 調査に至る経緯.....	20
(2) 調査実施期間.....	20
(3) 調査体制.....	21

第3章 調査の概要

(1) 平成10年度調査.....	22
(2) 平成11年度調査.....	45
(3) 平成12年度調査.....	79
(4) 平成13年度調査.....	95
(5) 平成14年度調査.....	114

第4章 考 察.....126

(1) 寺域について

第5章 小 結.....127

出土遺物観察表.....	133
遺構写真図版.....	143
遺物写真図版.....	168

第1章 出雲国分寺跡の概要

(1) 周辺の歴史的環境

出雲国分寺跡は松江市街地から南東方向の松江市竹矢町に所在する。この地一帯には意宇川の下流に発達した沖積平野（意宇平野）が形成されており、現在では穀倉地帯となっている。意宇平野周辺の丘陵部には古代の遺跡が集中することで知られているが、出雲国分寺跡もその意宇平野北岸の丘陵部に位置する寺院跡である。

意宇平野周辺の遺跡のうち、縄文時代の遺跡は意宇平野北岸部に点在して見られ、間内遺跡（6）、法華寺前遺跡（59）、さっぺい遺跡（45）、旧竹矢小学校校庭遺跡（65）などの遺跡からは縄文土器片が発見されている。

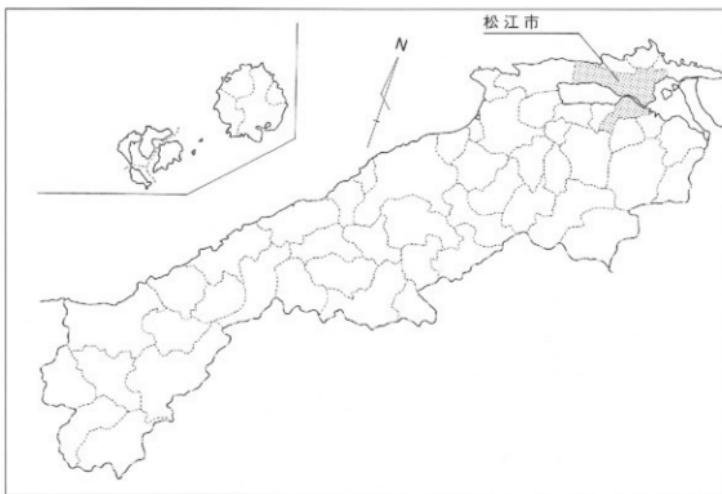
弥生時代の遺跡としては、意宇平野の北西部丘陵地帯で四隅突出型埴丘墓の間内越墳墓群（78）、米美墳丘墓（90）が知られるほか、意宇平野の北部で向小紋遺跡（9）、上小紋遺跡（8）などの水田跡や銅鐸形土製品が出土した布田遺跡（60）などが知られるが、まだ遺跡数は少ない。

古墳時代には意宇平野周辺の丘陵部には多くの古墳が築造されるようになる。前期に属するものとしてはわずかに廻田1号墳（84：前方後円墳、全長58m、前期末）、井ノ奥2号墳（29：方墳、13～15m、前期末ないし中期前半）が知られるのみであるが、中期に入ると意宇平野の北方、大橋川南岸に大型古墳が築造されるようになる。石屋古墳（77：方墳、40m）、竹矢岩舟古墳（31：前方後方墳、49m）、手間古墳（30：前方後円墳、67m）などがそれにあたり、大橋川の水運を掌握した有力者が存在していたことを窺わせるものである。また意宇平野南方の丘陵部には中期末～後期前半にかけて東白塚山古墳群（20）、西百塚山古墳群（19）などの群集墳が築造される。

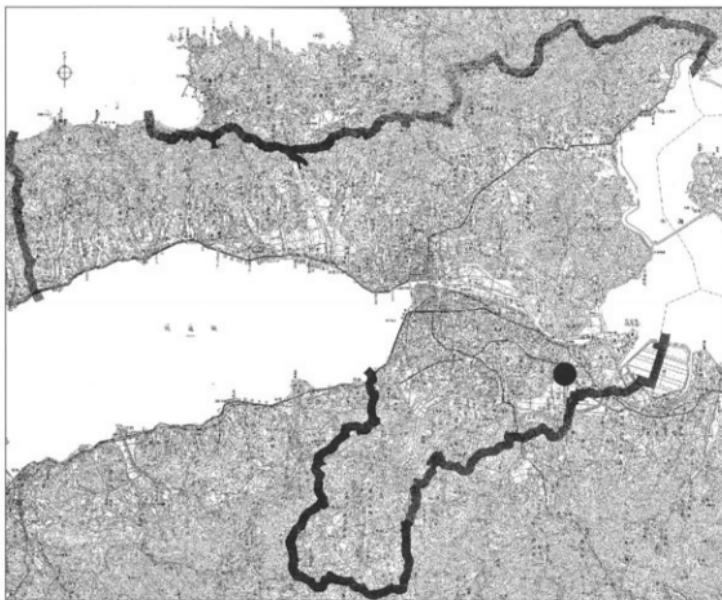
古墳時代後期になると、一転して内陸部の茶臼山周辺に古墳が築造されるようになる。その中でも人形のものは茶臼山北西麓部に築かれた山代二子塚古墳（114：前方後方墳、94m）、山代方墳（115：方墳、45m）、永久宅後古墳（116）であり、出雲東部の首長墓と見なされる古墳である。また意宇平野の南西部には「各田部臣」の銘文入り大刀が出土した岡田山1号墳（103：前方後方墳、24m）、御崎山古墳（106：前方後方墳、50m）、岩屋後古墳（104）など中規模の古墳も築かれ、この地域が当時の中心地であったことが窺われる。

奈良時代にはこうした古墳時代からの有力な政治勢力を基盤として意宇平野南側に出雲国府跡（3）が置かれ、名実ともに当地が出雲地方の中心地となった。天平5年（733年）に編纂された『出雲國風土記』によれば国府周辺には公的施設としての意宇郡家、駅屋、軍團、正倉（山代郷正倉跡：121）などがあり、また官道である正西道（山陰道）と杜北道（隠岐への官道）が交わる十字街もあったことが記されている。また奈良時代には仏教も伝わり、茶臼山の北麓に米美庵寺（91）、南麓に四王寺跡（98）が発見され、それぞれ風土記に記載の見える南北2つの「新造院」に比定されている。

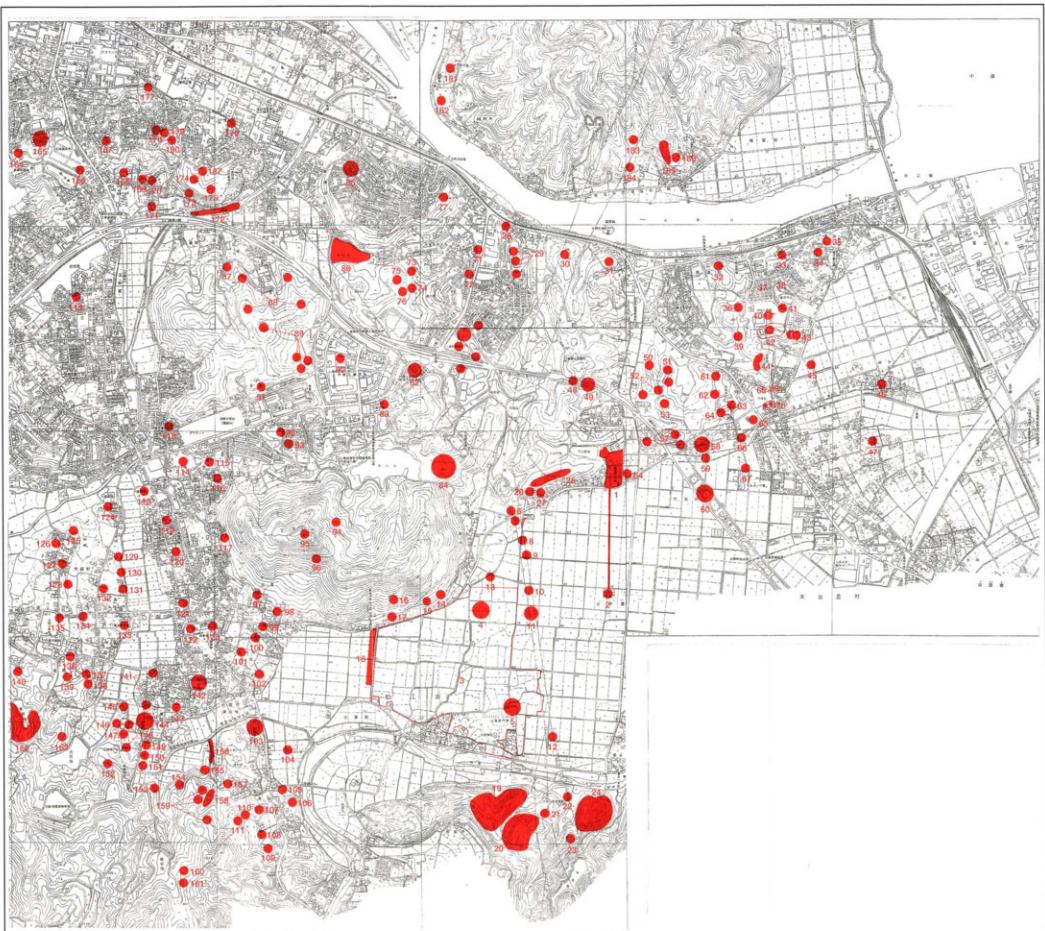
こうした状況の下、天平13年（741年）には聖武天皇が仏教による天下泰平を目指して発した国分寺建立の詔により、出雲国分寺（1）、出雲国分尼寺（58）が建立されることになった。



第1図 島根県地図



第2図 松江市地図



第3図 周辺の遺跡分布図

周辺遺跡一覧表

名 称	所在地	種 别	時 代	遺 様・遺 物
1 史跡出雲国分寺跡 古道	竹矢町	寺院跡	奈良時代	南門跡、中門跡、金堂跡、講堂跡、僧房跡、塔跡、回廊跡等、瓦、墨書き土器、須恵器、土師器等
2 三軒屋遺跡	竹矢町	散布地	奈良時代	弥生土器、土師器
3 史跡出雲國府跡	大草町 山代町 竹矢町	官衙跡	奈良時代	礎石建物跡、掘立柱建物跡、溝、祭祀遺構等、木簡、墨書き土器、銅印、硯、須恵器、土師器等
4 穂口玉作跡	大草町	生産遺跡	古墳時代？	詳細不明
5 大草玉作遺跡	大草町	生産遺跡	古墳～奈良	瑪瑙勾玉、碧玉、水晶、筋砥石
6 間内遺跡	矢田町	散布地	縄文・弥生・奈良	縄文土器、弥生土器、打製石斧、布目瓦、磨石
7 大平遺跡	矢田町	その他	不明	土壤 4、黒曜石片、碧玉削片
8 上小紋遺跡	竹矢町	水田跡	弥生・古墳	水田跡 1.7 区画、溜柵状造構 1、溝状造構 2
9 向小紋遺跡	竹矢町	水田跡	弥生時代	水田跡 1.0 区画、溜柵状造構 1、土壤 1
10 四配田遺跡	竹矢町	散布地他	古墳時代	溝状造構 3、掘立柱建物 1
11 神田玉作跡	竹矢町	生産遺跡	古墳時代	硯石
12 大屋敷遺跡	大草町	集落跡	平安～鎌倉	掘立柱建物 2、土壤 5、須恵器、青磁、白磁
13 才塚遺跡	竹矢町	散布地	縄文時代	縄文土器、石斧（打製、磨製）
14 大谷遺跡	山代町	散布地	不明	須恵器、土師器
15 聖岩遺跡	山代町	祭祀遺跡	不明	聖甕、土師質土器、古錢
16 大谷横穴群	山代町	横穴墓	古墳時代	2穴
17 真名井遺跡	山代町	散布地	不明	須恵器片
18 大坪遺跡	山代町	散布地	弥生～中世	弥生土器片、須恵器片、土師器片、木簡他
19 西百塚山古墳群	大草町	古墳群	古墳時代	4 収群、合計 3.2 基以上
20 東百塚山古墳群	大草町	古墳群	古墳時代	3 收群、合計 9.6 基以上
21 古天神古墳	大草町	古墳	古墳時代	前方後方墳（約 25m）、石棺式石室、須恵器
22 天満谷遺跡	大草町	集落跡	平安～鎌倉	掘立柱建物跡 6、須恵器、白磁他
23 大草岩船古墳	大草町	古墳	古墳時代	舟形石棺、須恵器、円筒埴輪
24 安部谷古墳群	大草町	横穴・古墳	古墳時代	6 支群以上、合計 1.0 穴以上、須恵器、馬其他
25 上竹矢古墳群	竹矢町	古墳群	古墳時代	方墳 7 基、前方後方墳 1 基、前方後円墳 1 基
26 上竹矢古墳	竹矢町	古墳	古墳時代	竪穴式石室
27 上竹矢遺跡	竹矢町	散布地	不明	石斧
28 荒神烟古墳	竹矢町	古墳	古墳時代	墳形不明（半球）、円筒埴輪片、滑石製有孔円板
29 井ノ奥古墳群	竹矢町	古墳群	古墳時代	前方後円墳 1 基（58m）、方墳 2 基、墳形不明 1 基
30 手間古墳	竹矢町	古墳	古墳時代	前方後円墳（約 67m）、円筒埴輪
31 竹矢磐舟古墳	竹矢町	古墳	古墳時代	前方後方墳（49m）、舟形石棺、円筒埴輪
32 清山古墳	馬潟町	古墳	古墳時代	方墳（13×10m）、土師器、須恵器、鐵器残欠
33 高橋遺跡	八幡町	散布地	古墳時代	古式土師器片、土師器片
34 角森遺跡	八幡町	散布地	弥生時代	弥生土器、鐵製品、磨製石斧
35 A 2.5 遺跡	八幡町	散布地	古墳時代	須恵器片
36 若宮山古墳	八幡町	古墳	古墳時代	方墳（11×16m）
37 鏡音寺古墳群	八幡町	古墳群	古墳時代	方墳 3 基
38 鏡音寺遺跡	八幡町	散布地	古墳時代	土師器片、須恵器片
39 善漫寺古墳	八幡町	古墳	古墳時代	方墳（15×19.5m）
40 其神古墓	八幡町	その他の墓	平安時代	土壤
41 其神遺跡	八幡町	散布地	古墳時代	土師器片、須恵器片
42 屋敷山遺跡	八幡町	その他の墓	中世	五輪塔、宝篋印塔 2 群 8 基
43 A 2.3 遺跡	八幡町	散布地	古墳時代	須恵器片
44 近接寺裏山古墳群	八幡町	古墳群	古墳時代	方墳 4 基、前方後方墳 1 基、前方後円墳 1 基
45 さつまい遺跡	八幡町	散布地	縄文時代	縄文土器
46 A 1.9 遺跡	八幡町	散布地	古墳時代	須恵器片
47 安国寺古墓群	八幡町	その他の墓	近世	五輪塔、宝篋印塔、伝京極高次宝篋印塔
48 オノ峠古墳群	竹矢町	古墳他	古墳・奈良	方墳（14.5×15.7m）、前方後方墳
49 オノ峠遺跡	竹矢町	集落跡・祭祀遺跡	古墳時代～中世	加工段、掘立柱建物跡 16 棟、須恵器、木簡、墨書き土器、陶器、瓦、陶磁器、祭祀遺物他
50 長峯遺跡	竹矢町	集落跡	弥生・平安	竪穴住居跡（弥生）、土壤墓（平安）
51 中竹矢後 1 号墳	竹矢町	古墳	古墳時代	方墳（14.2m）
52 武内神社裏山古墳群	竹矢町	古墳群	古墳時代	方墳 3 基
53 長峯 1 号墳	竹矢町	古墳	古墳時代	方墳（19×10m）
54 中竹矢古墳群	竹矢町	古墳群	古墳時代	前方後方墳 2 基、墳形不明 4 基
55 中竹矢遺跡	竹矢町	横穴墓他	弥生～近世	横穴墓 5 穴、瓦窯跡、掘立柱建物跡他

	名 称	所 在 地	種 別	時 代	遺 墓・遺 物
56	社日古墳群	竹矢町	古墳他	古墳～中世	方墳2基、横穴墓13穴、火葬墓、五輪塔4基
57	出雲國分寺瓦礫跡	竹矢町	生産遺跡	奈良時代	瓦窯跡1基、瓦、須恵器
58	出雲國分寺跡	竹矢町	寺院跡	奈良時代	瓦、墨書き土器、施釉陶器片、須恵器片
59	法華寺前遺跡	竹矢町	散布地	繩文時代	繩文土器片(深鉢形土器)
60	布田遺跡	竹矢町	集落跡	弥生時代～	住居跡状遺構、清状遺構、土壤他、銅鋸形土製品
61	代官屋後櫻穴群	八幡町	横穴墓	古墳時代	横穴墓10穴以上
62	宮内岩舟古墳	八幡町	古墳	古墳時代	円墳
63	八幡宮下横穴群	八幡町	横穴群	古墳時代	横穴墓2穴
64	出雲國分寺付近遺跡	竹矢町	散布地	弥生時代	弥生土器、石鐵
65	旧竹矢小学校校庭遺跡	八幡町	散布地	繩文・弥生	繩文土器、弥生土器、石鐵、磨石、黒曜石他
66	平浜八幡宮前遺跡	八幡町	散布地	弥生時代	弥生土器
67	宮内遺跡	八幡町	散布地	弥生時代	石斧
68	の場遺跡	八幡町	散布地	不明	土壤4基
69	の場古墳群	八幡町	古墳群	古墳時代	円墳1基、墳形不明1基
70	の場横穴(古墓)群	八幡町	横穴墓他	古墳～中世	横穴墓5穴、古墓3基
71	保地遺跡	矢田町	散布地	繩文・弥生	繩文土器、弥生土器、石鐵他
72	矢田田圃付近遺跡	矢田町	散布地	古墳時代	須恵器片
73	保地古墳群(4号墳)	矢田町	古墳	古墳時代	詳細不明
74	保地古墳群(3号墳)	矢田町	古墳	古墳時代	詳細不明
75	保地古墳群(2号墳)	矢田町	古墳	古墳時代	詳細不明
76	保地古墳群(1号墳)	矢田町	古墳	古墳時代	詳細不明
77	石屋古墳	東津田町	古墳	古墳時代	方墳1基(40×40m)
78	間内越埴墓群	矢田町	その他の墓	弥生時代	四隅突出型埴丘墓2基、墳形不明2基
79	矢田平所遺跡	矢田町	集落跡	古墳時代	堅穴住居跡、掘立柱建物跡
80	平所II遺跡	矢田町	散布地	古墳時代	土師器片、須恵器片
81	平所遺跡	矢田町	生産遺跡	古墳時代	堅穴住居跡3、玉作工房跡1、埴輪窯跡1
82	寺山小田遺跡	矢田町	集落跡	古墳時代	堅穴住居跡2、掘立柱建物跡2
83	十三王免横穴群	矢田町	横穴墓	古墳時代	横穴墓3~7穴
84	圓田古墳群	矢田町	古墳群	古墳時代	前方後円墳1基(58m)他合計10基
85	東光台古墳	東津田町	古墳	古墳時代	墳形不明、箱式石棺
86	須原池遺跡	矢田町	散布地	不明	須恵器片、古瓦
87	上谷遺跡	東津田町	散布地	古墳時代	須恵器、菅玉
88	南外古墳群	東津田町	古墳群	古墳時代	前方後円墳1基(20m)、方墳3基(9~10m)
89	来美東遺跡	矢田町	古墳他	古墳時代	方墳2基、住居跡推定地2所
90	来美埴丘墓	矢田町	その他の墓	弥生時代	四隅突出型埴丘墓1基(8.5×6.5m)
91	山代郷新造跡(来美廣寺)	矢田町	寺院跡	奈良時代	基壇4基、須弥壇、磁石、瓦
92	孤谷古墳	山代町	古墳	古墳時代	方墳1基、須恵器片
93	孤谷横穴群	山代町	横穴墓	古墳時代	4.0~5.0穴、須恵器、土師器、直刀、耳環他
94	長元遺跡	山代町	散布地	繩文時代	繩文土器
95	茶臼山城跡	山代町	城跡	中世	曲輪、堀切、陶磁器片、土筋質土器片、錢寶他
96	山代社元社地	山代町	祭祀遺跡	古代	詳細不明
97	市場遺跡	山代町	散布地他	中世~近世	土壤、ビット群、陶磁器片他
98	山代郷新造跡(国王寺跡)	山代町	寺院跡	奈良時代	基壇、瓦淵、須恵器、土師器、陶磁器、蝶髪他
99	寺の前遺跡	山代町	散布地	古墳~近世	瓦、須恵器、土師器、陶磁器類他
100	山代郷新造院瓦窯跡(小無田II遺跡)	山代町	生産遺跡	奈良時代	瓦窯跡3基、住居跡他、瓦、須恵器他
101	小無田遺跡	山代町	散布地他	古墳・中世	掘立柱建物跡、須恵器、土師器、陶磁器他
102	团原古墳	山代町	古墳	古墳時代	石榴式石室
103	岡田山古墳群	大草町	古墳群	古墳時代	前方後方墳1基、円墳1基他合計7基、「各田部亞」銘直刀、鏡、須恵器、土師器、円筒埴輪他
104	岩屋後古墳	大草町	古墳	古墳時代	石榴式石室、須恵器、人物埴輪、円筒埴輪
105	上立遺跡	大草町	散布地	旧石器	石器、須恵器、土師器
106	御崎山古墳	大草町	古墳	古墳時代	前方後方墳1基(約50m)、獣頭環頭大刀、珠文鏡、馬具、耳環、須恵器他
107	寺山遺跡	大草町	散布地	不明	須恵器片
108	穴觀音奥遺跡	大草町	散布地	散布地	須恵器片
109	小谷横穴	大草町	横穴	古墳時代	1穴
110	寺山古墳群(1号墳)	大草町	古墳群	古墳時代	方墳(10×10m)
111	寺山古墳群(2号墳)	大草町	古墳群	古墳時代	方墳(10×10m)
112	練兵場跡II遺跡	古志原町	不明	不明	詳細不明

名 称	所 在 地	種 別	時 代	遺 構・遺 物
113 井手平山古墳群	山代町	古墳群	古墳時代	1号墳（円墳、14.8m）、2号墳（方墳、9.5m）
114 山代二子塚古墳	山代町	古墳	古墳時代	前方後方墳（94m）、須恵器、円筒埴輪
115 山代方墳	山代町	古墳	古墳時代	方墳（約45×約43m）、石棺式石室、須恵器、埴輪
116 永久宅後古墳	山代町	古墳	古墳時代	石棺式石室、円筒埴輪
117 錫冶屋遺跡	山代町	生産遺跡	古墳～奈良	窯跡、土壤、須恵器、ワゴン形口他
118 大庭鷺塚	大庭町	古墳	古墳時代	方墳（41×43m）、須恵器、円筒埴輪
119 大庭住宅東遺跡	大庭町	散布地	古墳～奈良	須恵器片、土師器片
120 山代遺跡	山代町	散布地	弥生時代	弥生土器片
121 出雲国山代郷正倉跡	山代町	官衙跡	奈良～平安	掘立柱建物跡2.5、溝状遺構5、須恵器、炭化米
122 下黒田遺跡	大庭町	官衙跡	奈良～近世	掘立柱建物跡7、溝状遺構7、井戸4、土壙他
123 黒田館跡	大庭町	城館跡	古墳～中世	建物跡、井戸跡、濠跡、須恵器、土師器、陶磁器他
124 下ノ原古墳群	大庭町	古墳群	古墳時代	方墳4基
125 B 1 1 遺跡	大庭町	散布地	古墳時代	須恵器片
126 B 1 2 遺跡	大庭町	散布地	古墳時代	須恵器片
127 B 1 0 遺跡	大庭町	散布地	古墳時代	須恵器片
128 B 9 遺跡	大庭町	散布地	古墳～平安	須恵器片、土師器片
129 B 8 遺跡	大庭町	散布地	古墳時代	須恵器片
130 B 2 8 遺跡	大庭町	城館跡	中世	土壘、空塼
131 B 2 1 遺跡	大庭町	散布地	古墳時代	須恵器片
132 B 1 8 遺跡	大庭町	散布地	古墳時代	須恵器片
133 東源寺古墳	大庭町	古墳	古墳時代	前方後円墳（推定62m）、須恵器、円筒埴輪、形象埴輪片
134 B 3 遺跡	大庭町	散布地	古墳時代	須恵器片
135 大庭小学校校庭遺跡	大庭町	散布地	古墳時代	須恵器片、土師器片
136 大庭稻田遺跡	大庭町	集落跡	不明	堅穴住居跡
137 平古墳群	大庭町	古墳群	古墳時代	方墳1基、墳形不明1基
138 秋上原古墓群	大庭町	その他の墓	不明	3基
139 宝海遺跡	大庭町	集落跡	奈良時代	ピット群、須恵器、土師器
140 空ノ原古墳	佐草町	古墳	古墳時代	方墳（8.5×9.5m）
141 神魂神社参道遺跡	大庭町	散布地	古墳～奈良	須恵器片、土師器片
142 黒田社遺跡	大庭町	散布地他	奈良・中世	土壙墓、ピット群他、須恵器、土師器、墨書き土器、陶磁器他
143 里田畦遺跡(仁平尾敷地区)	大庭町	集落跡	奈良～近世	ピット群、須恵器片、土師器片、陶器片
144 出雲国進跡	大庭町	城館跡	弥生～中世	ピット群、溝状遺構、須恵器、土師器、陶磁器、ガラス小玉、滑石製勾玉他
145 B 7 遺跡	大庭町	散布地	古墳時代	須恵器片、土師器片
146 B 4 遺跡	大庭町	散布地	古墳時代	須恵器片、土師器片
147 B 5 遺跡	大庭町	散布地	古墳時代	須恵器片、土師器片
148 正林寺遺跡	大庭町	散布地	古墳～中世	須恵器片、土師器片、土師質土器、陶磁器他
149 No.141に同じ	大庭町	散布地	古墳～奈良	須恵器片、土師器片
150 B 1 7 遺跡	大庭町	散布地	古墳～奈良	須恵器片、土師器片
151 中西遺跡	大庭町	城館跡	奈良～平安	掘立柱建物跡2、須恵器、青磁、白磁
152 大石古墳群	大庭町	古墳群	古墳時代	方墳8基
153 潟田池遺跡	大庭町	散布地	不明	石敷構造、須恵器
154 寺跡遺跡	大庭町	散布地	不明	須恵器、土師器、古式土師器
155 有古墓群	大庭町	その他の墓	中世	3基以上
156 有遺跡	大庭町	散布地	不明	須恵器片
157 有沼遺跡	大庭町	散布地	不明	須恵器片
158 有廻横穴群	大庭町	横穴墓	古墳時代	5穴以上
159 有古墳群	大庭町	古墳群	古墳時代	方墳3基（10～15m）
160 雨乞池遺跡	大庭町	祭祀遺跡		伝承地
161 トウトウ古墳	大庭町	古墳	古墳時代	方墳（10×10m）
162 菅神谷・後谷古墳群	佐草町	古墳、横穴	古墳時代	古墳1.6基以上、横穴墓2.0穴以上、須恵器、銀環、管玉、ガラス小玉、鉢器
163 大石横穴群	大庭町	横穴群	古墳時代	群細不明
164 蔴ヶ谷横穴群	東津田町	横穴群	古墳時代	3穴以上
165 蔴ヶ谷古墳群	東津田町	古墳群	古墳時代	方墳3基（7～10m）、須恵器、土師器、刀子他
166 蔴ヶ谷遺跡	東津田町	散布地	古墳時代	須恵器片
167 根屋古墳	東津田町	古墳	古墳時代	前方後方墳か？
168 タルミ IV 遺跡	東津田町	散布地	古墳時代	須恵器片、土師器片
169 タルミ I 遺跡	東津田町	散布地	縄文～弥生	黒曜石片

名 称	所在地	種 別	時 代	遺 構・遺 物
170 タルミII遺跡	東津田町	散布地	古墳時代	土師器片
171 タルミIII遺跡	東津田町	散布地	古墳時代	須恵器片、土師器片
172 石台遺跡	東津田町	散布地	縄文～古墳、中世	縄文土器、弥生土器、須恵器、土師質土器、陶磁器
173 舟津田遺跡	東津田町	散布地	不明	須恵器片、土師器片
174 高杉1号墳	東津田町	古墳	古墳時代	前方後方墳1基(26.5m)
175 高杉2号墳	東津田町	古墳	古墳時代	方墳1基(11.5×11.5m)
176 豊日神社前遺跡	東津田町	散布地	不明	石斧
177 植岡遺跡	東津田町	散布地	不明	石斧
178 伝兵衛山古墳	東津田町	古墳	古墳時代	方墳1基(8.6×6.1m)
179 伝兵衛山古墓群	東津田町	その他の墓	中世	五輪塔、道祖神
180 高杉古墓群	東津田町	その他の墓	中世	五輪塔
181 魚見塚古墳	朝倉町	古墳	古墳時代	前方後円墳(62m)、須恵器
182 多賀宮古墳准定地	朝倉町	古墳	古墳時代	詳細不明
183 福富神社境内遺跡	福富町	散布地	不明	須恵器片
184 明事山古墳	福富町	古墳	古墳時代	方墳1基(10×10m)
185 阿弥陀寺裏山古墳群	福富町	古墳群	古墳時代	方墳5基(7~18m)
186 阿弥陀寺古墳	福富町	古墳	古墳時代	石棺式石室
187 月戸遺跡	東津田町	その他の墓	中世	古墓2基、古錢、銅製容器

(2) 出雲国分寺跡の文化財指定

出雲国分寺跡は、大正10年3月3日付け内務省告示第38号で「史跡出雲国分寺跡」として史跡に指定された。その後天平古道部分が追加指定され「史跡出雲国分寺跡附古道」と改称された（昭和35年9月17日付け文化財保護委員会告示第39号）。また平成元年3月29日付け文部省告示第36号、平成12年9月6日付け文部省告示第146号でも追加指定を受けてている。

○内務省告示第38号

官報第2573号（大正10年3月3日）

名 称	所 在 地	地 番
出雲國分寺跡	島根県八束郡竹矢村 大字竹矢字寺領	92内1、93、94、95、96、97、98、99、100、101、 104、179、180

○文化財保護委員会告示第39号

官報第10124号（昭和35年9月17日）

名 称	所 在 地	地 番
出雲国分寺跡 附古道	島根県松江市竹矢町字都免 同 字寺領 同 字ケン田 同 字三反田 同 字半原 同 字ノ橋 同 字岡田	70番の内実測3.99m ² 、209番の内実測641.17m ² 84番ノ3の内実測37.45m ² 、85番ノ1の内実測26.65m ² 190番ノ1の内実測159.67m ² 199番ノ1の内実測164.02m ² 、199番ノ3の内実測 161.73m ² 、200番ノ1の内実測250.38m ² 208番ノ1の内実測401.20m ² 、208番ノ2の内実測 201.83m ² 、 589番の内実測93.38m ² 、590番の内実測106.56m ² 、 591番の内実測99.12m ² 、592番の内実測103.35m ² 593番の内実測2.50m ² 、594番の内実測3.85m ² 、 595番の内実測17.63m ² 、596番の内実測13.42m ² 、 599番の内実測5.53m ² 上記の地域内に介在する道路敷、水路敷および畦 畔を含む。

○文部省告示第36号

官報第60号（平成元年3月29日）

名 称	所 在 地	地 番
出雲国分寺跡 附古道	島根県松江市竹矢町字寺領	85-9、98-2、103-1、103-5、103-6、105-4、 105-6、105-7、181-1、182-3、189-2、 1619-3、1619-4 上記の地域内に介在する道路敷、水路敷を含む。

○文部省告示第146号(平成12年9月6日)

名 称	所 在 地	地 番
出雲国分寺跡 附古道	島根県松江市竹矢町字寺領 同 字上竹矢	105番ノ1、105番ノ2、105番ノ5、105番ノ8、105番 ノ9、106番ノ1、106番ノ2 108番、108番ノ1 上記の地域内に介在する道路敷を含む。

○史跡出雲国分寺跡附古道史跡指定地番一覧

(主要御藍部)

地 番	面 積 m ²	指 定	買 上	地 番	面 積 m ²	指 定	買 上
字寺領97-3	16.00	T10	S33	字寺領189-2	591.00	H1	S45
〃 99-1	803.00	〃	〃	〃 103-5	225.00	〃	〃
〃 100	142.00	〃	〃	〃 98-2	47.00	〃	〃
〃 101	85.00	〃	〃	〃 1619-3	52.00	〃	〃
〃 104	1,193.00	〃	〃	〃 103-1	19.00	〃	〃
〃 98	353.71	〃	S44	〃 103-6	95.00	〃	〃
〃 97-4	350.00	〃	〃	〃 105-6	26.00	〃	〃
〃 105-4	584.00	H1	S45	〃 105-7	25.00	〃	〃
〃 179	1,319.00	T10	〃	〃 1619-4	27.00	〃	〃
〃 180	72.00	〃	〃	〃 181-1	1,067.00	H1	S45・46
〃 99-2	466.00	〃	〃	〃 105-2	312.00	H12	H12
〃 96	905.00	〃	〃	〃 106-1	312.00	〃	〃
〃 95	628.00	〃	〃	字上竹矢108	328.36	〃	〃
〃 97-2	95.00	〃	〃	〃 108-1	79.00	〃	〃
〃 97-1	869.00	〃	〃	字寺領105-1	52.00	〃	〃
〃 94-1	909.00	〃	〃	〃 105-5	29.00	〃	〃
〃 94-2	459.00	〃	〃	〃 105-8	2.66	〃	〃
〃 93	542.00	〃	〃	〃 105-9	13.00	〃	〃
〃 92-1	413.00	〃	〃	〃 106-2	219.00	〃	〃
〃 85-9	264.50	H1	S45				
〃 182-3	204.00	〃	〃	合 計	14,193.23		

(天平古道部) 島根県松江市竹矢町

地 番	面 積 m ²	指 定	買 上	地 番	面 積 m ²	指 定	買 上
字郡免70	3.99	S35	S35	字寺領84-3	37.45	S35	S35
字寺領85-1	26.65	〃	〃	字半原208-1	401.20	〃	〃
字クケン山190-1	159.67	〃	〃	〃 208-2	201.83	〃	〃
字三反田200-1	250.38	〃	〃	字闘田596	13.42	〃	〃
〃 199-3	161.73	〃	〃	〃 595	17.63	〃	〃
字郡免209	641.17	〃	〃	字三反田199-1	164.02	〃	〃
字闘田599	5.53	〃	〃	字一ノ橋589	93.38	〃	〃
字一ノ橋590	106.56	〃	〃	〃 591	99.12	〃	〃
〃 592	103.35	〃	〃	赤道・青道	381.57	〃	〃
字闘田593	2.50	〃	〃				
〃 594	3.85	〃	〃	合 計	2,875.00		

(3) 史跡内の整備状況

①発掘調査

【昭和30～31年】

地方史研究所による出雲・隠岐総合調査の中で、石田茂作氏を班長とする「国分寺班」により行われた調査である。第1次調査として昭和30年11月15日～12月4日、第2次調査として昭和31年7月15日～7月30日まで実施された。

調査方法は、それまで礎石の存在が知られていた「ダドコサン」周辺でまずボーリング調査を行い、その結果礎石の存在が確認された部分を発掘する形で行われた。それにより確認された遺構は僧房跡とされ、そこから伽藍を想定して調査区を設定し、最終的には僧房跡のほかに講堂跡、金堂跡、南門跡が一直線上に並ぶ東大寺式伽藍であることが判明した。その他にも塔跡、南門跡から南方の三軒屋に至る間には幅20尺の石敷道路、南門跡の東方延長上では土塀の遺構などが確認された。さらに周辺に残る条里区画との関連から、寺域の範囲は方2町四方であると想定されるなど、画期的な成果が得られた。

(参考文献：地方史研究所「出雲国分寺址・国府址調査報告」昭和38年)

【昭和45～46年】

島根県教育委員会が「八雲立つ風土記の丘」を設置するにあたり、出雲国分寺跡の整備を行うこととなり、その上で基幹条件となる遺跡の規模、構造、構築状態を確認するための調査を行った。調査主体は島根県教育委員会で、第1次調査として昭和45年6月18日～6月28日、第2次調査として昭和46年2月17日～3月25日まで実施された。

調査の結果、新たに発見された遺構は、中門跡と中門跡から講堂跡につながる回廊跡、金堂跡から講堂跡、講堂跡から僧房跡につながる瓦敷道路などがある。また昭和30～31年の調査成果から変更が加わった点は、従来推定された塔跡はさらに南方へずれた位置に存在すること、経蔵跡と推定された場所はこれを確証するだけの遺構が見られないことなどが明らかとなった。

(参考文献：島根県教育委員会「八雲立つ風土記の丘周辺の文化財」昭和50年)

【平成5年】

松江市が計画した「特殊林道井ノ奥上竹矢線開設事業」が、出雲国分寺跡の史跡指定地の北西隣接地に計画されていたことから事前に発掘調査を実施した。調査主体は松江市教育委員会で、平成5年9月20日～11月26日まで実施した。

調査の結果、東西方向に走る溝状遺構1箇所と瓦溜りが発見され、多量の国分寺関連の瓦類、土器類が検出された。

(参考文献：松江市教育委員会、財団法人松江市教育文化振興事業団「出雲国分寺跡発掘調査報告書」平成6年)

②整備

島根県教育委員会により、「八雲立つ風土記の丘」設置に伴って、昭和45～46年度にかけて史跡指定地内の整備が行われている。

(第1年度)

工 期 昭和45年12月4日～昭和46年7月31日

施工内容 ・道路付替 243m

・用配水路付替、新設、石積水路3,948m、U字フリューム96m、盲暗渠464m

(第2年度)

工 期 昭和46年11月20日～昭和47年3月25日

施工内容 ・整地…ブルドーザー掘削・押土833.5m³、盛土1,792.5m³

・金堂跡・中門跡・南門跡・塔跡整備

…コンクリート平板敷き1,639.3m²、礎石補充（自然石・模造石67個）

・回廊整備…盛土156m³

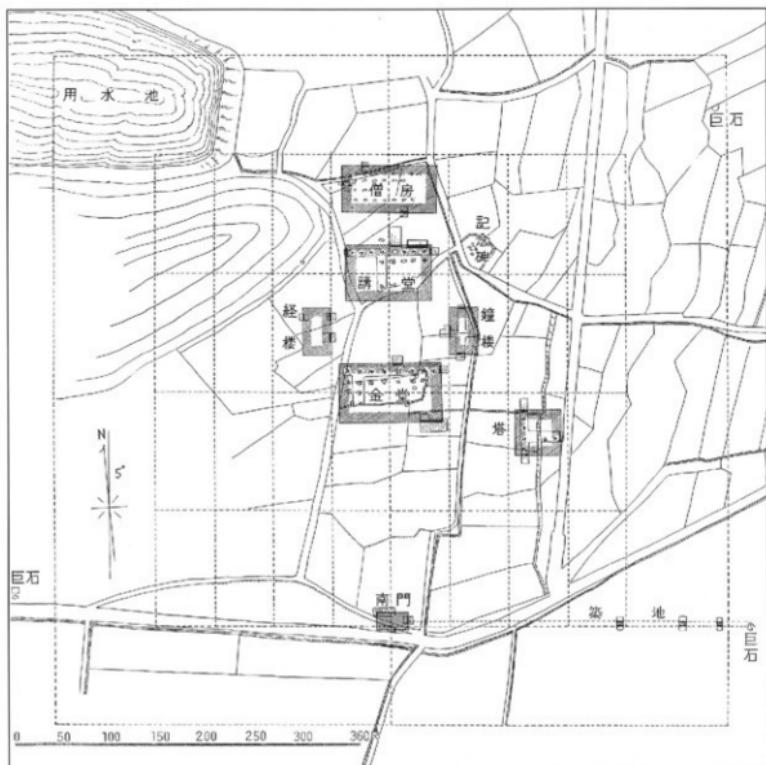
・遊歩道整備…路面用碎石1,551.5m²（厚さ15cm）

・緑地造成…養植芝8,217.6m²

・排水溝整備…石積溝704m

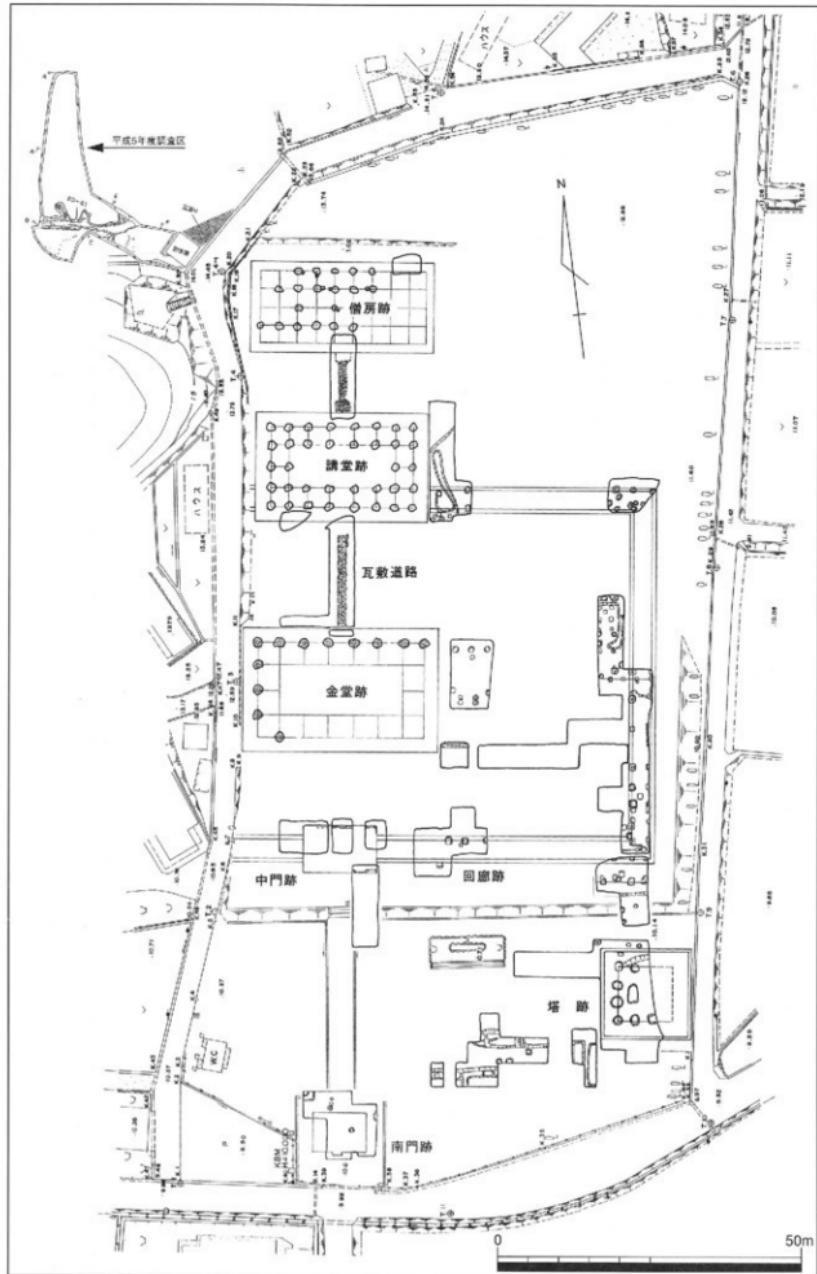
・基壇の階段整備…11箇所

(引用：島根県教育委員会「八雲立つ風土記の丘設置事業報告」昭和48年)

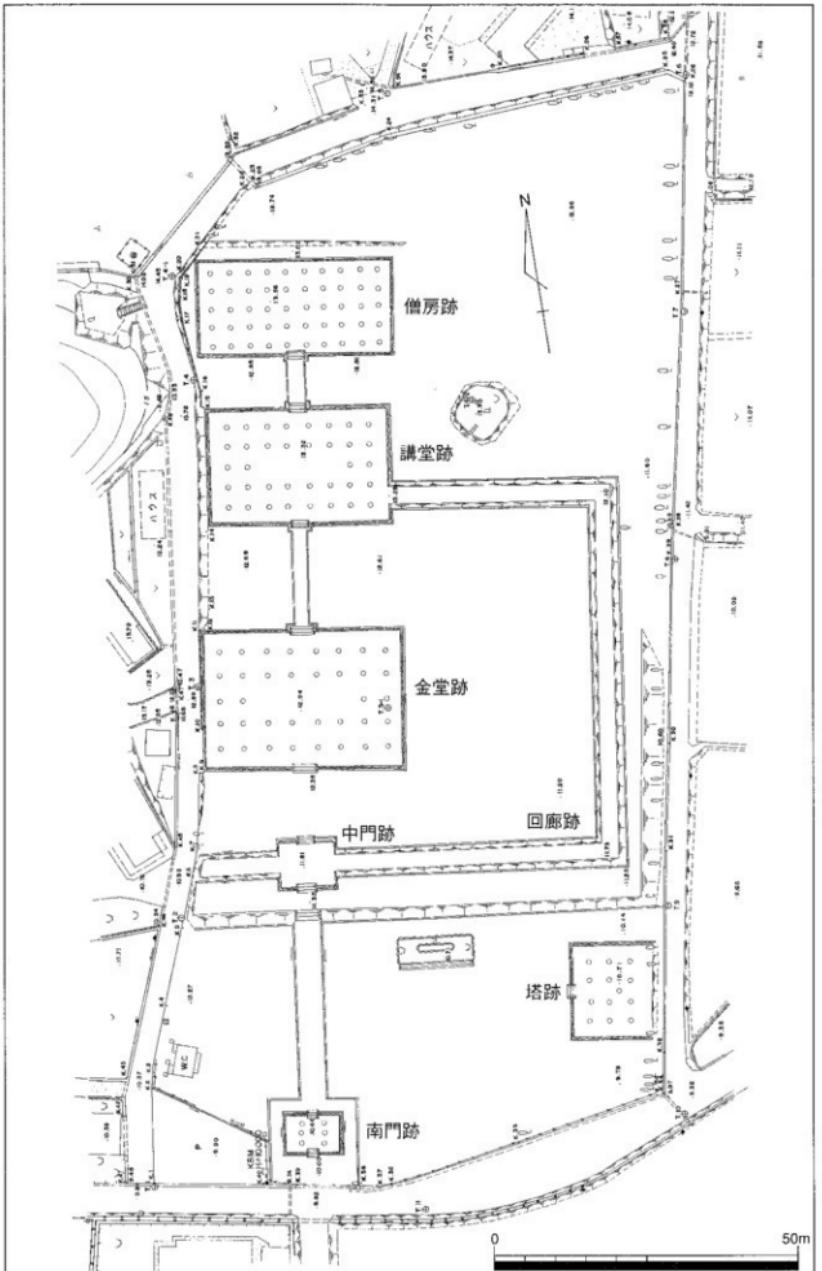


第4図 昭和30年調査成果図

(地方史研究所：出雲国分寺址・国府址調査報告書より転載)



第5図 昭和45・46年度、平成5年度調査成果図



第6図 出雲国分寺跡現況平面図（昭和63年測量）

第2章 事業の概要

(1) 調査に至る経緯

出雲国分寺跡は、松江市竹矢町字寺領を中心とする低丘陵東南端部の台地に位置し、これまでの発掘調査の結果、伽藍配置は南から南門、中門、金堂、講堂、僧房が一直線に並び、回廊が金堂を中心において中門から講堂へ取り付く東大寺式伽藍であることが明らかとなっている。塔跡はこれら伽藍・中根部からはなれて独立し、回廊外の南東部に位置している。寺域は方2町（約218m）と推定され、その中心部を方500尺（約148.5m）に区画して中心伽藍を配置しているものと考えられている。また、南門跡から南方へは幅20尺の石敷道路（天平山道）が存在することも知られている。国分寺の存続時期は出土瓦や土器の年代から、およそ中世中葉まで至るものと推定されている。

これまでの出雲国分寺跡の整備状況は、大正10年に中心伽藍部分が国の史跡として指定されて以来、昭和35年に古道部分、平成元年に伽藍周辺部分の追加指定を受け、昭和45、46年度の風土記の丘開設に併せて土地買上げ及び造構の平面整備が行われていた。

その後平成9年3月に鳥取県が策定した「古代文化“出雲”整備構想—八雲立つ風土記の丘—」の中では、出雲国分寺跡の今後の整備について、発掘調査による寺域の確認をもとに追加指定や建物復原、ガイダンスの設置などの方向付けがなされた。これに基づき松江市では平成10年3月に「史跡出雲国分寺跡整備基本構想」を策定し、史跡出雲国分寺跡および周辺地域を文化、観光の拠点として、訪れる人が古代文化に親しみ、分かりやすい魅力ある整備を目指すこととし、平成10年度から寺域の確認調査を国庫補助事業として実施することとなった。

(2) 調査実施期間

調査年度	トレンチ名	現地調査期間
平成10年度	T-1~4	平成10年11月2日～平成11年2月26日
平成11年度	T-5~17	平成11年10月28日～平成12年2月25日
平成12年度	T-18~23	平成12年11月15日～平成13年3月30日
平成13年度	T-24~31	平成13年11月22日～平成14年3月29日
平成14年度	T-32~37	平成14年10月28日～平成15年2月14日

(3) 調査体制

松江市教育委員会	教 育 長	原 敏 (平成10年4月～平成12年9月)
	同 上	伊藤 忠志 (平成12年10月～平成13年3月)
	同 上	山本 弘正 (平成13年4月～)
	教 育 次 長	田中寿美夫 (平成10年4月～平成11年6月)
	副 教 育 長	神田 義之 (平成11年7月～平成13年3月)
	同 上	友森 勉 (平成13年4月～平成14年3月)
	同 上	中島 秀夫 (平成14年4月～)
	生涯学習課長	谷 正次 (平成10年4月～平成12年3月)
	同 上	川原 良一 (平成12年4月～平成14年3月)
	文化財室長	岡崎雄二郎 (平成10年4月～) ※平成13年4月から文化財課長
	文化財係長	吉岡 弘行 (平成10年4月～)
	文化財係副主任	飯塚 康行 (平成10年4月～) ※平成13年4月から調査係長
	文化財係主任主事	古藤 博昭 (平成11年4月～平成14年3月) ※平成13年4月～平成14年3月まで調査係主任主事
	調査係主任	藤原 幸二 (平成13年4月～)
	同 上	松浦 俊充 (平成14年4月～)
	調査係主事	藤井 一 (平成13年4月～)
	調査補助員	近藤 雅彦 (平成10年4月～平成12年2月)
	同 上	山根 克彦 (平成10年4月～平成15年4月)
	同 上	飯塚 啓太 (平成10年4月～)
	同 上	下田 幹子 (平成12年4月～平成14年3月)
	同 上	飛出恵美子 (平成14年4月～平成15年3月)
	同 上	原 英誉 (平成15年4月～)
	遺物整理員	小山 泰生 (平成15年5月～)
		荻野 哲二 (平成10年4月～)

第3章 調査の概要

(1) 平成10年度調査

平成10年度の調査は、史跡指定地の東側水田地において、寺域の東限を確認する目的で調査を実施した。トレントは中心伽藍の主軸に直交方向でトレントを4本（T-1～4）設定した。

① T-1調査区（第8～10図、第15～16図、第19～20図）

T-1は金堂跡から25～27m南方の中門跡に取り付く回廊跡の東延長線上、国分寺中軸線から東方へ65～90mの地点で東西方向に設定したトレントで、水田の畦を境に西側をT-1西、東側をT-1東とした。

【土層堆積状況】

T-1西、東とともに堆積土の内、第1～3層までは後世の水田の耕作土及び床土で、青灰色～黄灰色の粘質土がT-1西の西側で薄く45cm程度、T-1東の東側で厚く65cm程度の厚さで見られた。土層中に国分寺関連の瓦片や須恵器片が若干含まれているが、近世の陶器片も混在している。

第4～6層は遺物包含層で、黒灰色または黄褐色～橙褐色を呈する土層が15～30cmの厚さで見られた。特に第3層との境界面で多数の遺物が認められ、国分寺関連の軒丸瓦片（No.62～64）、軒平瓦片（No.65～67）、須恵器の壺蓋（No.1～2）、高台坏（No.3～5、7～8）、長頸壺（No.9）、土師質土器片（No.6）、土師器の把手（No.10）などが検出された。

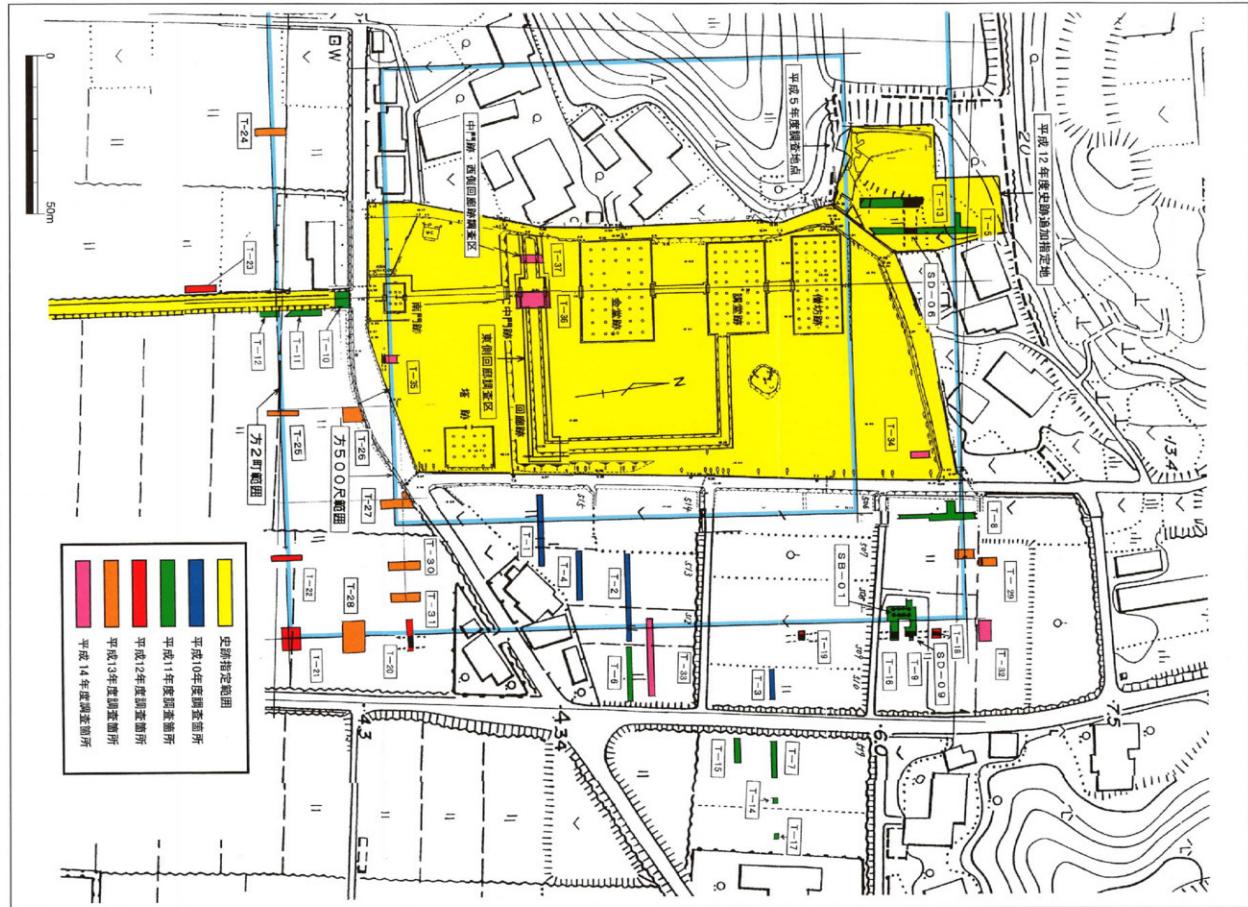
第7層以下は国分寺建設時の造成上（整地層）の可能性が考えられる土層で、暗灰色を基調とした強粘性土に黄色または灰白色の粘土をブロック状に含む。その厚さはT-1西の西端で90cm、T-1東の東端で110cmを測る。基本的に遺物を含まないが、土師器の細片がごくまれに認められる。

整地層の下は淡緑灰色を呈する地山で、粘性がほとんどない砂質の軟地盤である。トレントの西端と東端での地山のレベル比は40cmで東端が低くなっている。

【SD-02】

第3層と第4～6層との境界面で検出された遺物群を除去した段階で検出された溝状遺構で、T-1西の西端からT-1東まで連続して一直線に東西に走り、SD-03に切られて消失する。

国分寺の中心伽藍の主軸線はほぼ真北の方位を示すので、この主軸線をTNとすると、SD-02の方位はTN-91°-Eとなり、ほぼ主軸線に直交する方位を示す。溝の規模は幅50～60cm、深さ20～30cmを測る小規模なもので、灰褐色の埋土中からは国分寺関連の軒丸瓦片（No.68～69）、軒平瓦片（No.70）、丸瓦片（No.71）、平瓦片（No.72）、須恵器の壺蓋（No.11～12）、高台坏（No.13、17）、口縁部が屈曲する壺類（No.14）、土師質土器片（No.15～16、18）、上玉（No.19）、青めのうチップ（No.20）などが検出された。



第7図 出雲国分寺跡発掘調査 レンチ配図 (S-1/1200)

【SD-03】

T-1 東で検出された溝状遺構である。溝の東端は調査区外となるため、幅は不明であるが、1m以上の幅で深さは30cm以上のものと考えられる。溝の方位はT N-21° -Eを示す。埋土は青灰色~灰褐色の粘質土で、若干の瓦類(No73~74)と須恵器片(No21~23)が検出されたが、遺物包含層(第4~6層)やSD-02がSD-03によって切られている状況から考えると後出の溝であると推定される。

【ピット群、SK01】

T-1 西、およびT-1 東では、SD-02の検出面および整地層上面でピット25穴、土壌1 (SK-01) が検出された。

検出層位	ピット、土壌名称(出土遺物)
SD-02 検出面	P-1(須恵器片)、P-2(なし)、P-3(石)、P-4(なし)、 P-5(平瓦片、上器片)、P-6(なし)、P-7(須恵器片No26、フイゴ 羽口片No27)、P-8(須恵器环蓋片No28)、P-11(平瓦、丸瓦片、須恵器 环片)、P-12(土師質上器片)、P-13(なし)、P-14(平瓦片、須恵器片)、 P-15(平瓦片、須恵器片)、P-16(平瓦片)、P-17(なし)、P-18(平 瓦片、須恵器环片)、P-19(なし)、P-20(軒平瓦片No75)、道貝瓦No76、 平瓦片)
整地層上面	P-9(平瓦片)、P-10(なし)、P-21(須恵器片No30~33)、P-22(な し)、P-23(なし)、P-24(なし)、P-25(なし)、SK-01(須恵器 环No24、土師器甕No25)

ピット群の内、SD-02 検出面で確認されたピットは、SD-02 に平行して列状をなすものがあり、南辺では(P-3、5、6、7、8、11、12、13、14、15、16)、北辺では(P-17、18)がある。これらのピットの規模は直径20~35cm程度、深さ20cm~50cmを測り、暗灰褐色でやや砂質の埋土中に瓦片や須恵器片などを含んでいる。ピットの間隔は不等間隔で、2.0~3.8mを測る。なお、南辺のピット列と北辺のピット列はSD-02を挟んでほぼ平行に並び、その間隔は約90cmを測る。柵列または建物関連の遺構である可能性が考えられる。

整地層上面で検出されたピットの内、SD-02 の底面(あるいは整地層上面)で検出されたピット(P-9、10、22、23、24、25)がある。これらも列状に並んでいるように見られるが、ピットの規模や間隔のばらつきが大きく、柱穴であるかどうかは判断できない。

また、SK-01も整地層上面で検出された土壌状遺構である。サブトレで半裁した後に確認されたため、全容は把握できなかったが、不整形な円形で、直径3m程度、深さ1m程度の土壌で、暗灰色を呈する粘質の埋土中から須恵器片片(No24)、土師器甕片(No25)が検出された。

② T-2 調査区 (第11~12図、第17図、第20図)

T-2は金堂跡中心から真東方向へ85~113mの地点で東西方向に設定したトレンチで、水田の畦を境に西側をT-2西、東側をT-2東とした。

【土層堆積状況】

T-2東西ともに堆積土の内、第1～3層までは後世の水田の耕作土及び床土で、青灰色または茶褐色の粘質土がT-2西の西端で薄く20cm程度、T-2東の東端で厚く45cm程度の厚さで見られた。土層中には国分寺関連の瓦片や須恵器片がわずかに包含されている程度である。

第4層は遺物包含層で、橙褐色を呈する土層が5cm程度の厚さで見られた。遺物の出土量はT-1に比べると少ない。国分寺関連の軒丸瓦片（No.77）、軒平瓦片（No.78）および平瓦片が大半で、その中に若干須恵器の瓶底部片（No.35）、高台付皿（No.36）、土師質土器片（No.34）が混在していた。

T-2西では第5層以下、T-2東では第25層以下は国分寺建設時の造成土（整地層）の可能性が考えられる上層で、暗灰色を基調とした強粘性土に黄色または灰白色の粘土をブロック状に含む。その厚さはトレンチ西方で90cm、東方で100cmを測る。基本的に遺物を含まないが、土師器の細片がごくまれに認められる。

整地層の下は淡緑灰色を呈する地山で、粘性がほとんどない砂質の軟地盤である。トレンチの西端（T-2西）と東端（T-2東）での地山のレベル比は60cmで東端が低くなっている。

【SD-04】

T-2で確認された遺構はT-2西の整地層上面で検出されたSD-04のみである。L字状に曲がる溝状遺構で、最大幅100cm、深さ25cmを測る。暗灰褐色を呈する砂質の埋土中に須恵器の高台付（No.36）などの須恵器片、平瓦片などが少量検出された。

③T-3調査区（第13図、第17～18図、第21図）

T-3は金堂跡から46～48m北方、国分寺中軸線から東方へ122～132mの地点で東西方向に10×2mの規模で設定したトレンチである。

【土層堆積状況】

堆積土の内、第1～5層までは水田の耕作土及び床土で、灰褐色～黄灰色の粘質土が西方で95cm程度、東方で100cm程度の厚さで見られた。土層中にはほとんど遺物を含まない。

第6層は遺物包含層で、暗橙褐色を呈する土層が5cm程度の厚さで見られた。遺物は国分寺関連の軒平瓦片（No.79～80）と、須恵器の环蓋片（No.37）、高台付（No.38～39、41～42）、土師質土器片（No.40）が混在していた。

第7層以下は国分寺建設時の造成土（整地層）の可能性が考えられる土層で、暗灰色を基調とした強粘性土に黄色または灰白色の粘土をブロック状に含む。その厚さはトレンチ西方で90cm、東方で110cmを測る。基本的に遺物を含まないが、土師器の細片がごくまれに認められる。

整地層の下は淡緑灰色を呈する地山で、粘性がほとんどない砂質の軟地盤である。トレンチの西端と東方での地山のレベル比は20cmで東方が低くなるが、更に地山面は東端で落ち込む状況が見られる。しかし、この部分での整地層の堆積状況に変化は認められない。

【SD-01】

第6層の上面で検出された遺物群を除去した段階で検出された溝状構造で、T-3の西端から東端にかけて東西に走るが、T-1のSD-02のように直線的ではなく、ゆるやかにS字にカーブしている。国分寺の中心伽藍の主軸線をTNとするとき、SD-01の方位は西からTN-86°-E→TN-98°-E→TN-88°-Eとなる。溝の規模は幅50-70cm、深さ25cm程度を測る小規模なもので、灰色砂質の埋土中からは国分寺関連の軒丸瓦片（No.81-82）、軒平瓦片（No.83）、平瓦片（No.84-85）のほかに須恵器の坏蓋（No.43、55）、無高台の皿（No.44）、坏類（No.45、47-48）、高坏（No.46）、高台坏（No.50-53、56）、台付皿（No.54、57）、甕（No.49）、壺類底部（No.58、59）、土師質土器（No.60）が検出された。

また、トレント西端部の南拡張区で瓦、須恵器などの遺物の集中した部分があり、遺物の内容はSD-01とほぼ同一であるが、SD-01との関連性は不明である。

④T-4調査区（第14図、第18図、第21図）

T-4は金堂跡から11-13m南方、国分寺中軸線から東方へ83-99mの地点で東西方向に16×2mの規模で設定したトレントである。

【土層堆積状況】

堆積土の内、第1-3層までは水田の耕作土及び床土で、暗青灰色および暗茶灰褐色の粘質土が西方で30cm程度、東方で40cm程度の厚さで見られた。土層中に国分寺関連の瓦片や須恵器片がわずかに含まれている。

第4、6-8層は遺物包含層で、暗青灰色を呈する砂質、または粘質の上層が15-30cmの厚さで見られた。特に第4層と7層の境界面で多数の遺物が認められ、国分寺関連の軒丸瓦片（No.86）、軒平瓦片（No.87）のほか、わずかに須恵器の細片が混在していた。

第9層以下は国分寺建設時の造成土（整地層）の可能性が考えられる土層で、暗灰色を基調とした強粘性土に黄色または灰白色の粘土をブロック状に含む。その厚さはトレント西方ではSK-02のために不明であるが、東方では110cmを測る。基本的に遺物を含まないが、土師器の細片がごくまれに認められる。

整地層の下は淡緑灰色を呈する地山で、粘性がほとんどない砂質の軟地盤である。トレントの西端と東端での地山のレベル比は20cmで東端が低くなっている。

【SK-02】

SK-02は整地層上面で確認された土壌状構造である。平面プランを確認できたのは第14層（整地層）の上面であるが、トレント北壁の土層観察では、第6層（遺物包含層）の上面から掘り込まれている。土壌の規模は、第14層上面ではほぼ円形で東西径1.4m、南北径1.3m、深さ1.5mを測るが、第6層上面では東西径3.9m以上で深さ2.1mの規模となる。

土壤の埋土は黒灰色を呈する強粘性土で、土壤底部付近から土師器甕（No.61）が検出された。

【SD-05】

トレントの土層断面、第4層と第7層との境界面で検出された溝状遺構で、トレントの北壁と南壁に断面で観察された。溝の方位は、トレントを横断する形で南北に伸び、国分寺の中心伽藍の主軸線をTNとすると、TN-1°-Wとなり、ほぼ主軸線と平行の方位を示す。溝の規模は北部で幅95cm、深さ20cm、南部で幅110cm、深さ20cmを測る小規模なもので、青灰色の砂質埋土中からは国分寺関連の軒平瓦(№88)の他、平瓦片(№89-90)が検出された。土器類は検出されていない。

⑤平成10年度調査まとめ

【遺構について】

平成10年度の調査で検出された遺構は、溝状遺構5、土壤2、ピット25である。この内、国分寺に関連する溝状遺構はSD-02で、その方向が国分寺の主軸とほぼ直交であることから、国分寺との関連性が認められる。またSD-01はやや蛇行した溝状遺構であり、その方向性が一定しないものの、溝の幅や深さ、埋土上などがSD-02と共に共通性があることから、国分寺と関連性のあるものと思われる。また両者の溝の埋土中に含まれる遺物はとともに国分寺関連の瓦片であり、土器類も8c末~9c代のものであることは、両者が同時期に機能していたことを示すものである。これらの溝の性格については排水機能などが考えられるが、小規模で浅い溝であることから何らかの建物に付随した雨落溝の可能性も考えられる。特にSD-02の南辺および北辺の一部では溝と平行に並んだピット列が存在するので、柵列または塀に伴う溝の可能性が考えられる。

また、SD-05についても国分寺の主軸とほぼ平行であるため、国分寺関連の溝状遺構であると考えられる。検出範囲が狭いために出土遺物が少ないが、溝の幅や深さ、埋土の特徴はSD-02とほぼ同一である。特に注目される点としては、溝中から国分寺軒平瓦2類(注1)に属する瓦(№88)が完形で出土したことであり、他の溝では出土遺物が瓦、土器とともに細片化しているのに対して相違が認められる。

SD-03はその方位が国分寺の主軸と関連性に乏しく、土層状況からもSD-02より後出のものであるが、遺物としては国分寺関連の瓦片や、土器片が出土しているため、寺域の区画溝の可能性は薄いとしても国分寺関連の溝状遺構であるものと考えられる。またSD-04も同様に、その方向性からは国分寺の区画溝とは考え難いが、出土遺物が国分寺関連の瓦片や、土器片であることから考えると、何らかの国分寺関連の溝状遺構であると考えられる。

土壤状遺構については、SK-01と02がある。いずれも出土遺物が少ないが、その時期から国分寺関連のものと考えられる。遺構の性格は不明である。

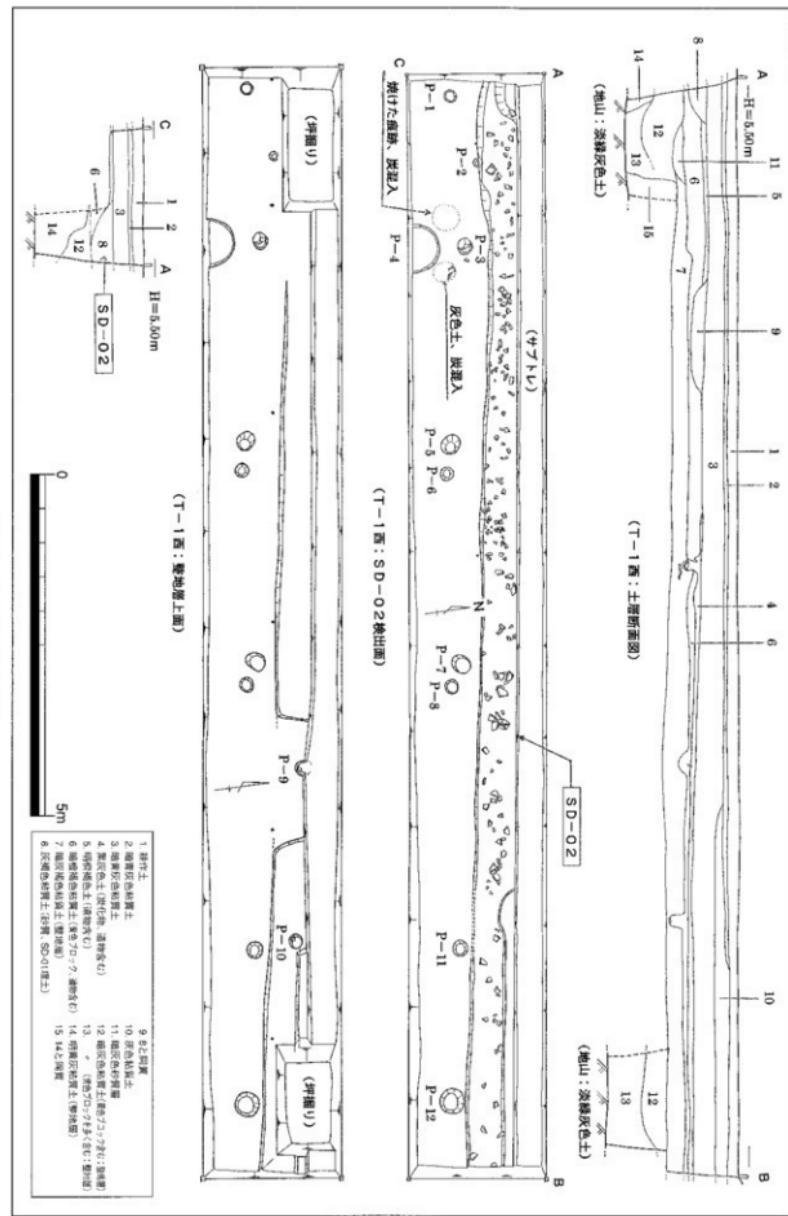
ピットはT-1でのみ検出された。整地層上面で検出されたものと、遺物包含層上面で検出されたものがあり、包含層上面でのピット列はP-5、6や、P-7、8のように建て替えの形跡が認められる。ピット列は柵状遺構、あるいは塀のような施設の存在を窺わせるものであるが、調査区の制約上、断定はできない。また、P-7の埋土中からは須恵器片とともにフイゴの羽口片(№27)が検出され、また、SD-02の埋土中からは青めのうのチップ(№20)が検出されていることから考えると、付近に鍛冶場跡や玉作関連の工房跡の存在も考えられる。

【整地層と寺域について】

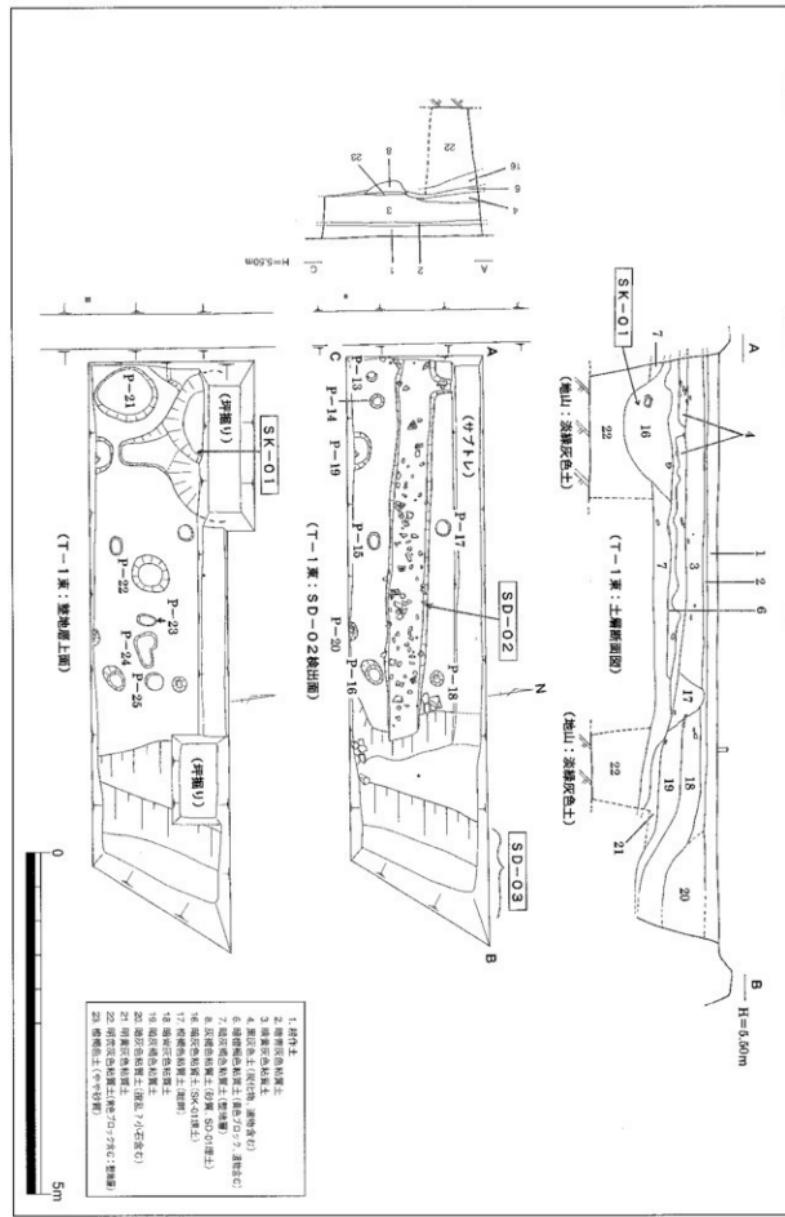
平成10年度の調査では、整地層は各トレンチで確認された。いずれも暗灰色を基調とした強粘性土に黄色または灰白色の粘土をブロック状に含むもので、ほとんど無遺物層であるが、まれに土師器の細片が含まれる。整地層の厚さは各トレンチで90~110cmを測り、広範囲に均一に存在しているものと考えられる。整地層の下では淡緑灰色の地山が各トレンチで確認された。いずれのトレンチでも西から東にかけて緩やかな勾配で傾斜している状況が観察されるが、T-3の東端部では落ち込んだ状況が見られる。

平成10年度の調査では、国分寺主軸から東へ1町の地点で明確な溝状遺構は検出されなかったため、寺域の東限を明らかにし得なかった。国分寺の主軸に平行な溝状遺構としてはSD-05が検出されているが、国分寺主軸から東方89mの位置にあるため、寺域の区画溝として断定することは困難であると考えられた。

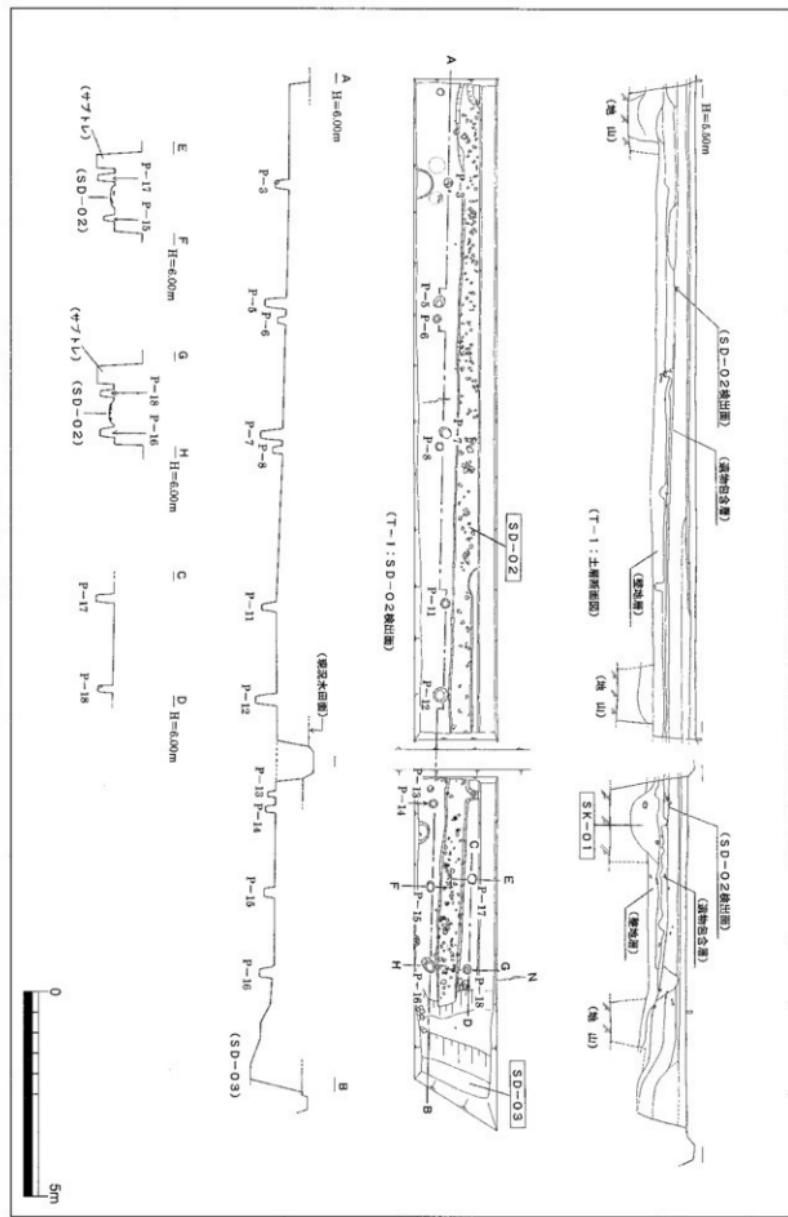
(注1) 前島己基氏の分類による(島根県教育委員会『八雲立つ風土記の丘周辺の文化財』昭和50年)

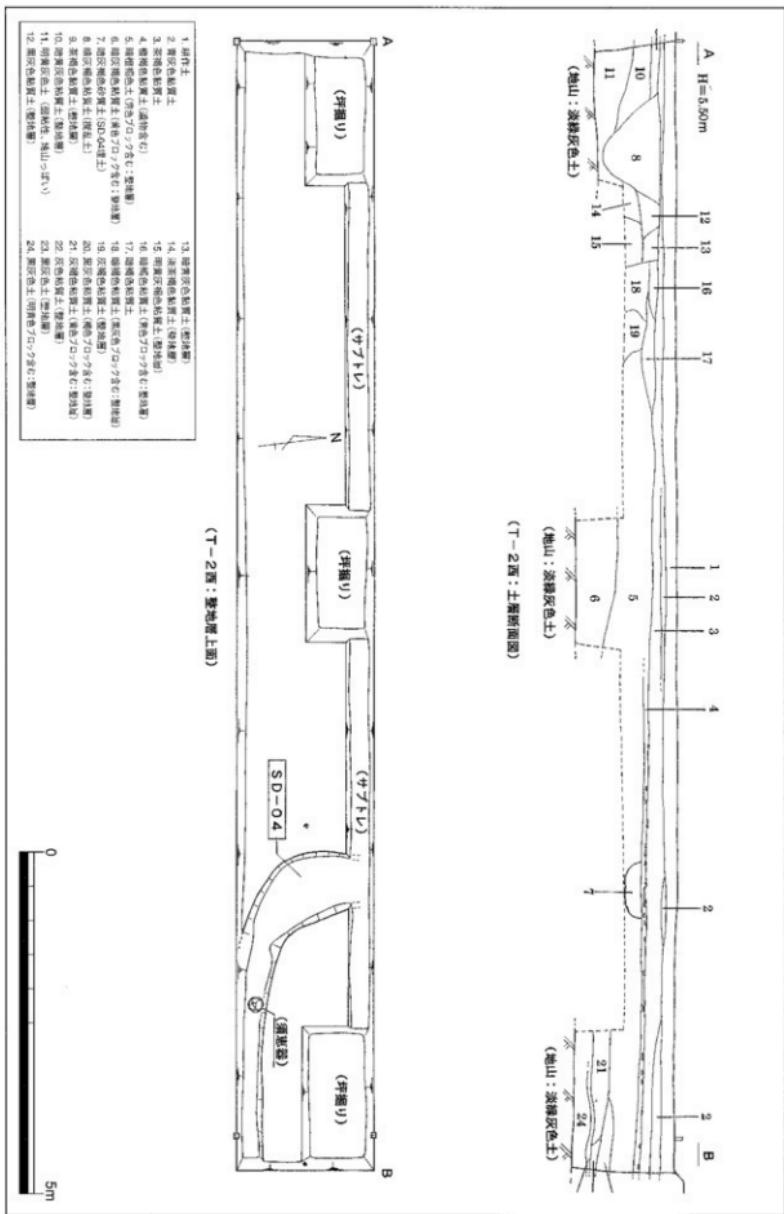


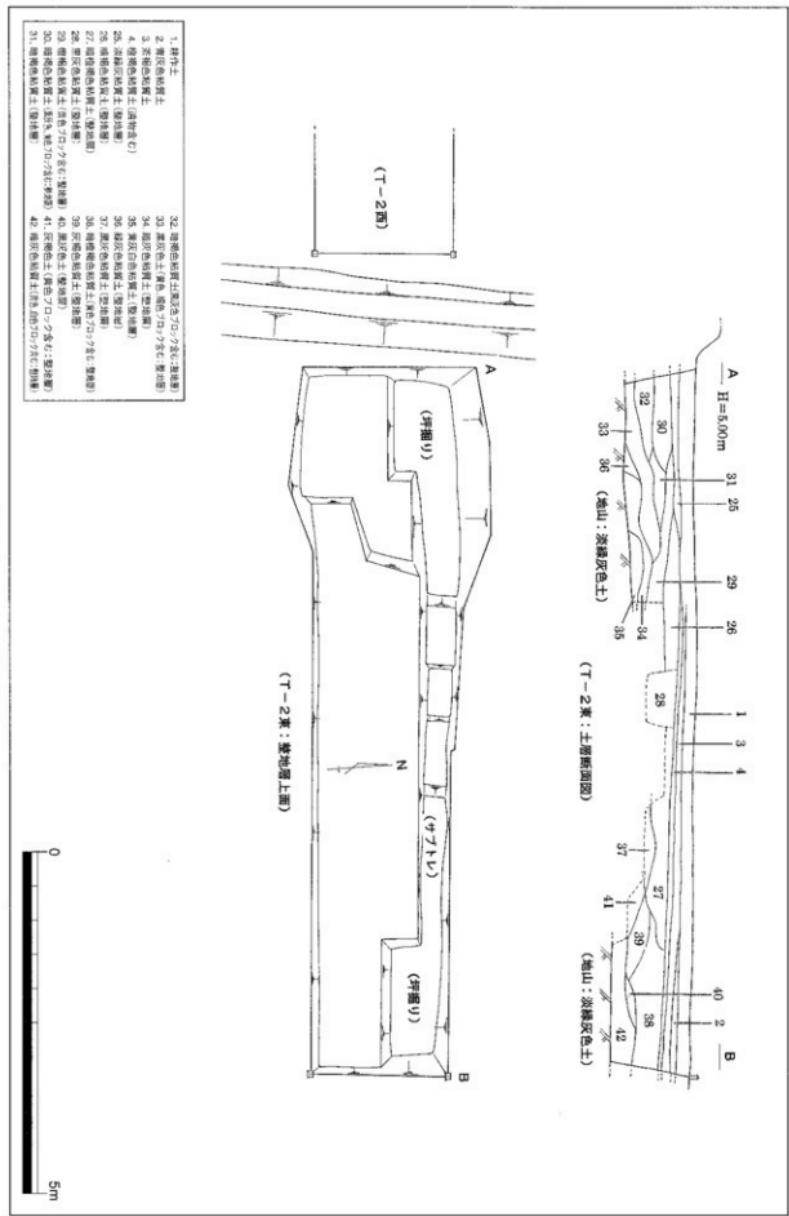
第8圖 T-1西調查成績圖



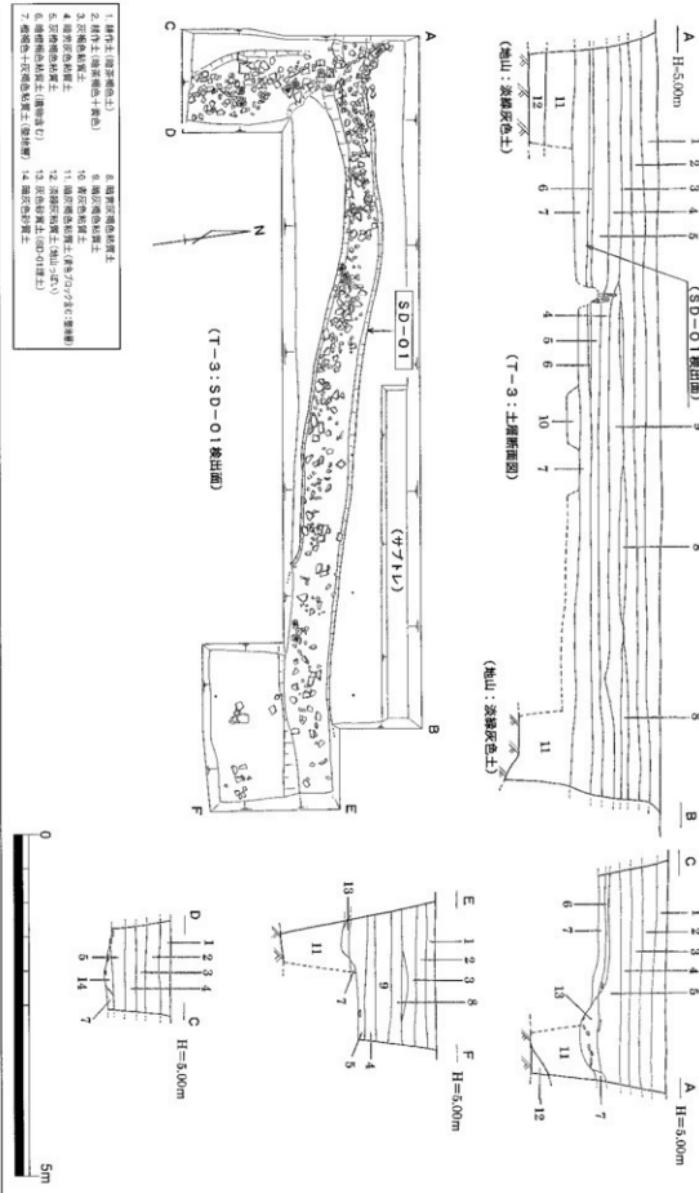
第9図 T-1番・SD-02棟成果図



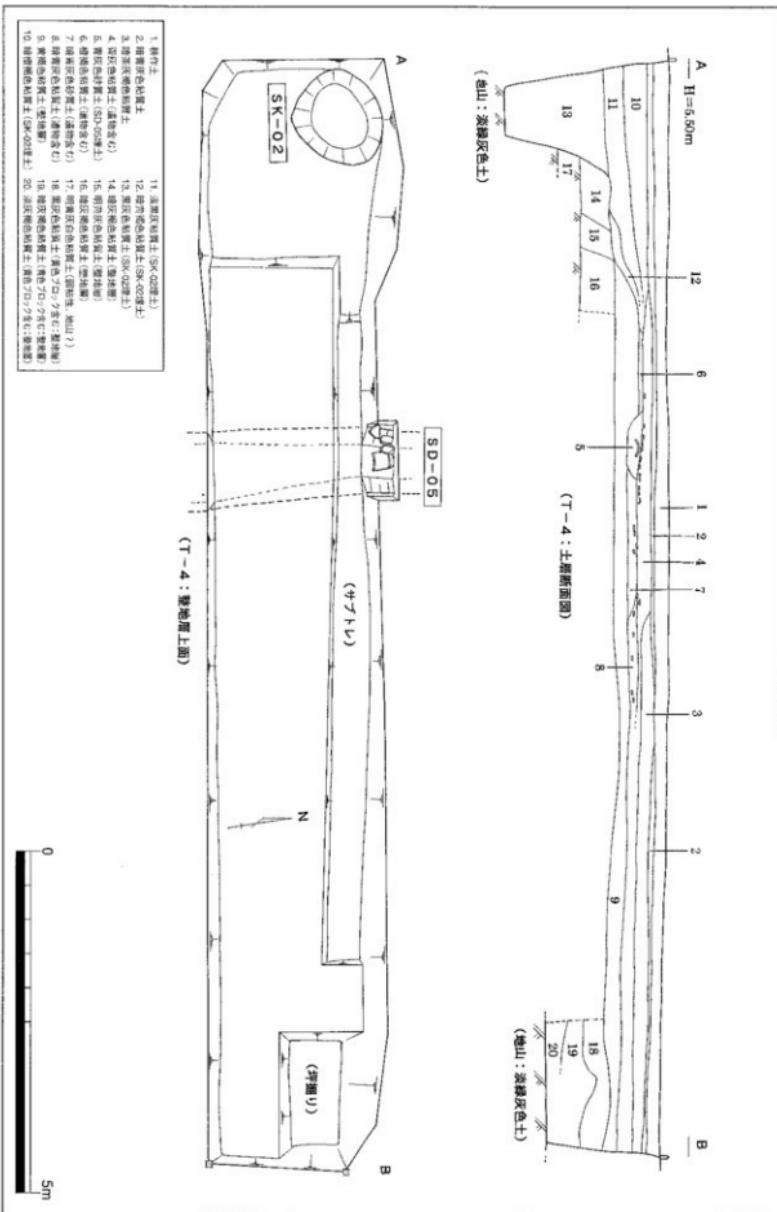




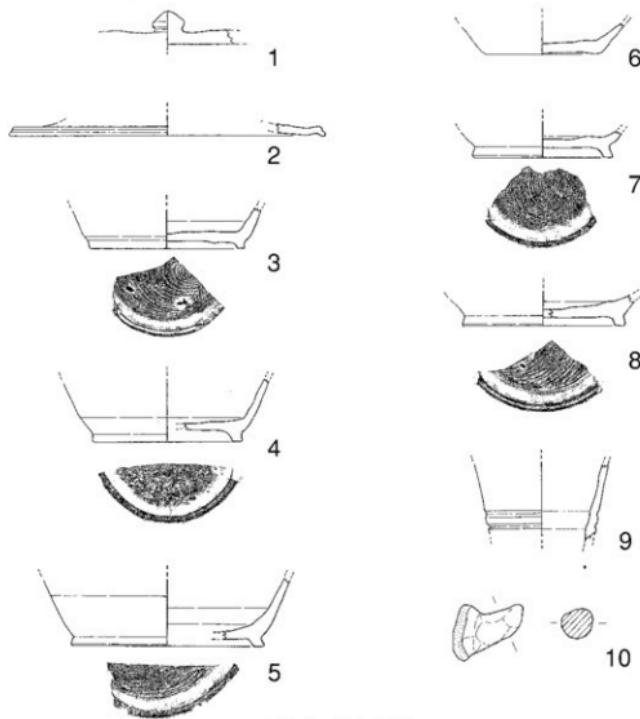
第12回



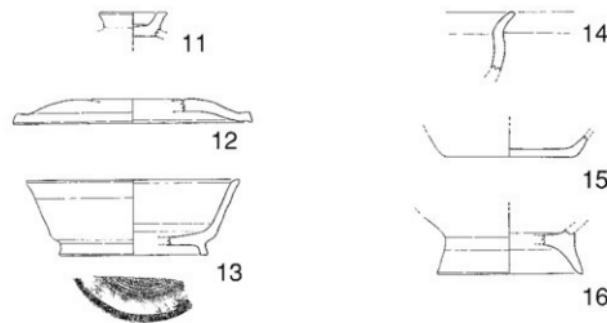
第13回
トトロ調査成績



第14図 T-4調査成果図



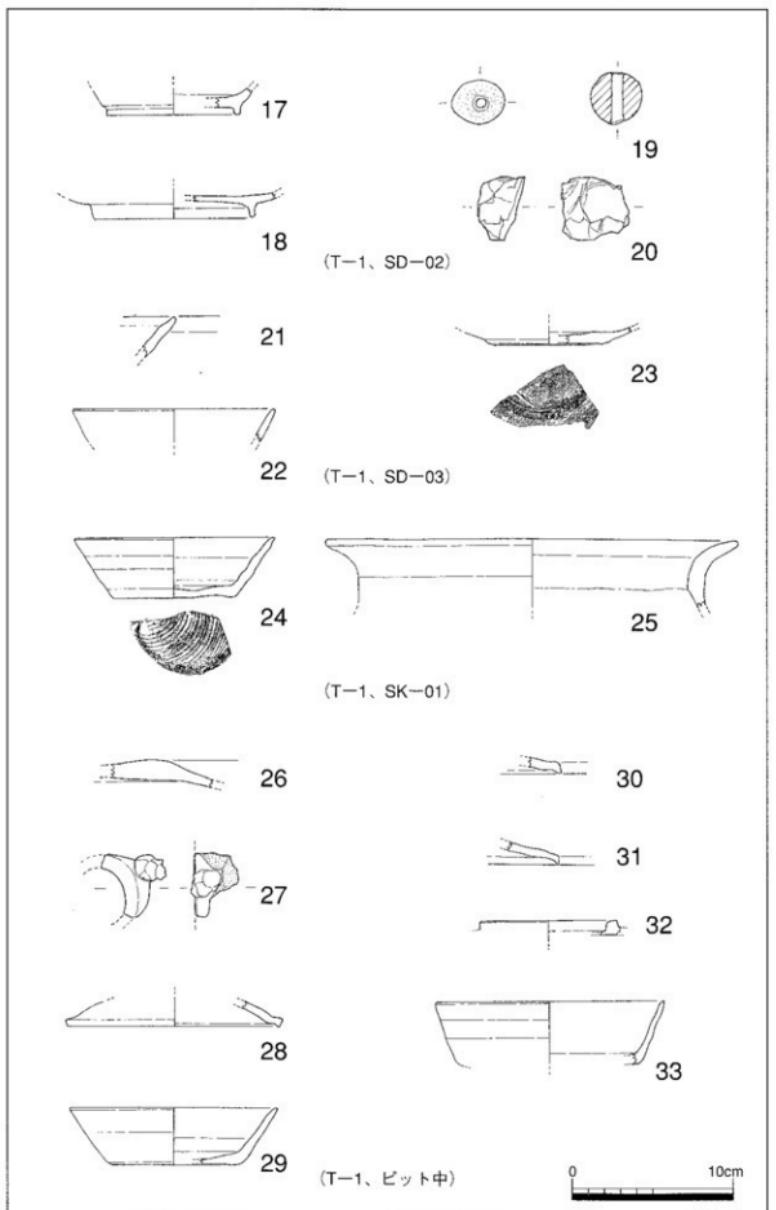
(T-1、第4~6層)



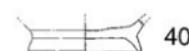
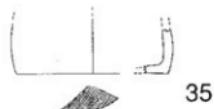
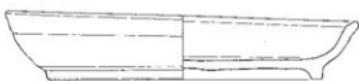
(T-1、SD-02)



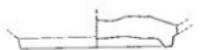
第15図 出土遺物実測図（平成10年度）



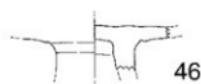
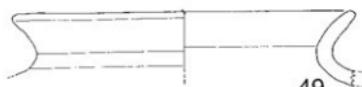
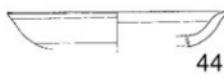
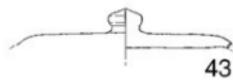
第16図 出土遺物実測図（平成10年度）



(T-2)



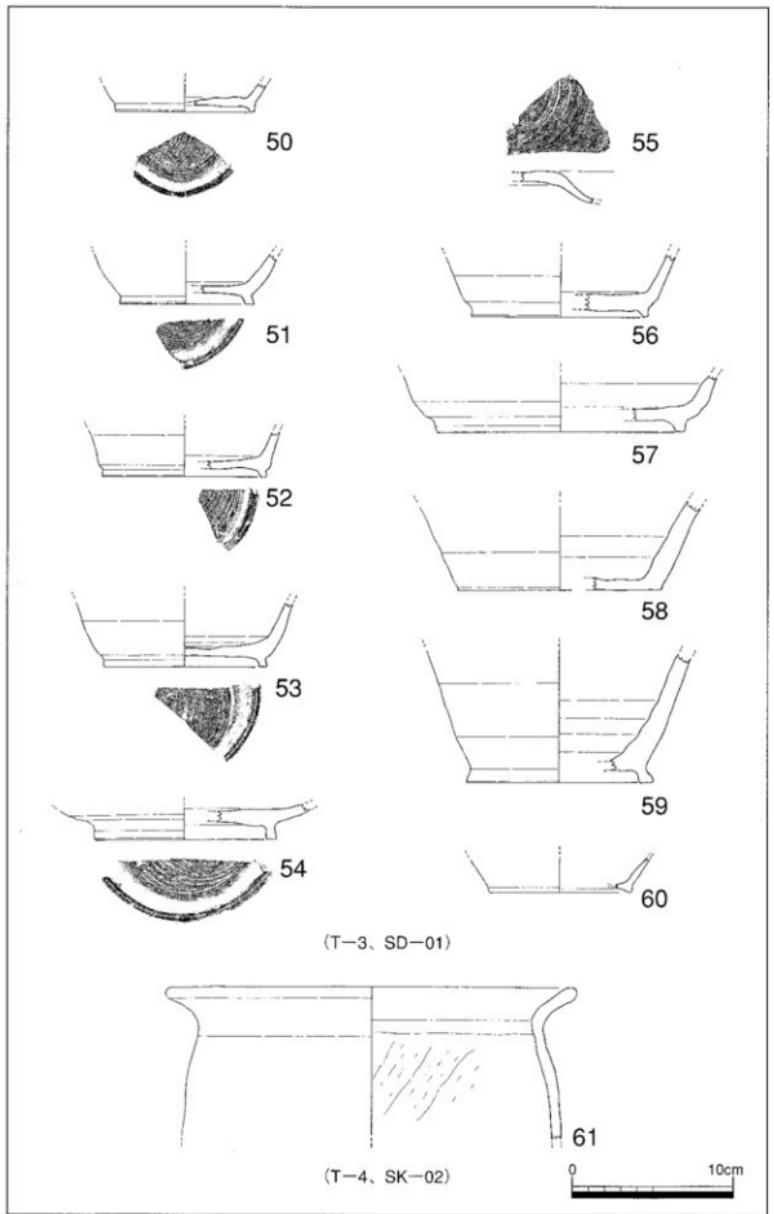
(T-3、第6層)



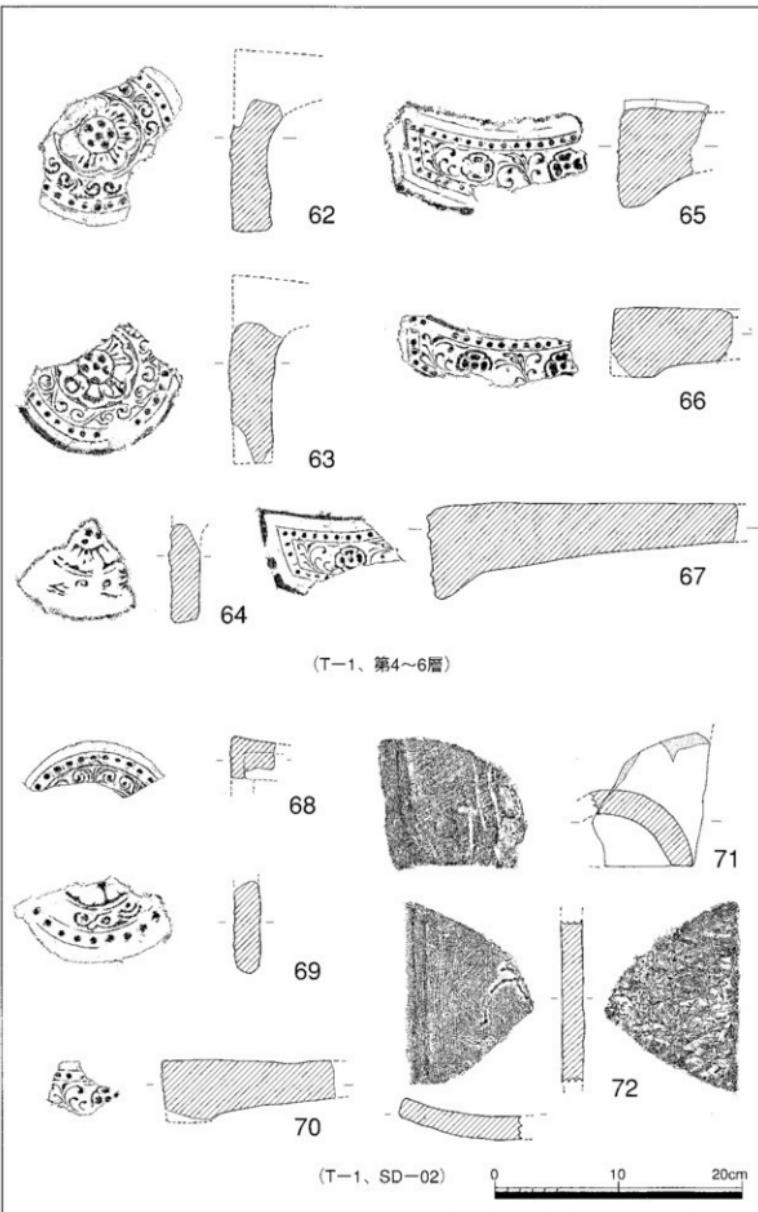
(T-3、SD-01)



第17図 出土遺物実測図（平成10年度）



第18図 出土遺物実測図（平成10年度）



第19図 出土遺物実測図（平成10年度）



73



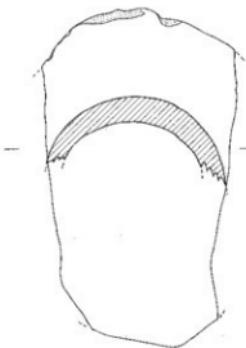
74



(T-1、SD-03)



75



76

(T-1、P-20)

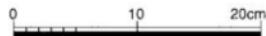


77

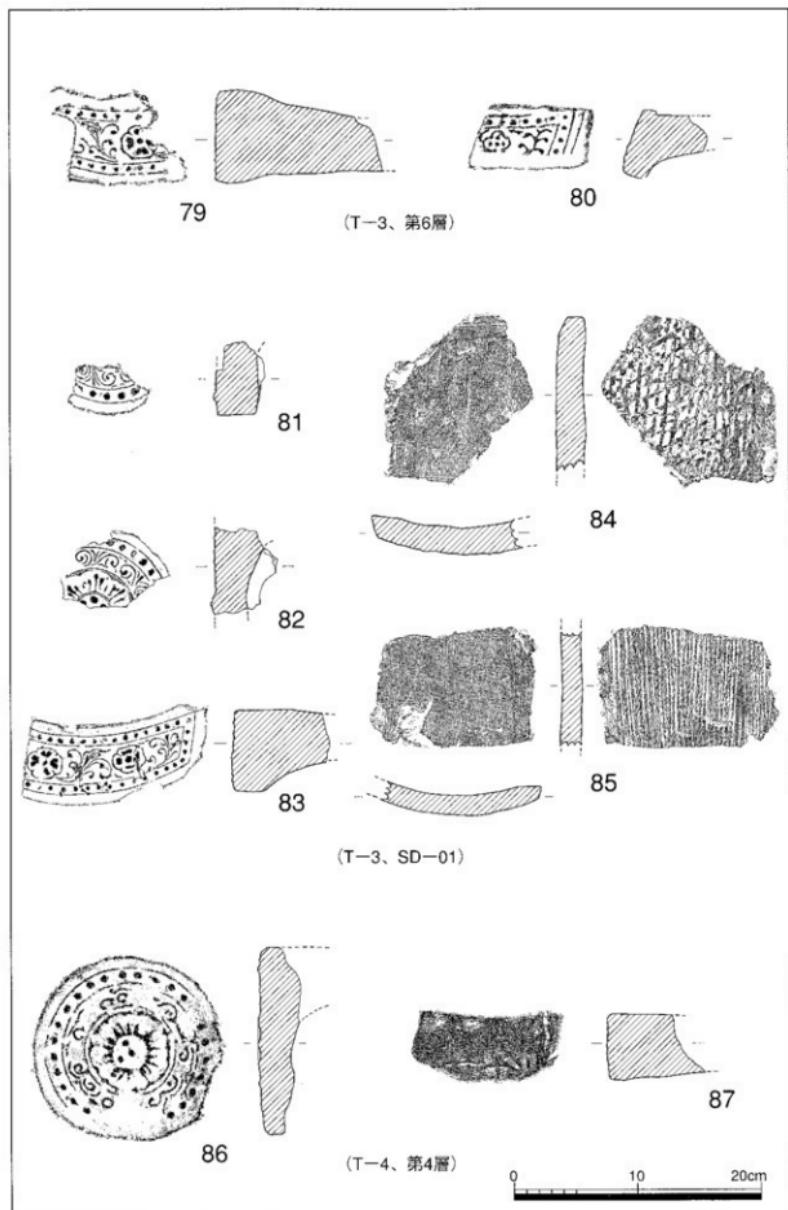
(T-2)



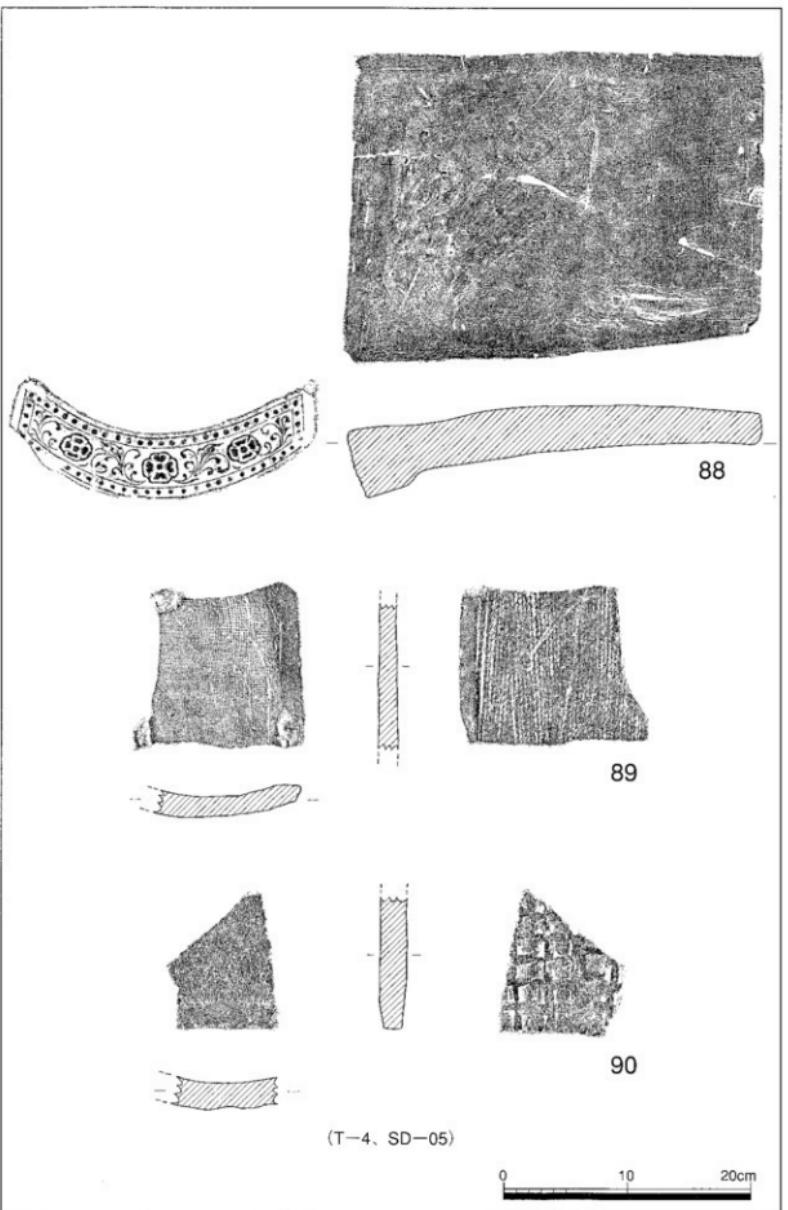
78



第20図 出土遺物実測図（平成10年度）



第21図 出土遺物実測図（平成10年度）



第22図 出土遺物実測図（平成10年度）

(2) 平成11年度調査

平成11年度の調査は、史跡指定地の北側および東側水田地において、寺域の北限、東限、南限を確認する目的で調査を実施した。トレンチは中心伽藍の主軸に直交方向でトレンチを13箇所（T-5～17）設定した。

① T-5、13調査区（第23～25図、第33～35図、第38～41図）

T-5、13は国分寺史跡指定地の北西隣接地に設定したトレンチである。現況は宅地および山林であるが、この地において個人住宅を建築したい旨の問い合わせがあったことから、事前に遺構の有無の確認調査を実施することとなった。トレンチは国分寺の主軸と平行な方向で設定した。

【土層堆積状況】

T-5は北部上段が宅地で低丘陵状の地形をなし、南部下段は以前水田（現況は原野）であったため、平坦な地形となっている。

調査の結果、北部上段では、宅地として造成した際に土砂が切り盛りされた形跡が見られるが、堆積上下部には50～60cmの厚さで遺物包含層（第22、23層）が存在する。暗灰褐色を呈する上層中に包含される遺物は、須恵器の坏蓋（№91～93）、坏身（№94～95、113、114）、高台付III（№96）、壺類（№97、100～102、116）、高坏（№98）、扈（№99）、甕（№103）、土師器（№107～110、112、115）、土師質土器（№104～106）、瓦類（№169～170）であるが、土器の時期が7世紀代～9世紀代までと幅が広く、土器の器種構成が坏類をはじめ、甕や扈（把手）など、住居跡関連のものが見られることから、T-5北方の丘陵部には住居跡などの遺構が存在していた可能性が考えられる。また土師器の中にはミニチュア土器（№108、110、115）、須恵質の土馬（№111）など、祭祀関連の遺物も出土していることが注目される。

一方、南部下段には近年の水田耕作土が堆積しているが、第36層を検出した面において溝状遺構のプランが2箇所発見され、それぞれSD-06、07と命名した。

T-13は、T-5の西方に平行する形で旧水田部分のみに設定したトレンチである。

土層の堆積状況は、T-5と同じく、旧水田の上層が最大1mの厚さで堆積しているが、これを除去した第12層上面でT-5で検出されたSD-06の延長部が検出された。また、トレンチ南端部では、SD-10を検出した。

【SD-06】

T-5およびT-13で検出された東西に延びる溝状遺構で、国分寺の主軸に対してほぼ直交する方位（国分寺の主軸はほぼ真北を示すのでこれをTNとすると、TN-89°～90°-E）を示す。SD-06は金堂中心から約95m北方の位置にあり、規模は、T-5では上端幅3.0m、深さ1.1mを測るV字状、T-13では上端幅5.0m、深さ0.5mを図り、U字状の断面を呈するなど、西方で浅く、幅も広くなる。溝の埋土は黒灰色または灰褐色の砂質土である。この溝に伴う出土遺物は少ないが、T-5では清溝土中から土師質の把手（No118）と土師質土器片（No117）、瓦片（No171～174）が検出された。

なお、T-13では、SD-06埋土中（第8～11層）から須恵器壺蓋片（No119）が検出された他、溝底部よりさらに下層（第12層）から木製品溜りが検出された。丸太材をはじめ柄穴のある板状製品などが見られ、建築部材の可能性も考えられる。これらに併存する形で弥生中期末の甕片（No120～122）が検出されたため、当該時期にかかる遺物であることが考えられる。

【SD-07】

T-5で検出された溝状遺構で、上端幅70～80cm、深さ20cm程度の浅いU字形を呈する。溝中からの出土遺物は無く、溝の方向も国分寺の主軸との関連性が認められない。

【SD-10について】

T-13で検出された溝状遺構で、上端幅は最大2.5m、深さ0.5mを測り、断面はU字形を呈する。平面形は渦曲しており、自然流路のように見える。溝の埋土は暗灰色の砂質土（第17層）で、堆積土中には瓦溜りのように多量の瓦が包含され、軒丸瓦（No176～178）、軒平瓦（No179～184）、平瓦（No185）や丸瓦などが検出された。また、須恵器の皿（No123）や高台坏（No124）、壺（No125）、土師質土器（No126～129）などの遺物も出土している。

また、このSD-10については、その位置関係から、平成5年度に農道建設に伴う発掘調査で検出されたSD-01の延長部にあたるものと考えられる。（第24図）

②T-6調査区（第26図、第36図、第42図）

T-6は国分寺の寺域東限を確認する目的で、金堂跡の真東方向、116～129mの地点で東西方向に13×2mの規模で設定したトレンチである。

【土層堆積状況】

堆積土の内、第1～2層は水田の耕作土および床上で、青灰色を呈する粘質土が西端で薄く20cm、東端で厚く30cmの厚さで見られた。土層中には細片化した国分寺関連の瓦片や須恵器片が若干混入する程度である。第3層は灰褐色を呈する粘質土で、厚さ10～15cmを測る。上層中には瓦片や須恵器片を含む。

第6層は国分寺建設時の造成土（整地層）と考えられる土層で、灰褐色を基調とした粘質土に黄色または灰白色の粘土をブロック状に含む。トレンチ西側の坪堀り部では厚さ50cmを測り、無遺物層である。

整地層の下は淡緑灰色を呈する地山で、粘性のほとんどない砂質の軟地盤である。

【ピット群、SK-04、05】

T-6では、第6層上面において軒丸瓦片（No186）、軒平瓦片（No187）、須恵器甕（No139）などの国分寺関連の遺物のほかにピット21穴、土壙2が検出された。ピット内にはいずれも黒灰色を呈する砂質の埋土が堆積しており、ピット中からはそれぞれ遺物が検出された。（下表参照）

また、ピットのうち、列状に並ぶものがある。トレント北側では西からP-2、4、6、10、15で、いずれも直径は25~30cm、深さ35~40cmを測る。ピットの間隔は2.1~2.4mを測りやや不等間隔であるが、柵などの構造物の柱穴である可能性が考えられる。また、トレント南側ではこのピット列にほぼ平行に列状をなすP-17、16、19があるが、相互の関連性の有無については不明である。

SK-04は平面規模1.3×0.7m、深さ20cmを測る不整形な土壙、SK-05は1.3×0.8m、深さ10cmを測る梢円形の土壙である。いずれの土壙も性格は不明である。

（T-6 検出遺構一覧）

遺構名	出土遺物	遺構名	出土遺物
P-1	土師器甕（No134）、平瓦（No190）	P-12	なし
P-2	須恵器甕（No131）、丸瓦（No188）	P-13	なし
P-3	なし	P-14	須恵器片、平瓦片
P-4	平瓦（No191）	P-15	丸瓦（No189）
P-5	なし	P-16	なし
P-6	須恵器片、平瓦片	P-17	須恵器片
P-7	須恵器片	P-18	土師器片
P-8	なし	P-19	土師器片
P-9	なし	P-20	なし
P-10	土師質土器（No140）、平瓦（No192）	SK-04	須恵器甕（No137~138）
P-11	なし	SK-05	須恵器甕（No132~133、135~136）

③T-7、14、15、17調査区（第28図、第36~37図、第42図）

T-7、15は国分寺の寺域東限を確認する目的で、史跡指定地の東方水田部に設定したトレントで、国分寺の主軸と直交する方位で設定した。T-14、17は、T-7で確認した整地土層の延長を確認するために設定したトレントである。

【土層堆積状況ほか】

T-7では、堆積土の内、第1~2層は水田の耕作土および床土で、青灰色を呈する粘質土が最大30cmの厚さで堆積している。土層中には細分化した国分寺関連の瓦片や須恵器片が若干混入する程度である。第3層は旧水田耕作土と考えられる土層で淡茶褐色を呈する。遺構面は第2層および第3層を除去した第4層上面で検出されたが、トレントの西端部は幅約3.0m、高さ20cmの規模で路状に隆起し、その箇所を中心に小礫が集中して検出され、小礫に混じて須恵器の皿片（No141）、台付壺片（No143）、高环片（No144）や上師質土器（No142）、軒丸瓦片（No193）などが検出された。T-7と平行に設定したT-15でも同様な状況が観察され、幅約4.0mの範囲には特に軒丸瓦片（No194）、軒平瓦片（No195、196）、平瓦片（No197）、須恵器の蓋片（No147）、高台壺片（No148、149）、高台付皿片（No150）、壺片（No151）、土師器の把手片（No152）、土錐（No153）などが検出された。T-7ほどの隆起した路状の地形は見られないが、遺構面は東方へ向けてなだらかにレベルが下がって行く状況が観察される。

T-7、15とともに造構面の下は整地層であり、灰色を基調とした粘性土に黄色または灰白色の粘土をブロック状に含む。T-7ではその厚さは35cmを測る。また、土層中に弥生時代後期末の古式土師器壺片（No145）が包含されていた。

この整地層の存在範囲を確認するために設定したトレンチがT-14、17であり、共に50~60cmの厚さで存在することが確認された。整地層の下の地山は、淡緑灰色を呈する弱粘性土である。トレンチの規模が小さかったためか、出土遺物はほとんど検出されなかった。

④ T-8調査区（第27図、第37図）

T-8は国分寺の寺域北限を確認する目的で、金堂跡から88~113m北方、国分寺中軸線から東方へ74~76mの地点で南北方向に25×2m（南拡張部は幅1m）の規模で設定したトレンチである。

【土層堆積状況】

堆積土の内、第1~2層は水田の耕作土および床土で、青灰色を呈する粘質土が北側で薄く15cm、南側で厚く30cmの厚さで見られた。土層中には細片化した国分寺関連の瓦片や須恵器片が若干混入する程度である。水田関連土層の下には黄褐色を呈する硬く縮まった地山が存在する。

【SD-08】

T-8の中央部を東西に横断する形で検出された溝状遺構である。流水方向は、西→東であるが、流路は途中で約32°曲がり、国分寺の主軸をTNとすると、TN-96°-EからTN-128°-Eとなる。溝の規模は上端幅0.5~0.9m、深さは最大0.5mを測る。溝の埋土は灰褐色の砂質土および暗灰褐色の粘質土である。溝中の出土遺物は須恵器环身（No154）、土師器の壺片（No155~156）であり、国分寺関連の瓦が出土していないことや、环身の年代観から、国分寺建立以前の遺構であると考えられる。

【瓦溜り】

SD-08の北部地山面で検出された瓦溜りである。規模は幅1.0mの規模でトレンチを東西に横切る形で帶状に検出された。瓦はいずれもよく摩滅した細片で、須恵器蓋片（No157）も混入しているが、遺構の性格は不明である。

⑤ T-9、16調査区（第29図、第37図、第43図）

T-9は国分寺の寺域東限を確認する目的で、史跡指定地の東方水田部に設定したトレンチで、国分寺の主軸と直交する方位で設定した。T-9調査時に柱根の遺存するピット（P-1、2）が検出されたため、南方に拡張した。また、T-9の東側で検出されたSD-09の延長を確認するためにT-16を設定した。

【土層堆積状況】

T-9、16共に堆積上の内、第1～2層は水田の耕作土および床土で、暗灰色を呈する粘質土が西側で薄く20cm、東側で厚く30cmの厚さで見られた。土層中には細片化した国分寺関連の瓦片や須恵器片が若干混入する程度である。第3層は淡灰色粘質上で黄褐色ブロックを含む土層である。厚さは20cm程度で無遺物層である。ピットや溝などの遺構はこの第3層の上面から掘り込まれている。第4層は地山で淡緑灰色で粘性の弱い土層である。

【SB-01について】

T-9で検出された掘立柱建物跡で、桁行き南北3間(17尺=5.151m)、梁間東西1間(7.2尺=2.186m)を測る。桁行き方向の軸線は、TN-2°-Eで、国分寺の主軸とほぼ平行である。

ピットはP-1～8までの8箇所で、径70～110cm、深さ10～50cmを測り、いずれも国分寺関連の平瓦、丸瓦片を柱の下、あるいは横に詰め込んだ状態で検出された。ピットはいずれも第3層の上面で検出されているが、この第3層自体は、後世の耕地整理により大きく削平されていることから、本来はピットも現地盤より高い位置から掘り込まれ、ピットの深さも100cm程度はあったものと推定される。

桁行き方向のピットの間隔は、南側の2間が各6尺(1.818m)、北側の1間が5尺(1.515m)を測る。各ピットの埋土はいずれも黒灰色を呈す。このうちP-1では柱根(径40cm、断面多角形)が検出され、P-2では泥化した状態で柱痕跡(径40cm、断面円形)が確認された。

ピット中からの出土遺物としては、柱の根固めに使われた多量の平瓦の他に、P-7埋土中からは墨書き上器片(Na161)(判読不明)、須恵器高台坏片(Na160)、P-2埋土中からは軒平瓦(Na200)などが検出された。

【SD-09について】

SD-01の東方で検出された溝状遺構で、幅約2.0m、深さ約30cmを測る。SB-01同様、第3層から掘り込まれており、後世の削平も受けていることから、本来は幅、深さ共に現況より大きな溝であったことが推定される。また、溝の延長部を確認する目的で設定したT-16でも確認されているが、その南北方向の軸線はTN-90°-Eとなり、国分寺の主軸と平行である。また、国分寺の中軸線から東方へ約112mの位置に当たり、従来の学説によって国分寺の寺域を方2町(218m)とした場合の、東へ1町(109m)地点に近いことから、寺域東限の区画溝である可能性が考えられる。溝埋土中からの出土遺物は、国分寺関連の軒丸瓦(Na198)、軒平瓦(Na199)、平瓦(Na202)の他に須恵器の蓋(Na158)、高台坏(Na159)などが検出された。

【SK-03について】

SD-09の西側に接する形で検出された土壙である。規模は2.1×1.2m、深さ40cmを測る不整形な土壙で、暗茶褐色の埋土があったが、出土遺物は見られなかった。ただし、上層観察の結果、この土壙はSD-09によって切られているため、それ以前の遺構であることが考えられる。

⑥T-10調査区（第31図、第38図、第44～45図）

T-10は、県道八重垣神社竹矢線拡幅工事に伴う事前調査のために設定したトレンチで、史跡指定地内において天平古道の遺構の確認調査を実施した。

【土層堆積状況】

土層のうち、第1～4層が現代の天平古道整備時の舗装面および舗装路盤、第5～21層までが後世の盛土で、現在の舗装面から1.1mの厚さがある。

奈良時代の国分寺存続時期にあたる土層は第22層で、厚さ15cm程度、暗灰褐色の粘質土中に多量の瓦類が含まれ、軒丸瓦（No.203、204）、丸瓦（No.206、208）、平瓦（No.209、210）と、須恵器环片（No.162～163）、甕片（No.164、165）が検出された。

第22層の下層にあたる第23、24層は国分寺造成時の整地土層であると考えられ、暗灰色を基調とした強粘性土に黄色または灰白色の粘土をブロック状に含み厚さは40～50cmを測る。

この整地土層は、平成10年度の国分寺東方の寺域確認調査時にも約1mの厚さで観察され、国分寺周辺部に広く存在するものと考えられる。

【石敷道路について】

昭和30年の調査では、国分寺跡南門から南方の三軒屋に至る天平古道は幅20尺の石敷きであると報告されているが、今回の調査結果では、多量の瓦片等の散布が認められるのみで、石敷道路の存在を示す遺構は認められなかった。

⑦T-11、12調査区（第32図、第38図、第44図）

T-11、12は、国分寺の寺域南限を確認するために天平古道脇に設定したトレンチである。

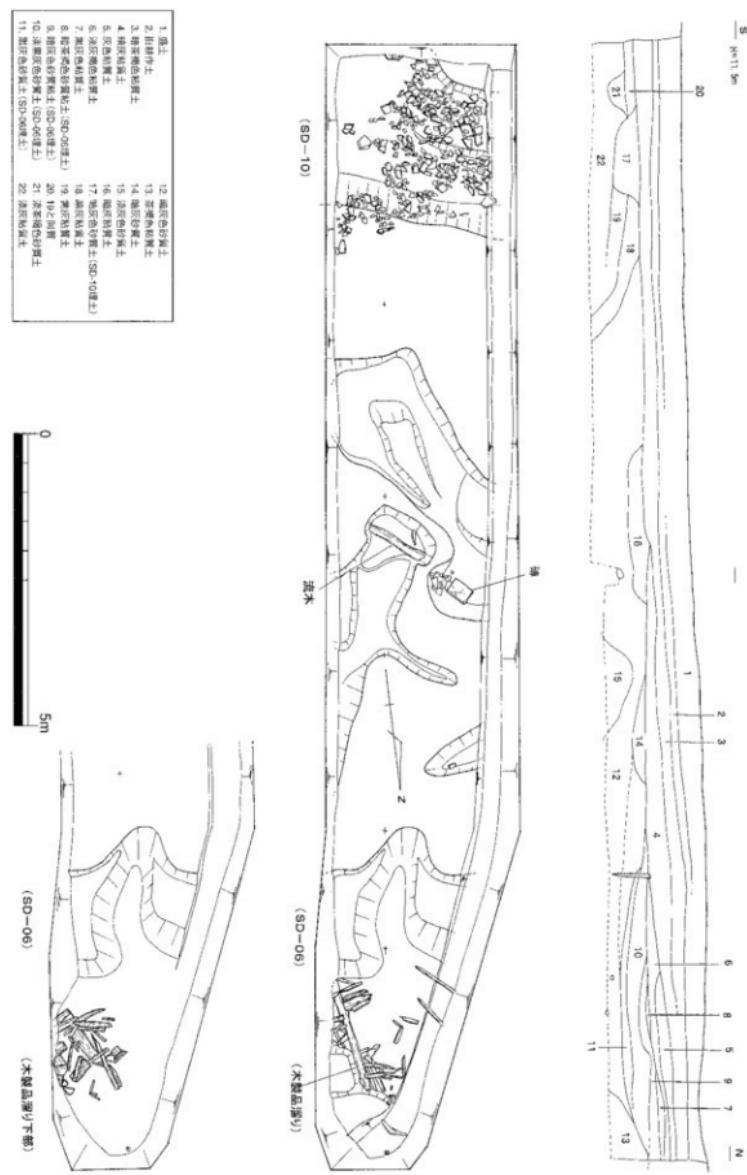
【土層堆積状況】

T-11、12とともに第1層は水田耕作土であるが、いずれのトレンチでも、耕作土のすぐ下層には整地上と思われる土層が存在する。軒丸瓦片（No.207）や須恵器の蓋片（No.166）、高台环片（No.167～168）などの遺物は耕作土と整地土との界面から若干検出されるものの、奈良時代の遺構面や遺物包含層となるものは認められない。このことから、後世の耕地整理などで大きく削平を受けたことが考えられる。

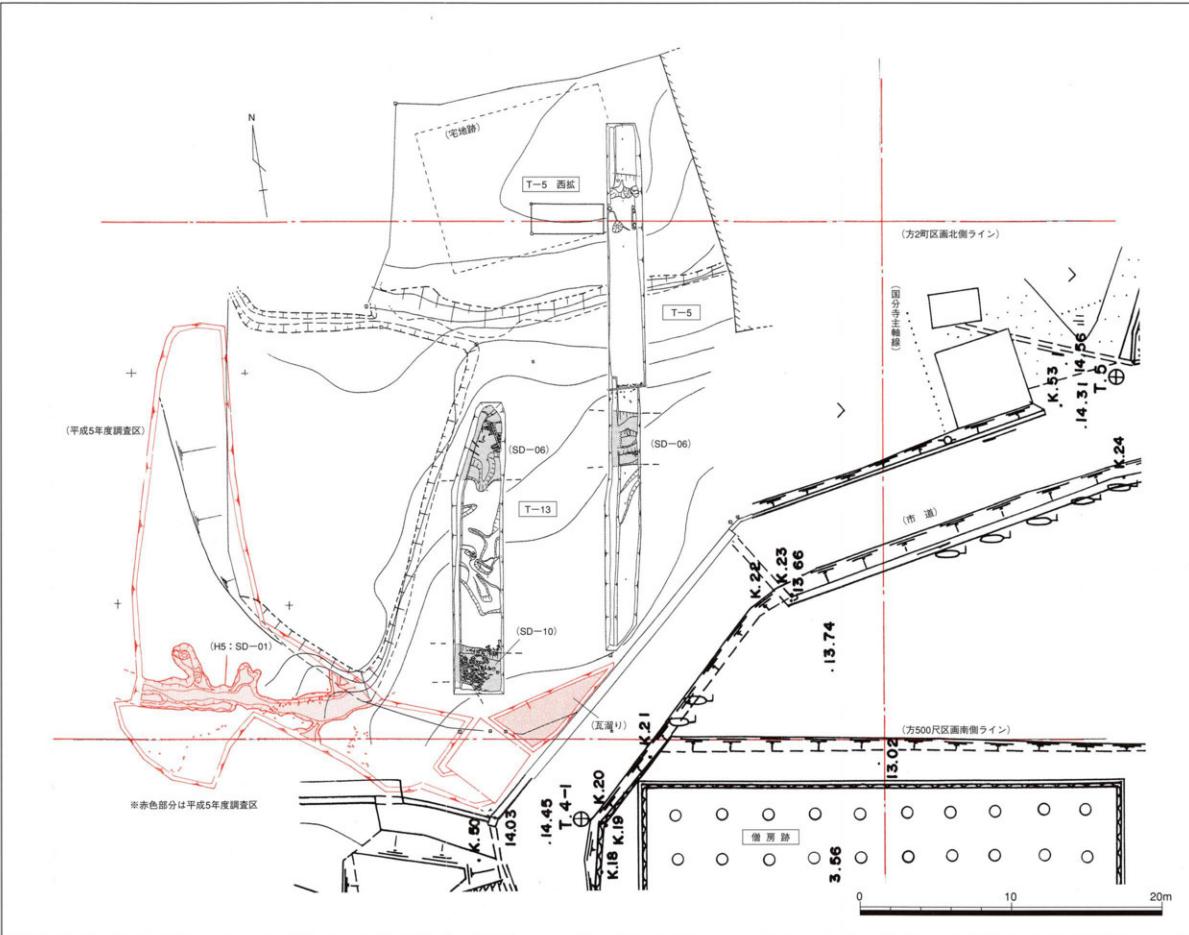
⑧平成11年度調査まとめ

平成11年度の調査の結果、国分寺の主軸に対して平行、または直交し、直線的に延びる溝状遺構が2箇所で検出された。北部ではSD-06、東部ではSD-09がこれに当たり、出土遺物の年代や溝の規模などから、国分寺関連の区画溝であると考えられる。また、これらの区画溝と伽藍配置との位置関係は、SD-06は金堂中心部から北方95m地点、SD-09は金堂中心部から東方112m地点に当たる。従来の学説では国分寺の寺域は方2町（約218m）とされており、金堂を中心として109m地点付近に何らかの区画施設が存在するとすれば、今回検出された2箇所の溝状遺構は、寺域の区画溝としての性格が強いものと考えられる。

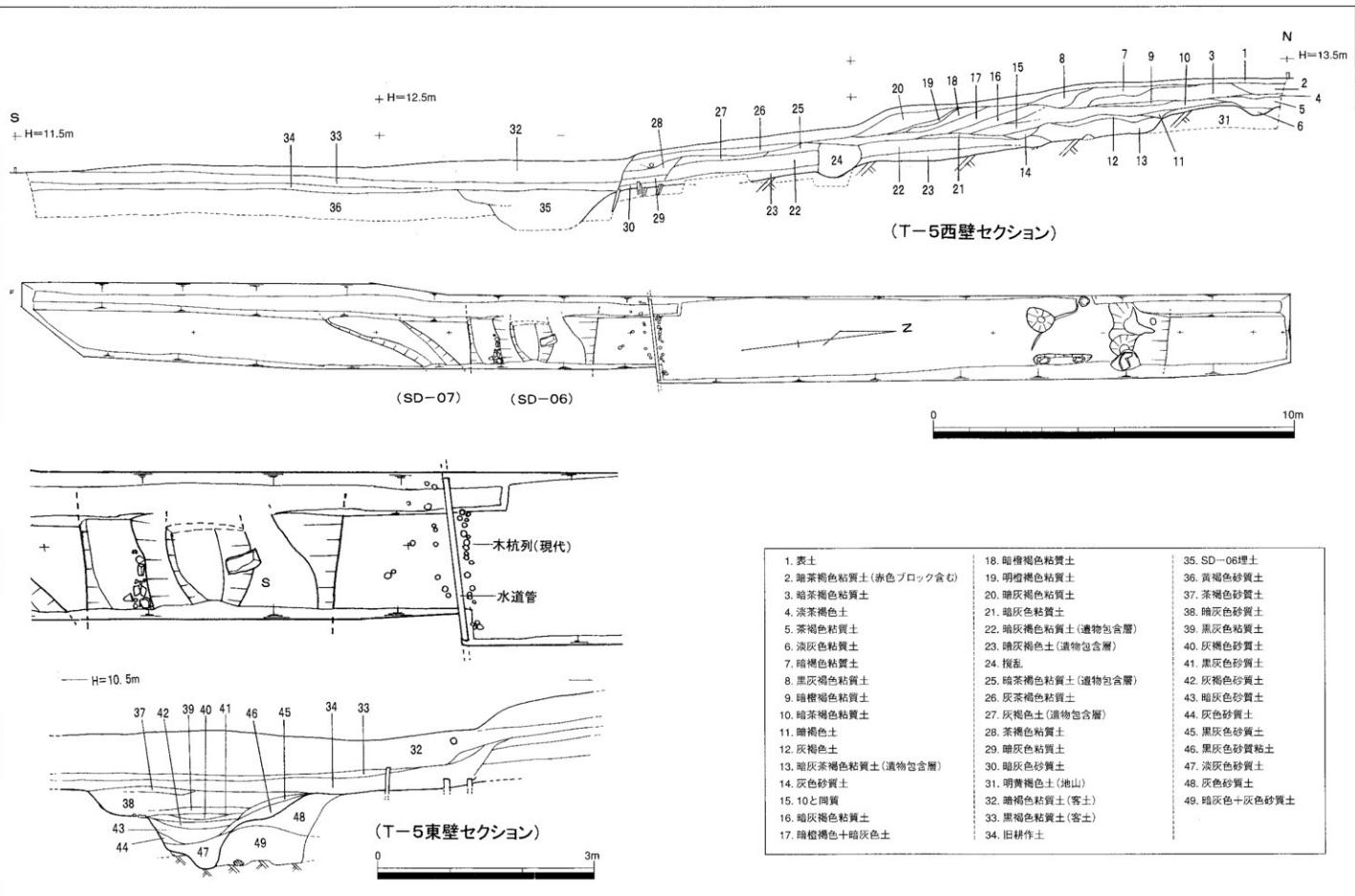
一方、寺域の範囲を推定する際の手掛かりとして、整地土層の存在範囲があげられる。平成10~11年度の調査の結果、国分寺周辺には広範囲に整地層が観察され、特に南東方向に厚く、北部ではやや薄くなる傾向が見られる。これは旧地形の形状に起因するものであるが、その存在範囲は、東方では金堂中心から179.6m地点（T-17）まで確認されている。この整地層の範囲と寺域の範囲との関係は今後の検討課題である。



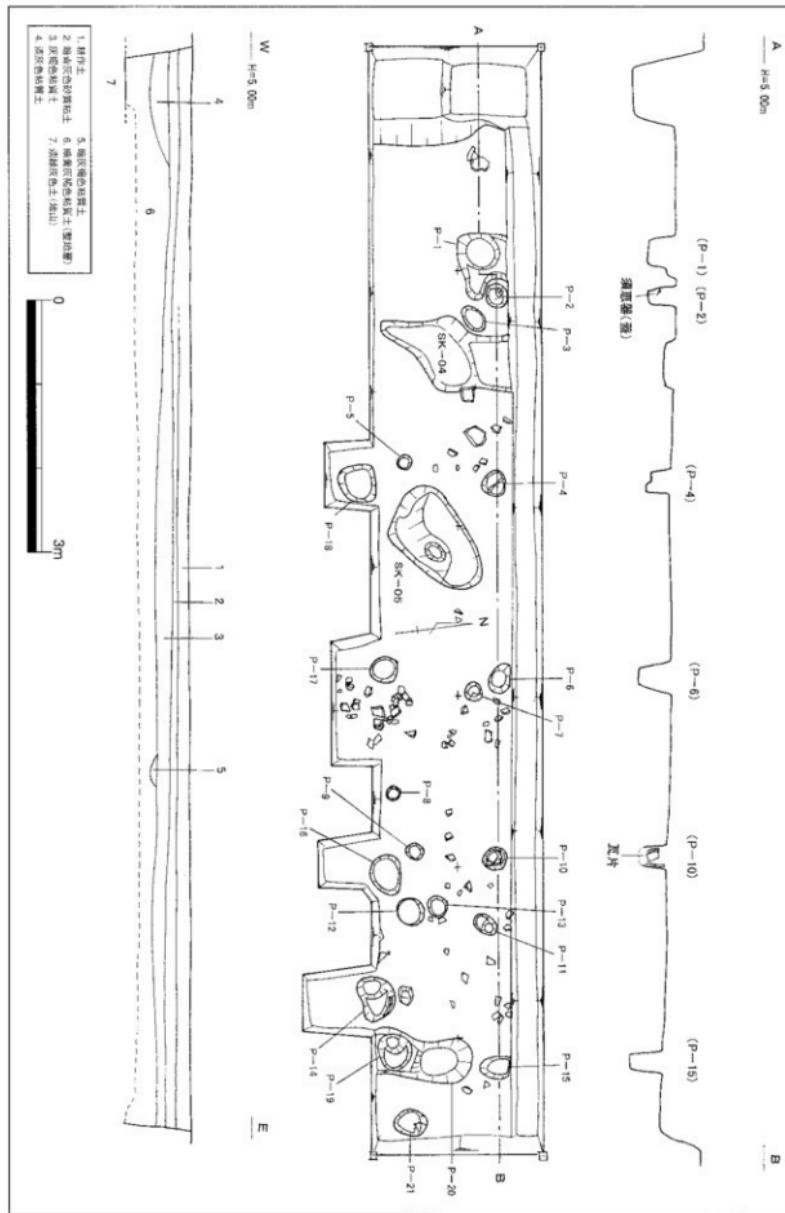
第23図 T-13調査成果図



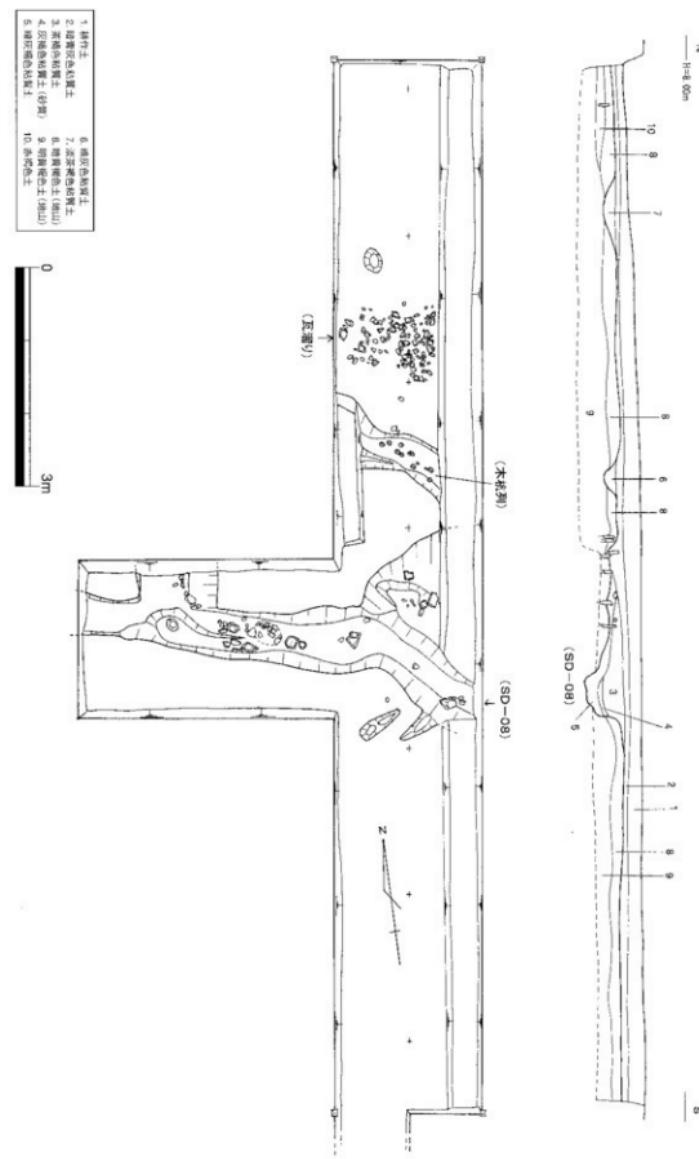
第24図 T-5、13 周辺平面図



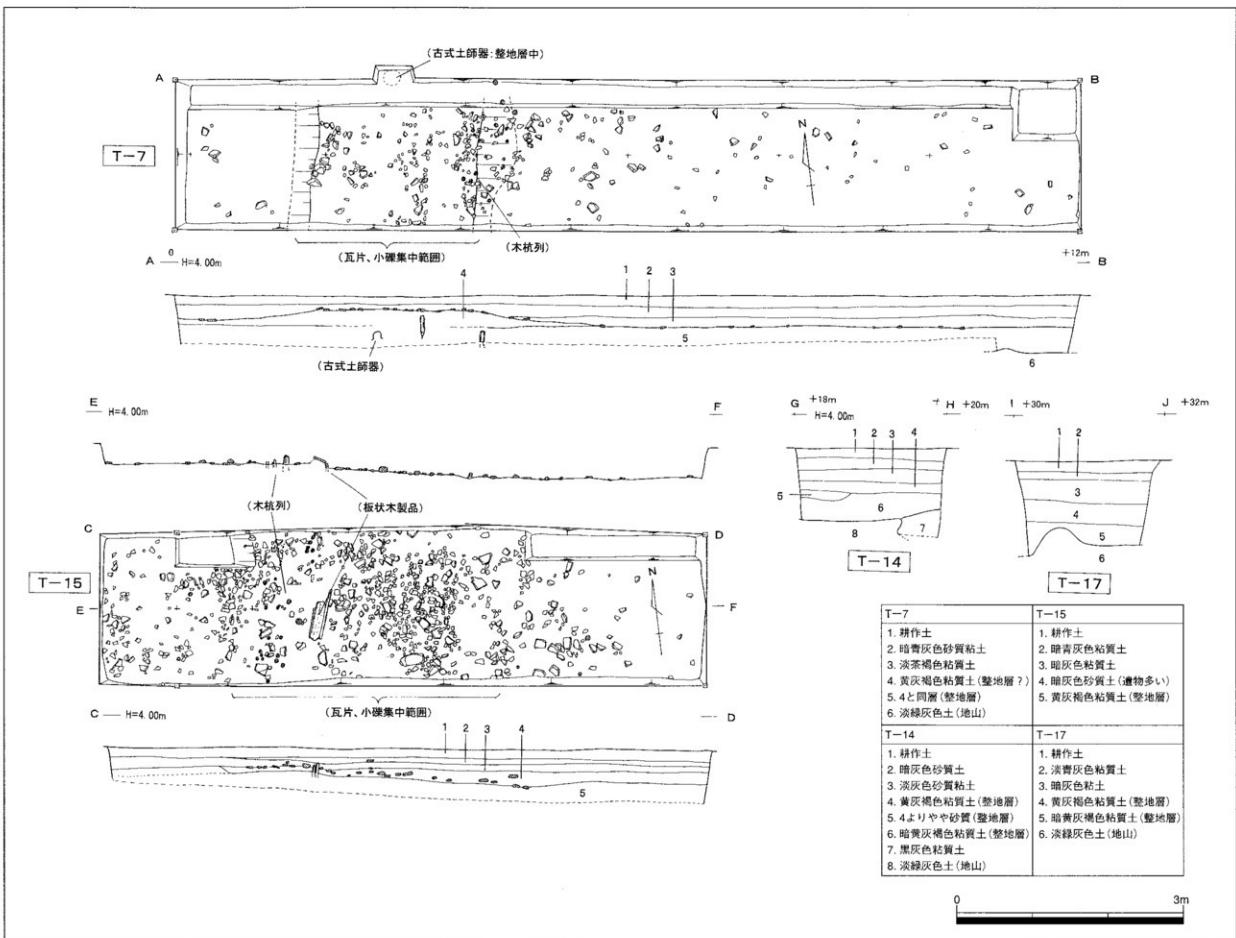
第25図 T-5 調査成果図



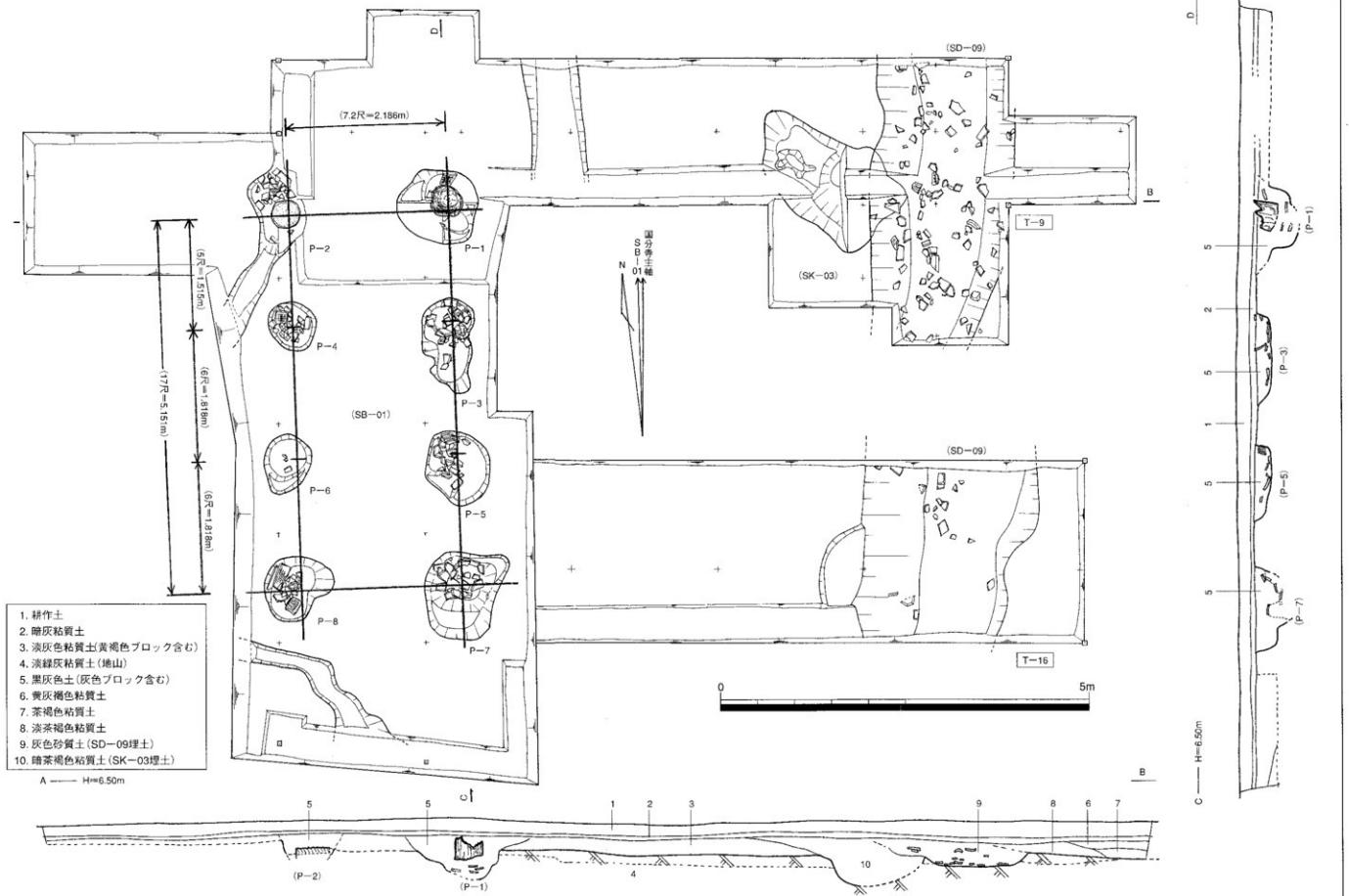
第26図 T-6調査成果図



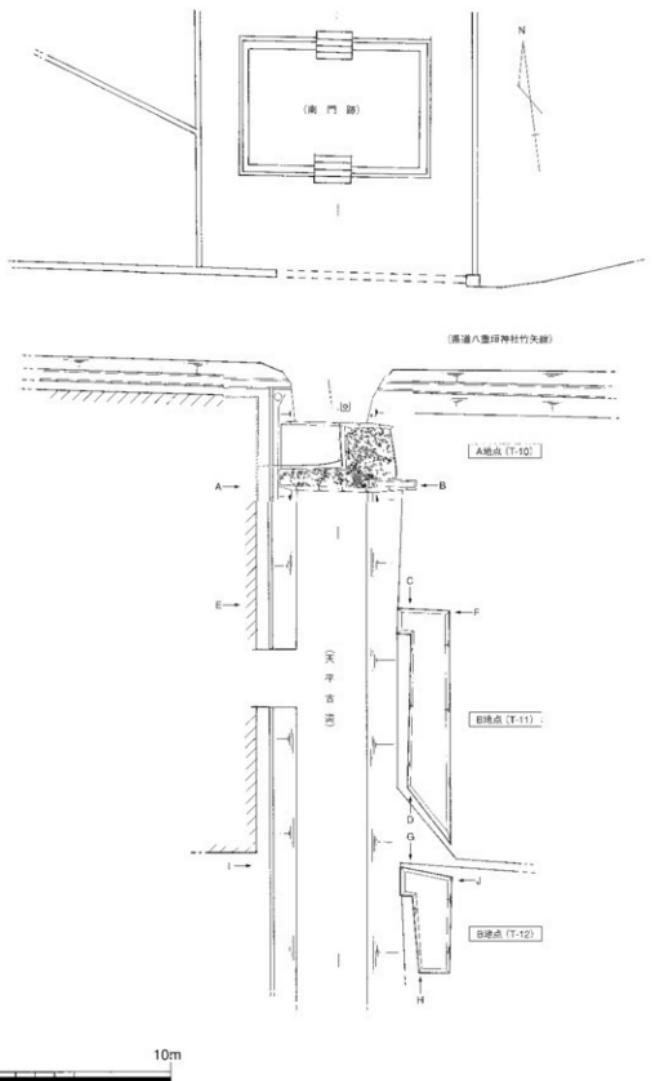
第27図 T-8調査成果図



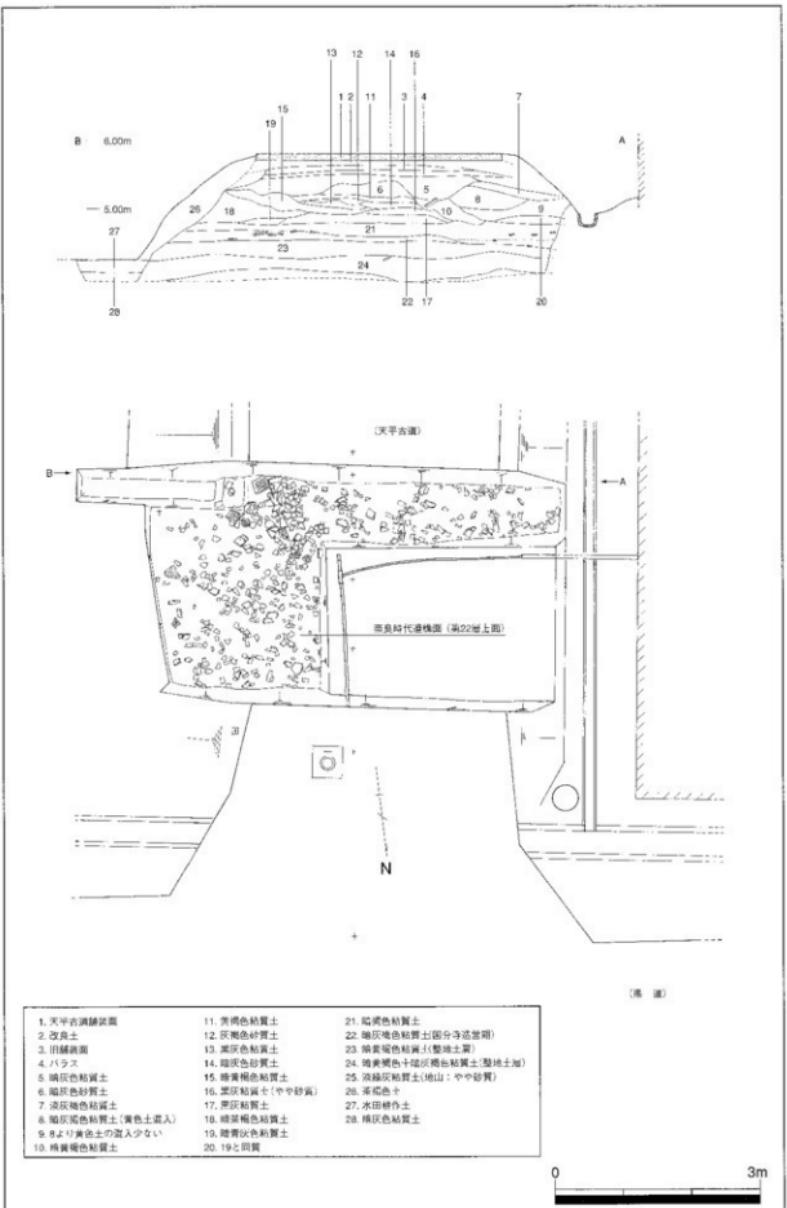
第28図 T-7、14、15、17 調査成果図



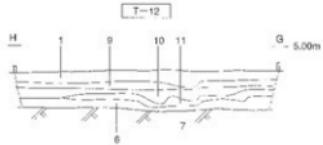
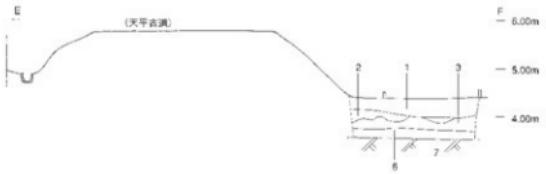
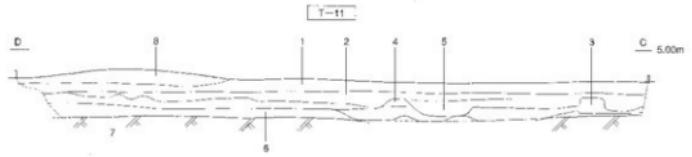
第29図 T-9, 16 調査成果図



第30図 天平古道調査区平面図 (T-10~12)



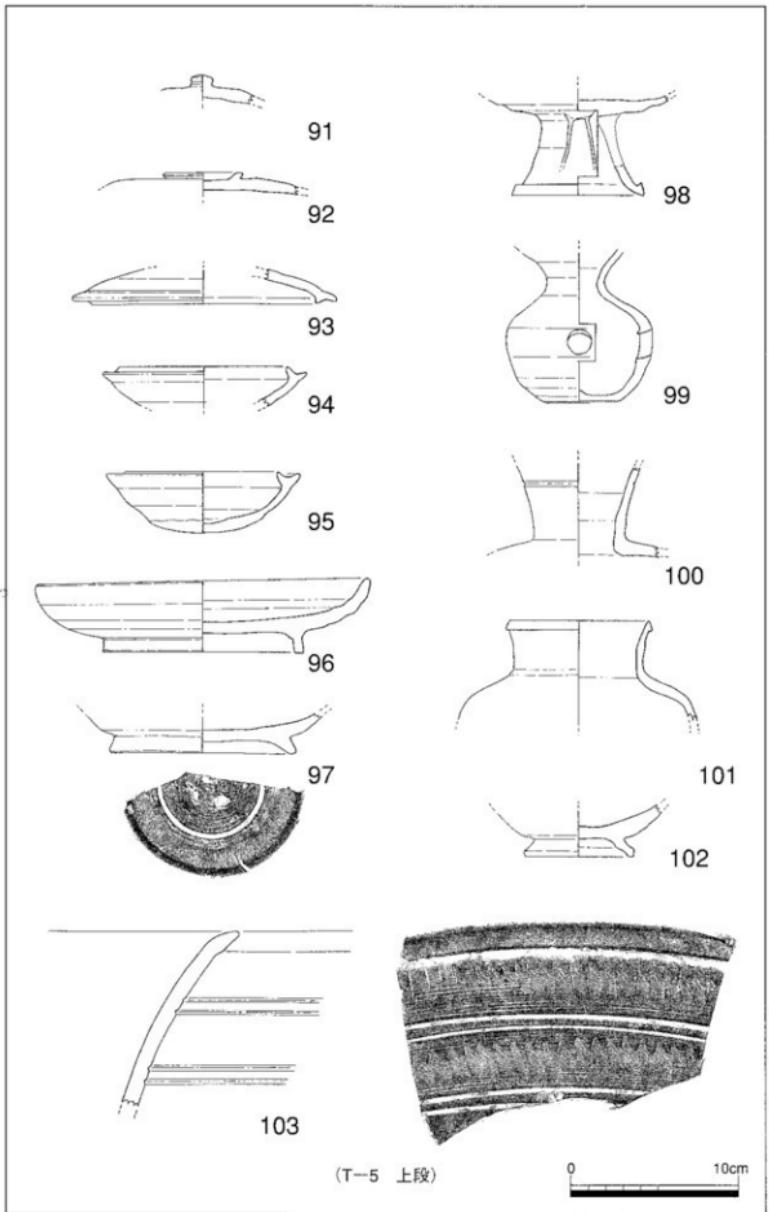
第31図 T-10調査成果図



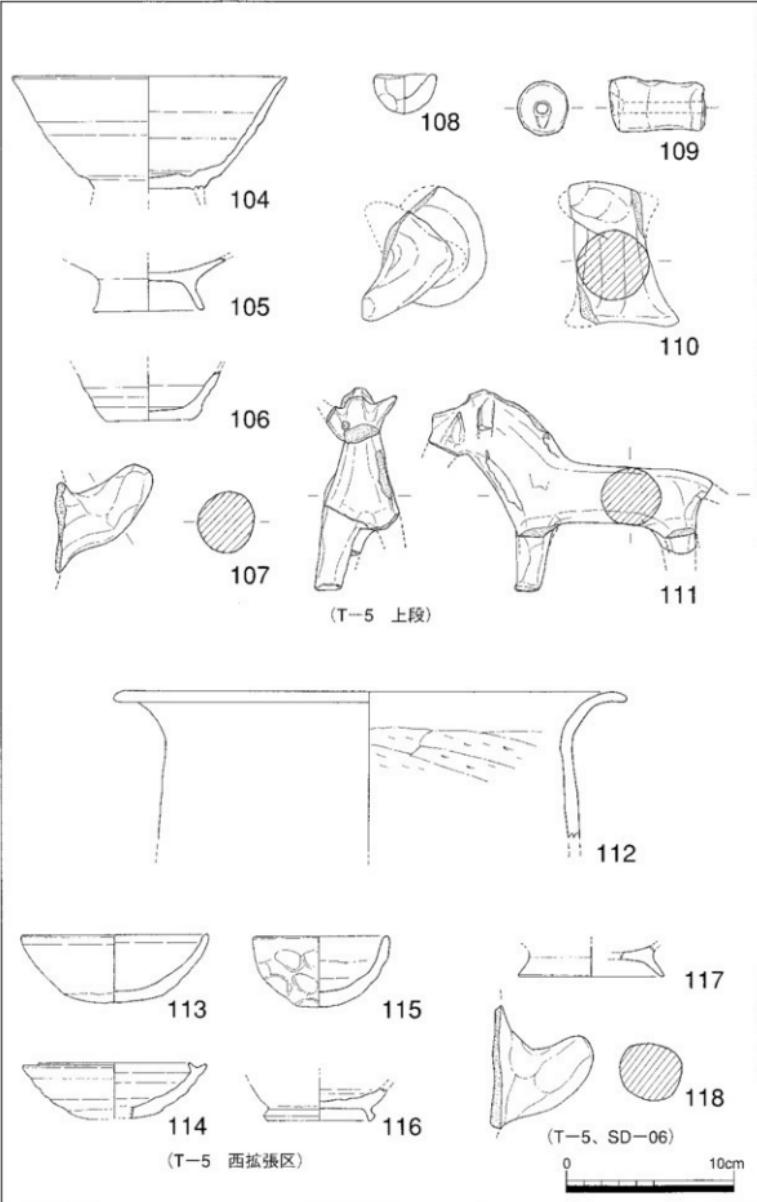
1. 緋作土
2. 地質褐色—灰色粘質土(整地土層?)
3. 深黃色粘質土(整地土層?)
4. 黃灰色粘質土(整地土層?)
5. 2型: 呈深綠褐色土塊混入
6. 紅色粘質土(樹山?)

7. 灰色砂質黏土(地山)
8. 黃砂土
9. 黃黑色粘質土
10. 暗綠色粘質土(整地土層?)
11. 黃褐色—淡灰黃粘質土(整地土層?)

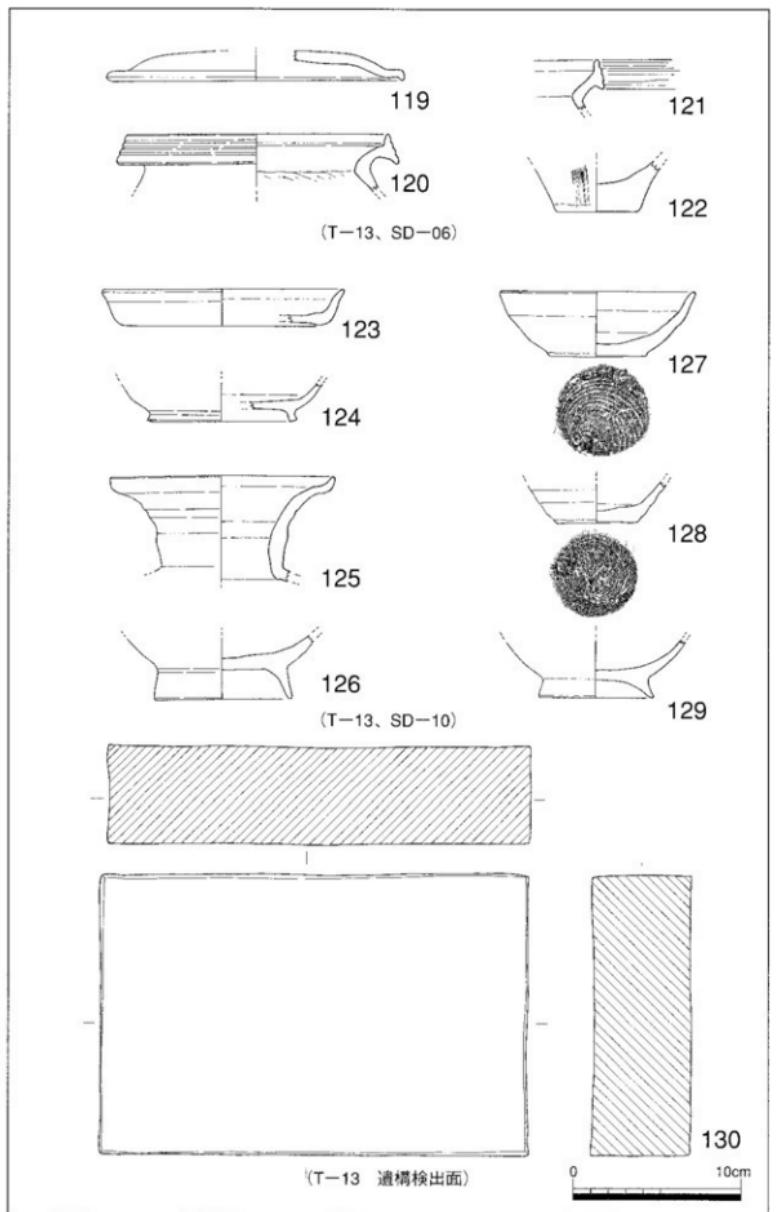
第32図 T-11、12調査成果図



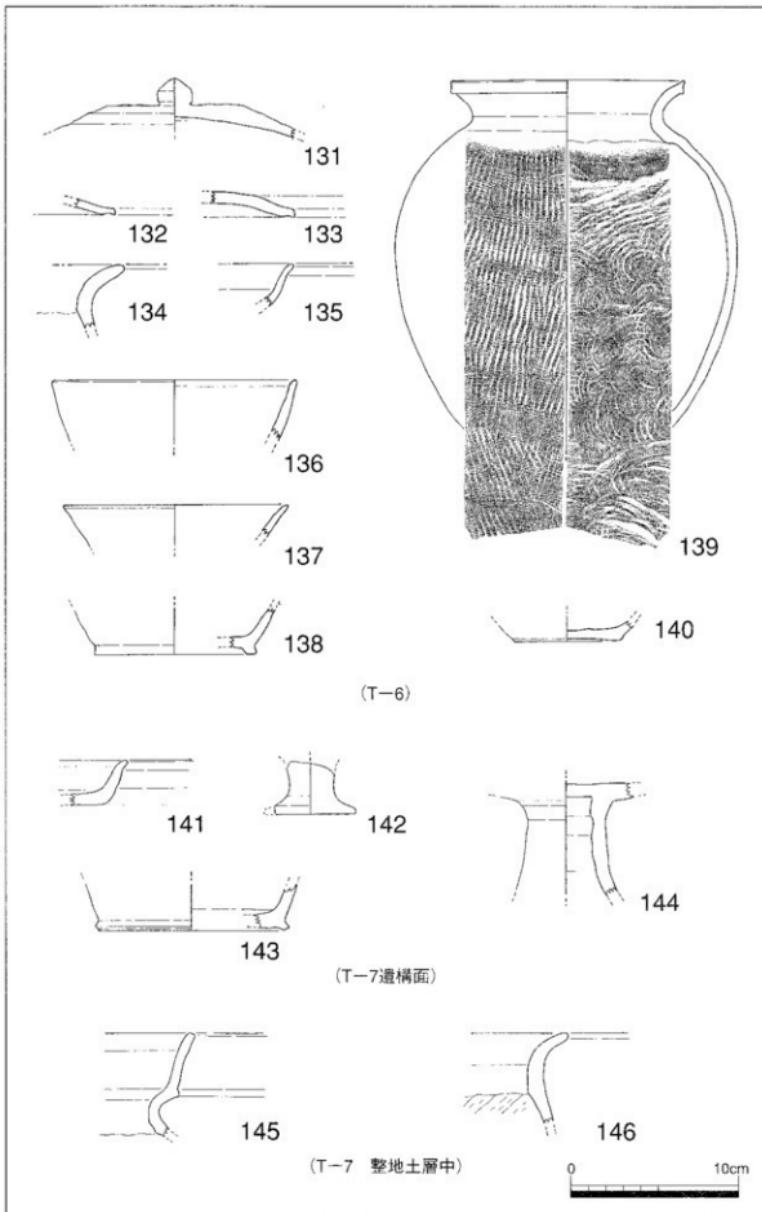
第33図 出土遺物実測図 (平成11年度)



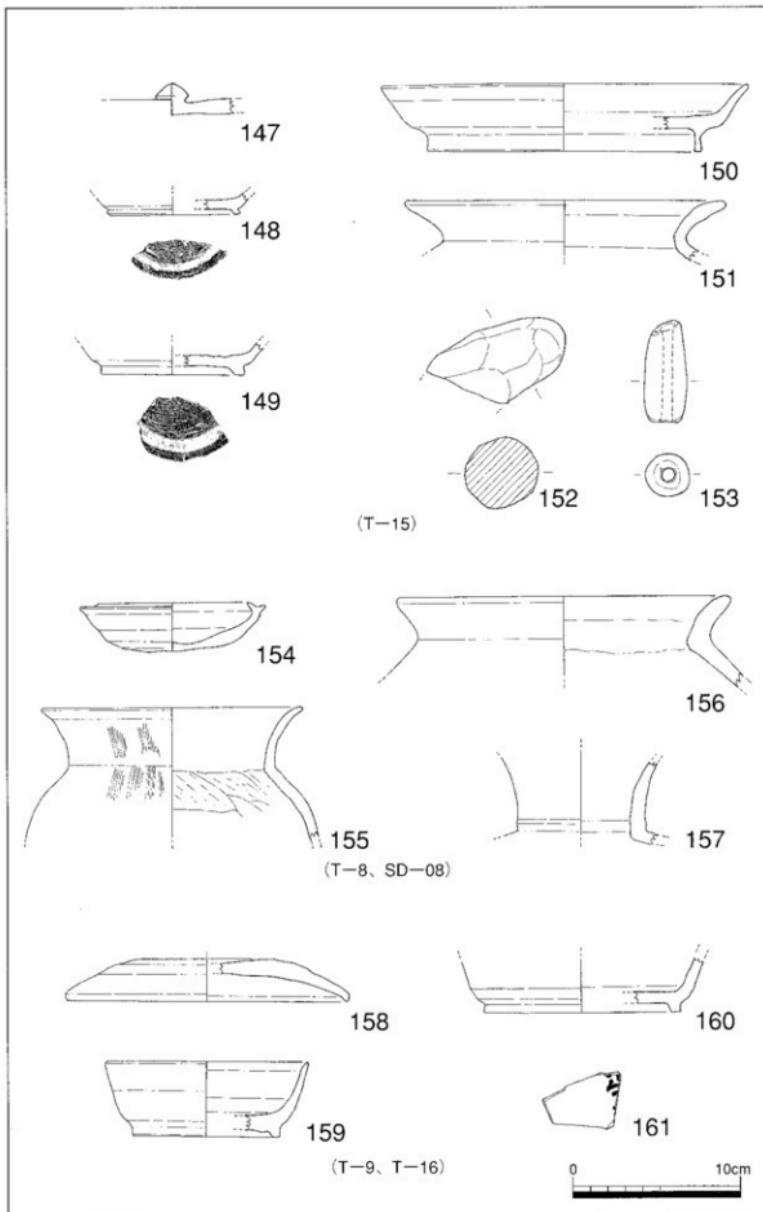
第34図 出土遺物実測図（平成11年度）



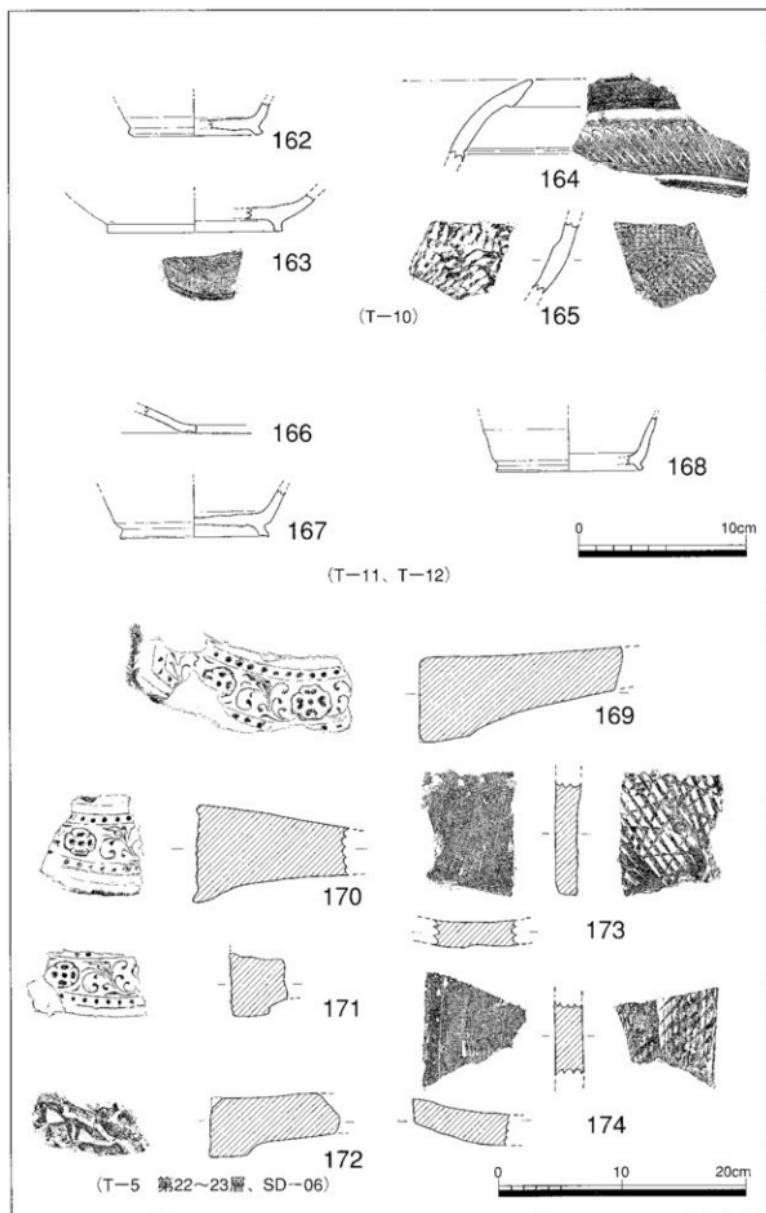
第35図 出土遺物実測図（平成11年度）



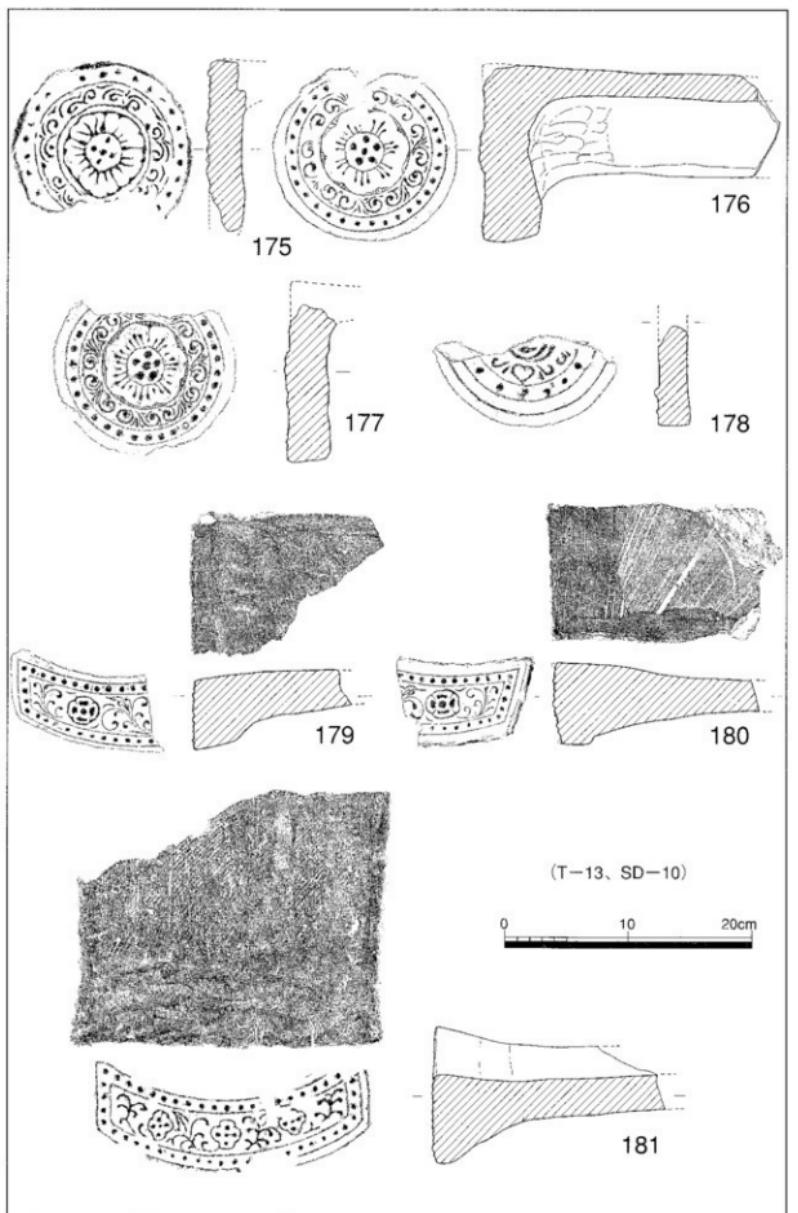
第36図 出土遺物実測図（平成11年度）



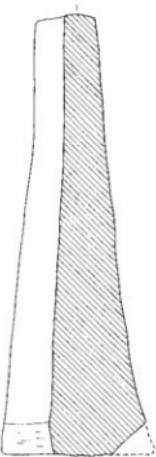
第37図 出土遺物実測図（平成11年度）



第38図 出土遺物実測図（平成11年度）



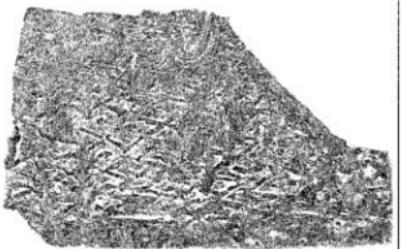
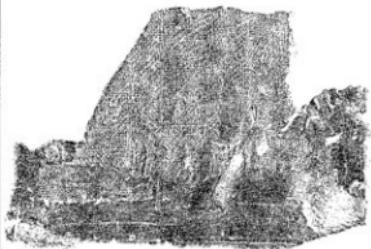
第39図 出土遺物実測図（平成11年度）



182



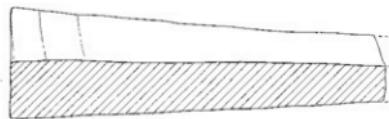
0 10 20cm



183

(T-13、SD-10)

第40図 出土遺物実測図（平成11年度）



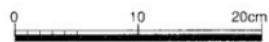
184



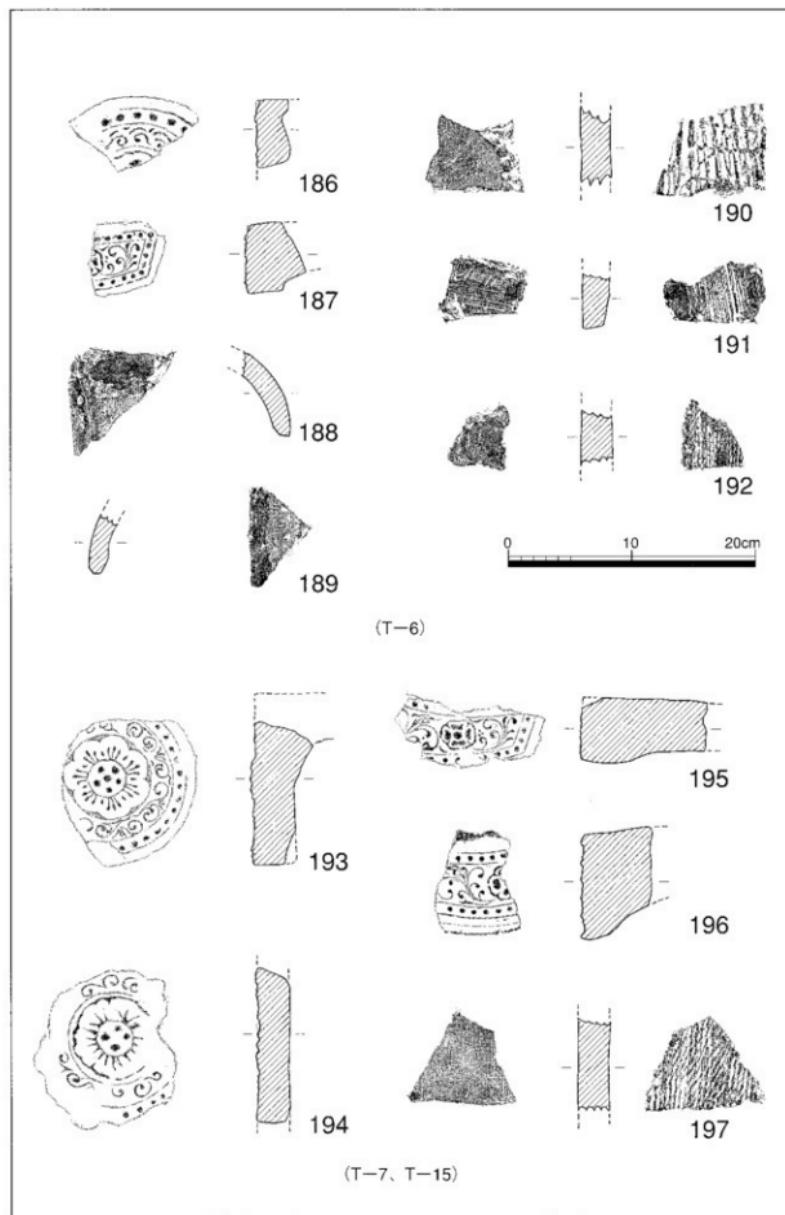
185



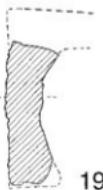
(T-13、SD-10)



第41図 出土遺物実測図（平成11年度）



第42図 出土遺物実測図（平成11年度）

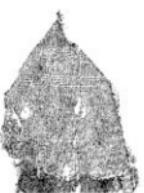
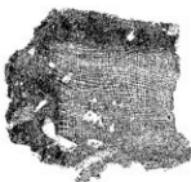


198



199

(T-9、SD-09)



201

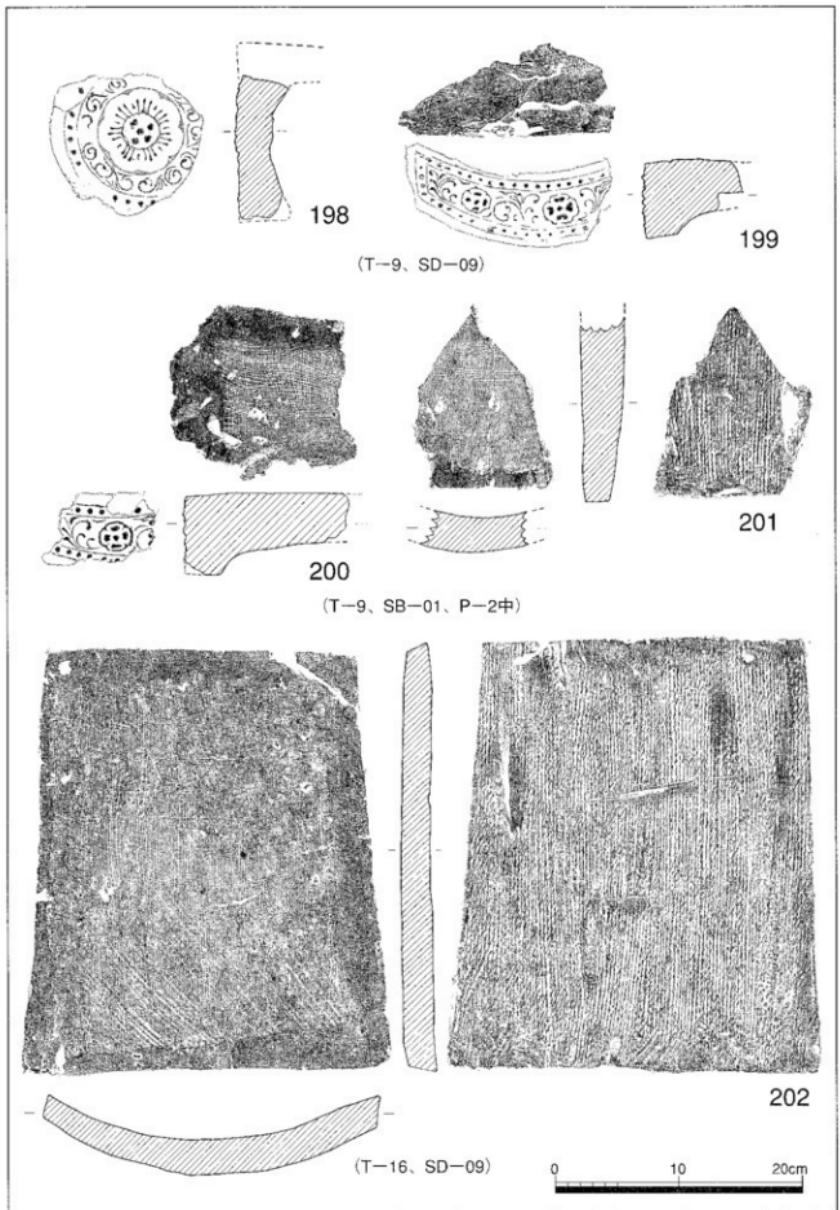
200

(T-9、SB-01、P-2中)

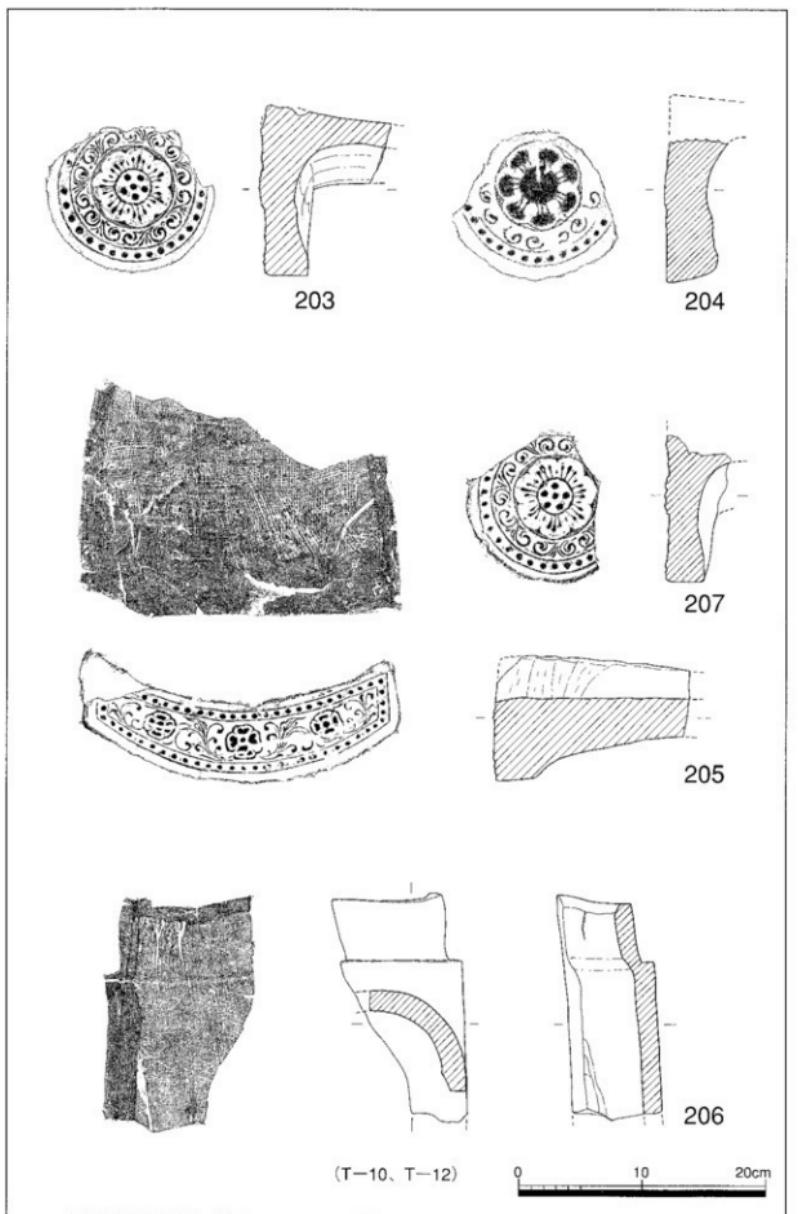


202

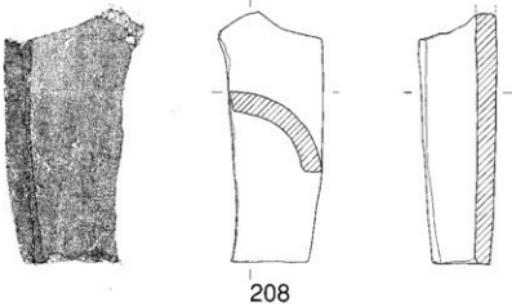
(T-16、SD-09)



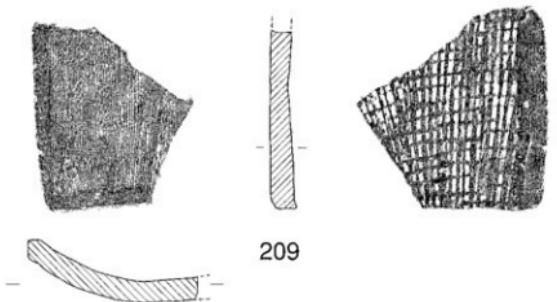
第43図 出土遺物実測図（平成11年度）



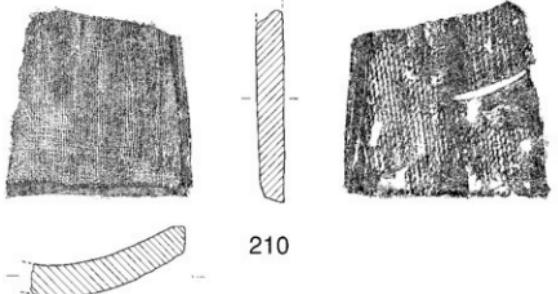
第44図 出土遺物実測図（平成11年度）



208



209



210

(T-10)

0 10 20cm

第45図 出土遺物実測図（平成11年度）

(3) 平成12年度調査

平成12年度の調査は、史跡指定地の東側および南側水田地において、寺域の東限、南限を確認する目的で調査を実施した。トレーニングは中心伽藍の主軸に直交方向でトレーニングを6箇所（T-18～23）設定した。

① T-18調査区（第46図、第52図、第54図）

T-18は平成11年度の調査において、寺域東限区画溝と推定される溝状遺構SD-09が検出されたT-9の北方5mの地点、国分寺中軸線から東方110～114mの地点に4×4mの規模で東西方向に設定したトレーニングである。

調査の結果、T-18からは溝状遺構が2箇所（SD-11、12）、上段状遺構が1箇所（SK-06）が検出された。

【土層堆積状況】

トレーニング北壁の土層観察によると、堆積土のうち、第1～2層は水田関連の土層で、暗灰～暗灰褐色を呈する粘質土が西側で薄く20cm程度、東側で厚く30cm程度の厚さで見られた。遺物はほとんど含まない。第3層は厚さ25～35cmで、灰褐色～暗棕褐色を呈する粘質土層で、土層中に若干の国分寺関連の瓦片などを含む。地山は第12層で、淡緑灰色を呈する粘質土である。地山直上の第9層は厚さ最大30cmの暗灰色粘質土であるが、国分寺関連の整地土層である可能性がある。この第9層や地山は東側ではSD-11（第5層）やSK-06（第11層）によって切られている。

トレーニング南壁では、第1～3層が水田関連の上層、第4～5層が北壁での第3層に対応するものと考えられる。一方南壁では地山が深く、第9、14、15層は暗灰～黒褐色と棕褐色の斑色の粘質土で、整地土層の可能性が考えられる。また土層のうち東側はSD-12（第6、8、10～13層）によって切られている。

【SD-11】

トレーニングの北西部を斜め方向に横切る形で検出された溝状遺構で、その軸線はTN-49°-Eとなる。溝の規模は上端幅が0.35m、深さは0.25mを測る。砂粒が混じった暗灰褐色の埋土で、遺物は含まない。国分寺に関連する可能性は低いものと考えられる。

【SD-12】

トレーニングのほぼ中央を南北に走る形で検出された溝状遺構で、やや不整形な平面形をもち、北東部はSK-06によって切られている。溝の規模は最小1.1m、最大幅2.1mを測るが、トレーニング南壁での土層観察では最大3.2mまで広がる可能性がある。深さは検出面では0.1mであるが、トレーニング南壁の土層観察によると、最大0.4mまで深くなる可能性がある。また底面のレベル高より、北から南方へ流下していた状況が観察された。埋土は暗灰色～黒灰色を呈する。出土遺物としては、溝底部から国分寺関連の丸瓦片、平瓦片（No.238～239）、須恵器坏片（No.211～212）が検出された。

【SK-06】

トレンチの北東部で検出された土壤状遺構で、その北側は更に調査区外に伸びている。土壌の規模は幅0.6m以上、長さ1.4m以上、深さ0.35mを測る。底面のレベル高より、西から東方へ流れていた状況が観察された。埋土は黒灰色の粘質土で埋土中からの出土遺物は無かった。SD-12との切り合い関係は不明である。

②T-19調査区（第47図、第52～53図、第54～55図）

T-19は平成11年度の調査において、寺城東限区画溝と推定される溝状遺構SD-09が検出されたT-90の南延長線上で、金堂跡の北方55～57m、国分寺中軸線から東方109～113mの地点に3.6×2mの規模で東西方向に設定したトレンチである。

調査の結果、T-19からは溝状遺構が1箇所（SD-13）検出された。

【土層堆積状況】

堆積土のうち、第1～3層は水田関連の土層で、暗灰～暗灰褐色を呈する粘質土が30～35cm程度の厚さで見られた。遺物はほとんど含まない。第4層は暗橙褐色を呈する遺物包含層で、国分寺関連の瓦片を多く含む。トレンチ北壁の上層観察によると、西側から東側にかけて堆積した状況が見られる。第4層の下は、西側では明橙色の地山ブロックと黒色土が斑状に検出され（第10層）、整地層であると考えられる。この整地層は東側へ向かってレベルが下がり、そこに淡灰色～暗灰色の砂粒を含んだ土層が堆積しており、さらに国分寺関連の瓦片や土器片を包含している状況が見られた。このことから溝状遺構（SD-13）が存在するものと判断された。

【SD-13】

トレンチの東よりを南北に走る溝状遺構である。溝の規模は、深さは最大0.4mを測る。幅は調査区の制約上3mまでは確認できたが、東側の端部が確認できなかつたため不明である。埋土は淡灰色～暗灰色の砂粒を含んだ上層（第5～9、11～12層）をもち、埋土中および上層（第4層）中からは多量の国分寺関連の軒丸瓦（No.240、241）、軒平瓦（No.242）、丸瓦（No.243）、平瓦（No.244、245）や須恵器の坏蓋（No.213、214）、無高台の坏（No.215、216）、III（No.217、218）、高台坏（No.219、220）、高台付皿もしくは坏類と思われる破片（No.221）、壺類（No.222、223）、短颈瓶（No.225）、土師器腹片（No.226、227）などが検出された。

③T-20調査区（第4-8図、第5-3図、第5-6図）

T-20は国分寺の南東方向で、金堂跡の南方69~71m、国分寺中軸線から東方へ104~114m地点で東西方向に10×2mの規模で設定したトレンチである。

調査の結果、トレンチ東側において溝状遺構1箇所（SD-14）が検出された。

【土層堆積状況】

堆積上のうち、第1~3、6層は水田関連の土層で、暗茶褐色~暗灰褐色を呈する粘質土が50cm程度の厚さで堆積している。遺物はほとんど含まない。国分寺関連の整地層と思われる上層は第9、11、12、13層で、淡灰色と茶~橙色の粘質土が斑層状に存在する。この整地層は東方にかけて約40cmほどレベルが下がり、また上がる状況が観察され、そこに灰色~暗灰色を呈する埋土（第8、10層）が観察され、瓦片などの堆積が見られた。このことから溝状遺構（SD-14）が存在するものと判断された。

【SD-14】

トレンチの東端部を南北に走る溝状遺構である。溝の規模は、深さは最大0.4mを測る。幅は上幅4.5m、下幅3.7mを測る。埋土は灰色~暗灰色を呈する緻密な粘質土（第8、10層）をもち、埋土中から国分寺関連の丸瓦片（No.246）、平瓦片（No.247~248）、須恵器环蓋片（No.228~229）、甕片（No.232）などが多量に検出された。なお、このSD-14の規模について、溝の西方に存在する第5層は、溝の埋土第8層とほぼ同質で、瓦片なども包含するため、さらに西方に広がる可能性も考えられる。

④T-21調査区（第4-9図、第5-3図）

T-21は国分寺の金堂跡を中心とした2町四方の南東コーナー部分に6×6mの規模で設定したトレンチである。

調査の結果、トレンチ南西部において土壤状遺構1箇所（SK-07）が検出された。

【土層堆積状況】

トレンチ北壁の土層観察によると、堆積上のうち第1~4層は水田関連の土層で、暗茶褐色~暗茶褐色を呈する粘質土が約60cm程度の厚さで見られた。遺物はほとんど含まない。第4層以下はすぐ地山（第8層）が現れる部分と、地山ブロックが混じる暗灰色の粘質土（第5~7層）が堆積する部分が見られる。

一方トレンチ西壁の土層観察によると、堆積上のうち、第1~4層は水田関連の土層で、暗茶褐色~暗茶褐色を呈する粘質土が約60cm程度の厚さで見られた。遺物はほとんど含まない。第4層以下の第5~7、9~11層は暗灰色を主体とした粘質土層で、西壁で見られた第5~7層と同質であると考えられる。地山は橙~灰白色の粘質土（第14層）である。出土遺物は地山直上から須恵器の無高台の环片（No.230）、須恵器蓋片（No.233、234）が検出された。

【SK-07】

トレンチの南西部で検出された土壤状遺構で、その西側は更に調査区外に伸びている。土壤の規模は南北長2.4m、東西長1.6m以上、深さ0.5mを測る。この土壤からの出土遺物は検出されなかつたが、地山である橙～灰白色の粘質土を掘込むことによって造られていることから、粘土採掘坑である可能性が高い。また北壁や西壁で見られる地山の落ち込みもSK-07のような粘土採掘坑によって出来た可能性も考えられる。

⑤T-22調査区（第50図、第53図）

T-22は国分寺の南東方向で、国分寺の金堂跡から南方へ1町（109m）地点、国分寺の主軸から東へ85mの地点に南北方向に10×2mの規模で設定したトレンチである。

調査の結果、トレンチ北側で土壤状遺構1箇所（SK-08）、トレンチ南側の東壁に溝状の落ち込み（SD-15）が検出された。

【土層堆積状況】

トレンチ東壁の観察によると、堆積土のうち第1～6、10、12層は水田関連の土層で、淡灰色～暗灰褐色を呈する粘質土が50cm程度の厚さで堆積している。遺物はほとんど含まないが、わずかに須恵器の腹片（No.231）が検出された。国分寺関連の整地層と思われる土層は第7、17、18、23層で、黒色粘質土と橙褐色粘質土が斑状に混在する特有の土層であるが、同レベルのトレンチ北側では暗灰色～黒灰色の砂質土（第13、22層など）が堆積しており、これらの土層は整地土層であるかどうかは不明である。

一方トレンチ南側では整地層が落ち込み、淡灰褐色～黒灰色の砂粒を含む粘質土が堆積している状況が見られ、溝状遺構（SD-15）の存在が窺われた。さらにこの溝状遺構は第21層で切られている状況が観察された。

トレンチ西壁に設定したサブトレの断面観察によると、東壁と同様に水田関連の土層（第1～7層）の下には整地層と思われる塊状の土層（第8～18層）の堆積が見られた。

【SD-15】

トレンチの東壁では幅2.0m、深さ0.5mの規模で確認されたが、平面プランが判然とせず、溝の方向性は不明であった。このため粘土採掘坑の可能性も考えられる。

【SK-08】

トレチの北端部で検出された土壤状遺構で、その北側は更に調査区外に伸びている。土壤の規模は直径0.5m以上はあるものと思われるが、第12層に掘り込まれているため、後世のものと考えられる。

⑥T-23調査区（第51図、第53図）

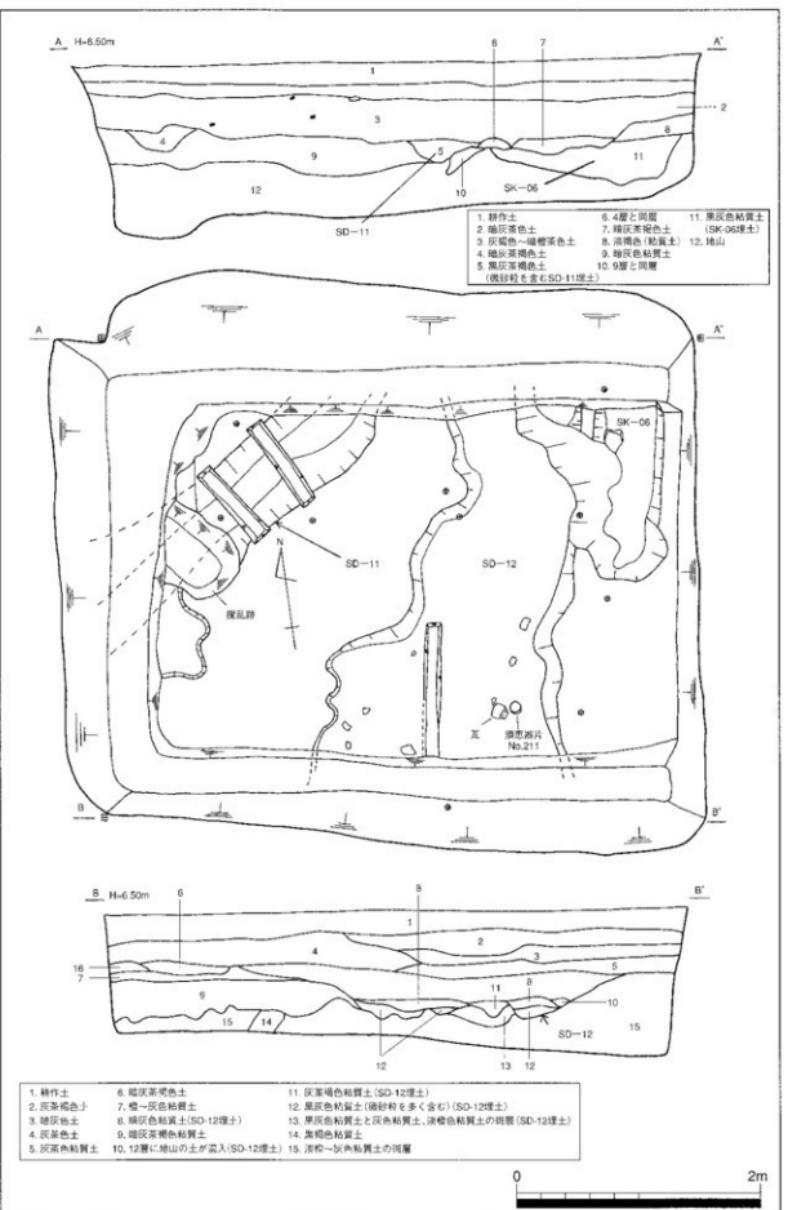
T-23は国分寺の金堂跡から南方へ89m地点で、天平古道の西側に南北方向で10×2mの規模で設定したトレチである。

調査の結果、耕作土下約0.4mで地山である青灰色粘質土となり、遺構は確認できなかった。遺物は第2層中より少量の須恵器の壺底部片（No.235）、瓦片が検出されただけであった。

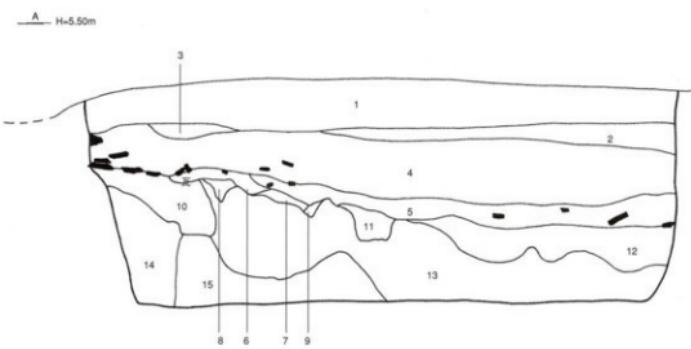
⑦平成12年度調査まとめ

平成12年度の調査の結果、寺域の区画溝の可能性が考えられる溝状遺構が3箇所で発見された。SD-12は国分寺の中軸線から東方へ112.6mの地点、SD-13は同112m、SD-14は同111mの地点に存在する。平成11年度に検出されたSD-09は国分寺中軸より東方へ112mの地点で検出されているので、これらはほぼ同一線上に位置し、寺域東限の区画溝である可能性が考えられる。また、いずれの遺構も深さが0.2～0.45mと浅いことから、後世に削平された可能性が考えられる。

一方、整地層の広がりについては、東方の広がりは平成11年度調査範囲の城を出ないが、南方は金堂跡を中心として109m南方に設定したT-22ではわずかに整地層とも思われる黒色粘質土と橙褐色粘質土が斑状に混在する特有の上層が30cm程度の厚さで部分的に検出されている。しかし、国分寺東方で確認された整地土層に比べると幾分薄く、部分的であり、寺域辺境の印象があった。



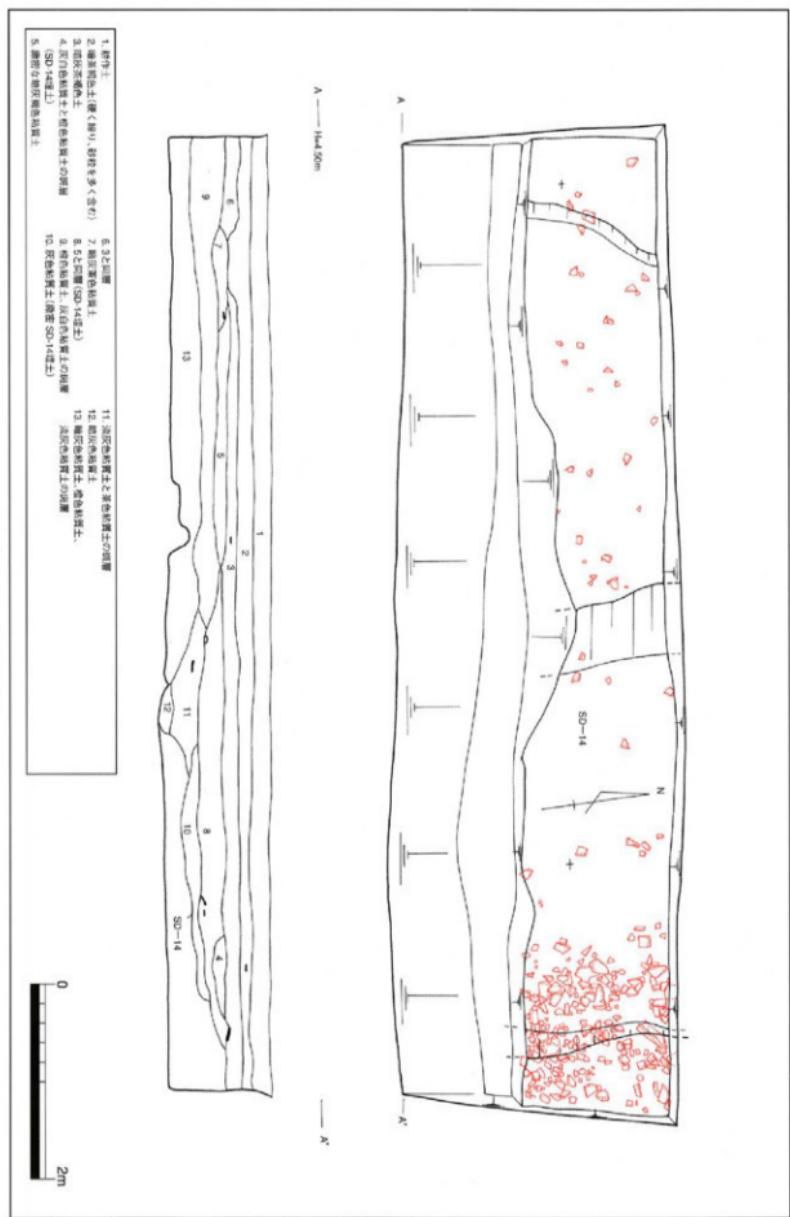
第46図 T-18調査成果図



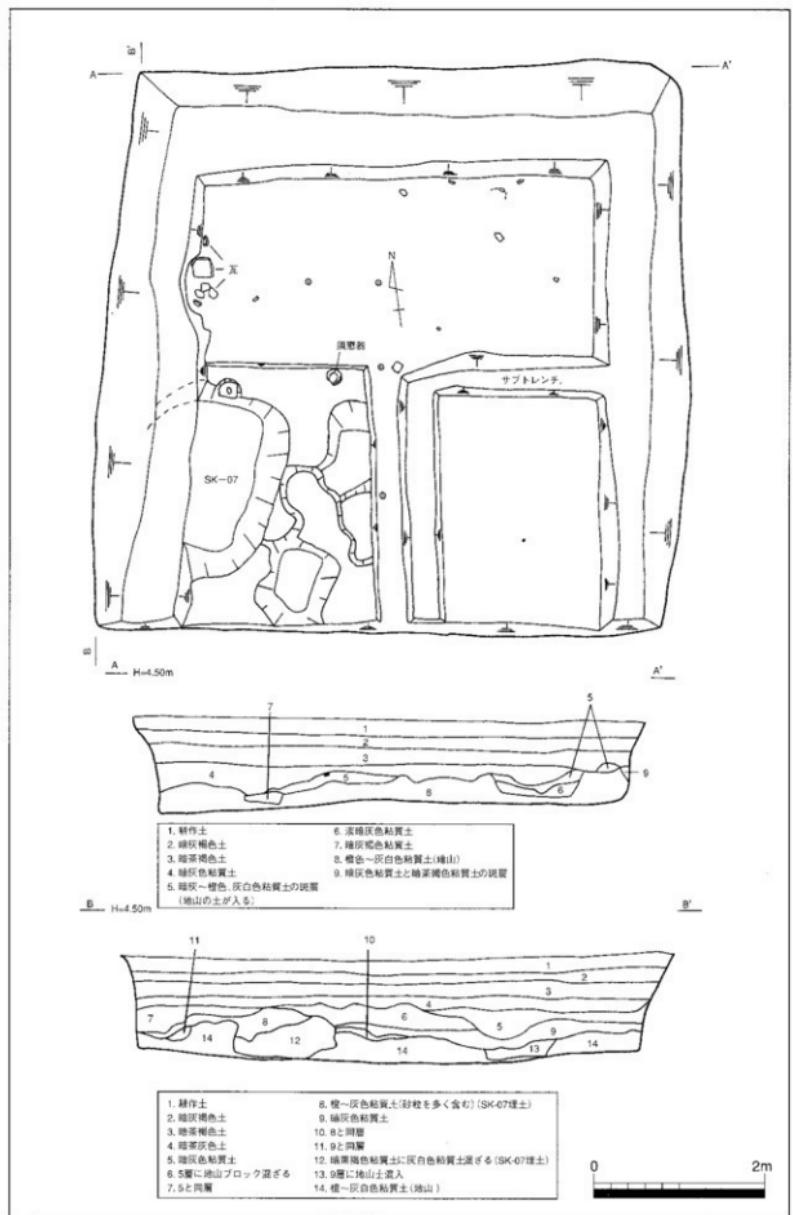
- | | | |
|-----------------------------------|----------------------------|---------------------------------|
| 1. 緑作土 | 6. 淡灰褐色土に僅かに地山ブロックが混入する | 11. 8と同層 |
| 2. 淡灰褐色土に暗褐色土が少量混入する
(SD-13埋土) | 7. 淡灰褐色土(砂粒を多く含む SD-13埋土) | 12. 8と同層 |
| 3. 暗褐色土 | 8. 淡灰褐色土(微細粒含む SD-13埋土) | 13. 地山ブロック、黒色土、
暗褐色土の混層(整地層) |
| 4. 暗褐色土(古瓦片を多く含む) | 9. 8と同層 | 14. 黒色土(地山ブロック多く含む 整地層) |
| 5. 淡灰褐色土(砂粒多い、古瓦片含む)
(SD-13埋土) | 10. 明褐色の地山ブロックと黒色土の混層(整地層) | 15. 黒色土(整地層) |



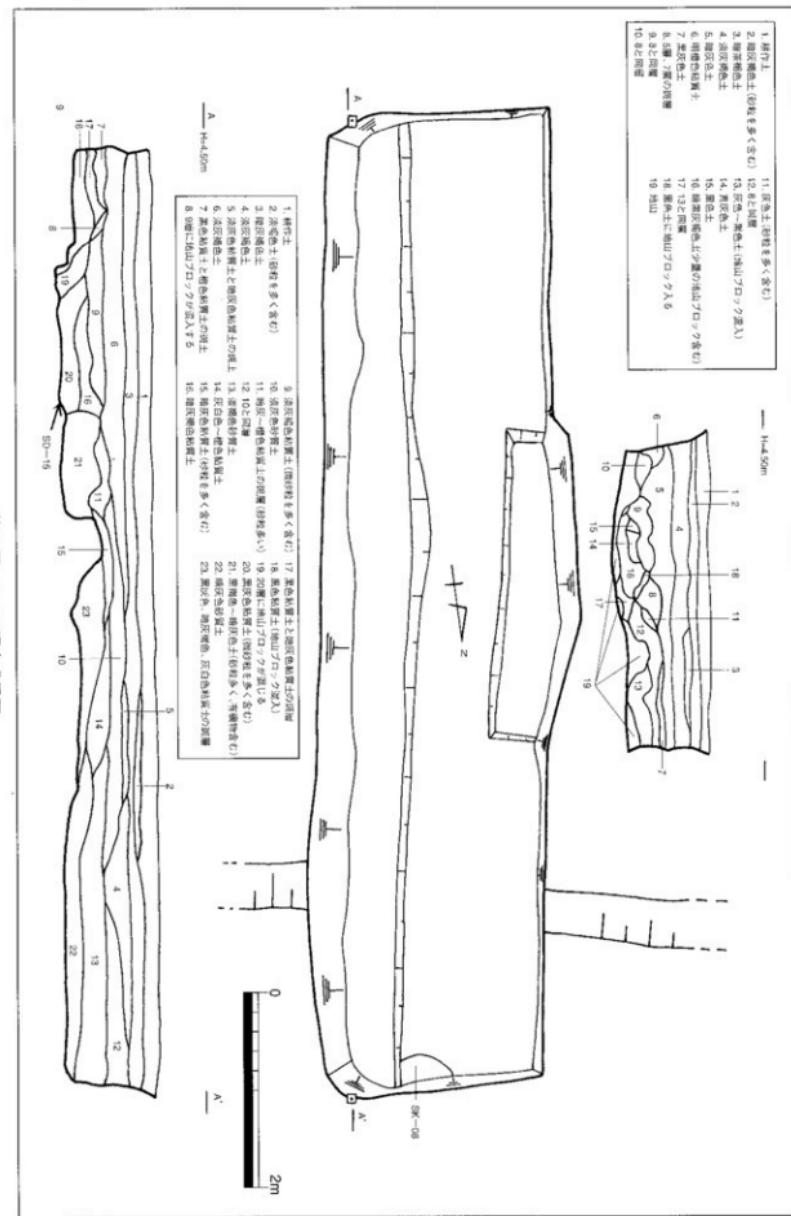
第47図 T-19調査成果図



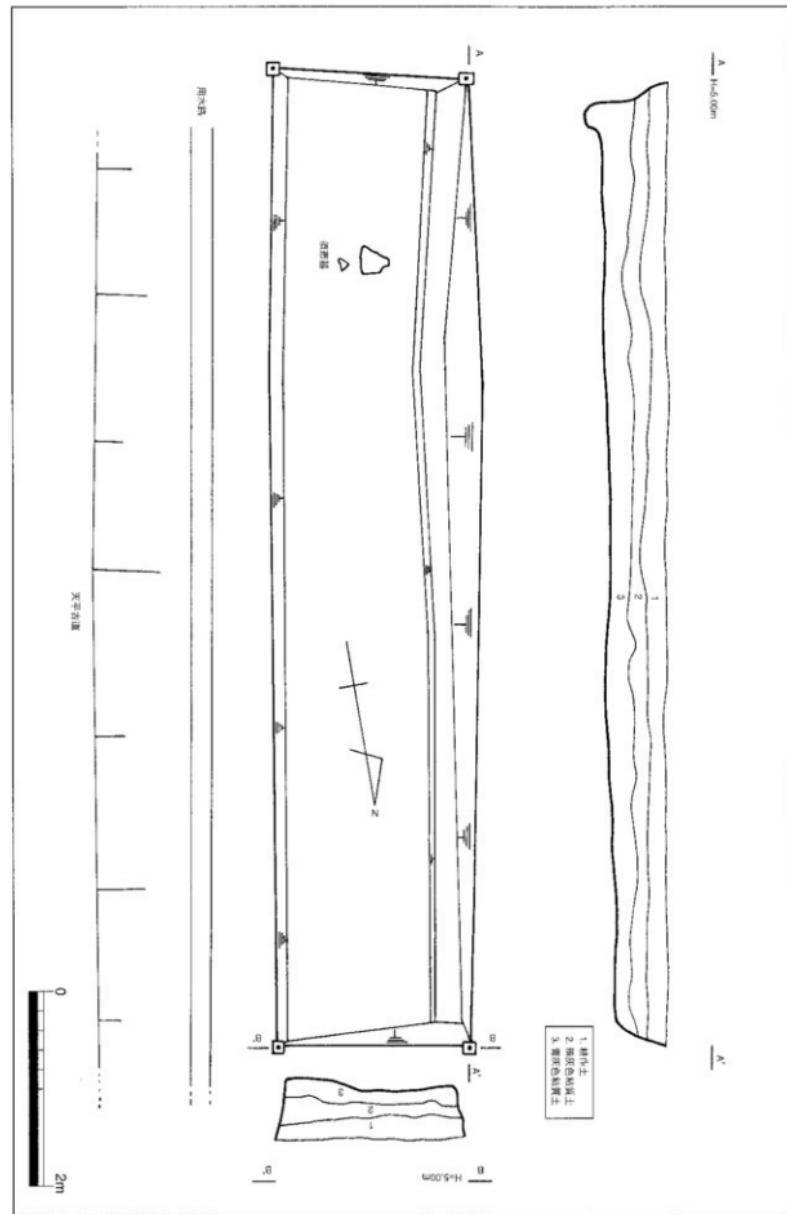
第48図 T-20調査成果図



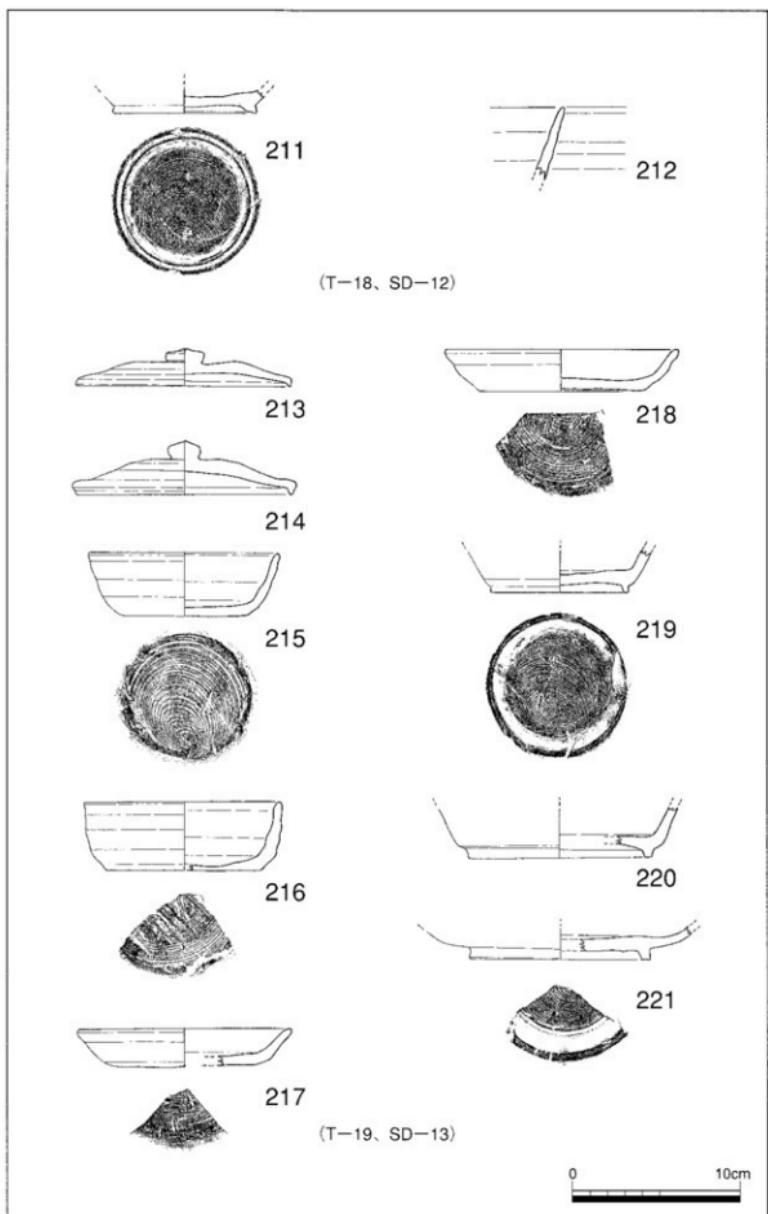
第49図 T-21調査成果図



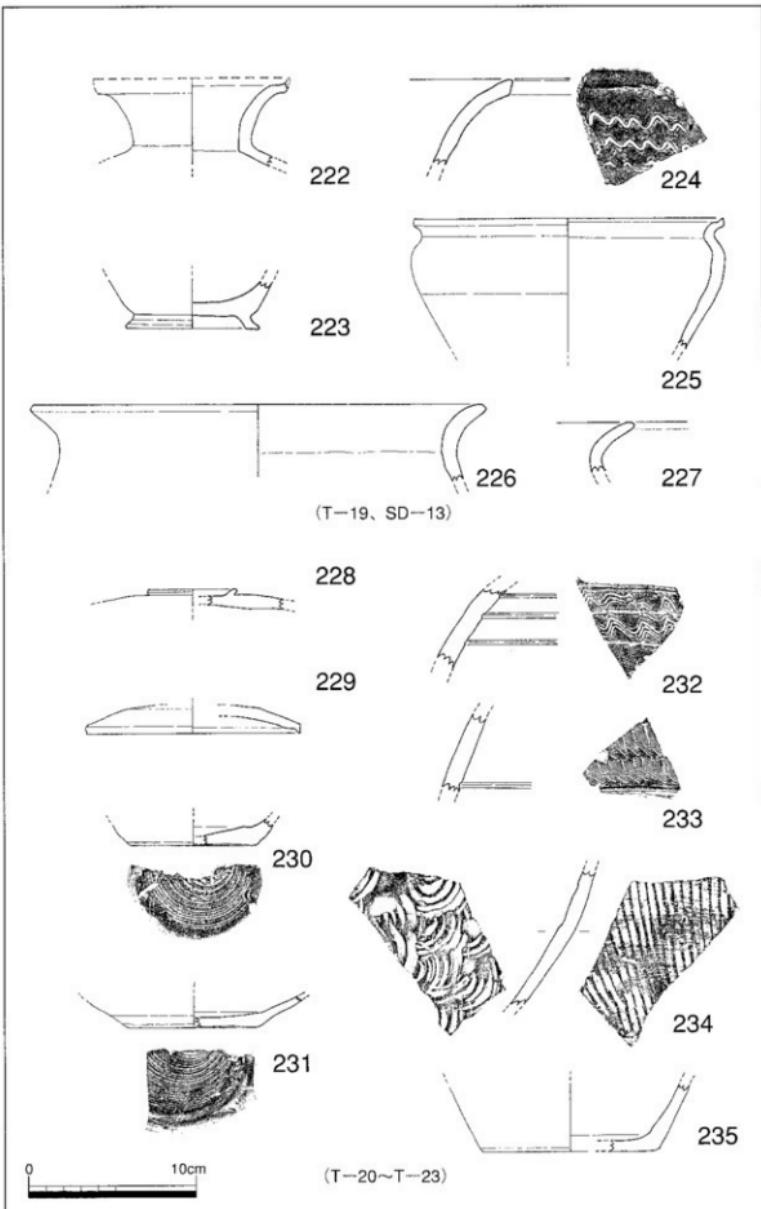
第50図 T-22調査成果図



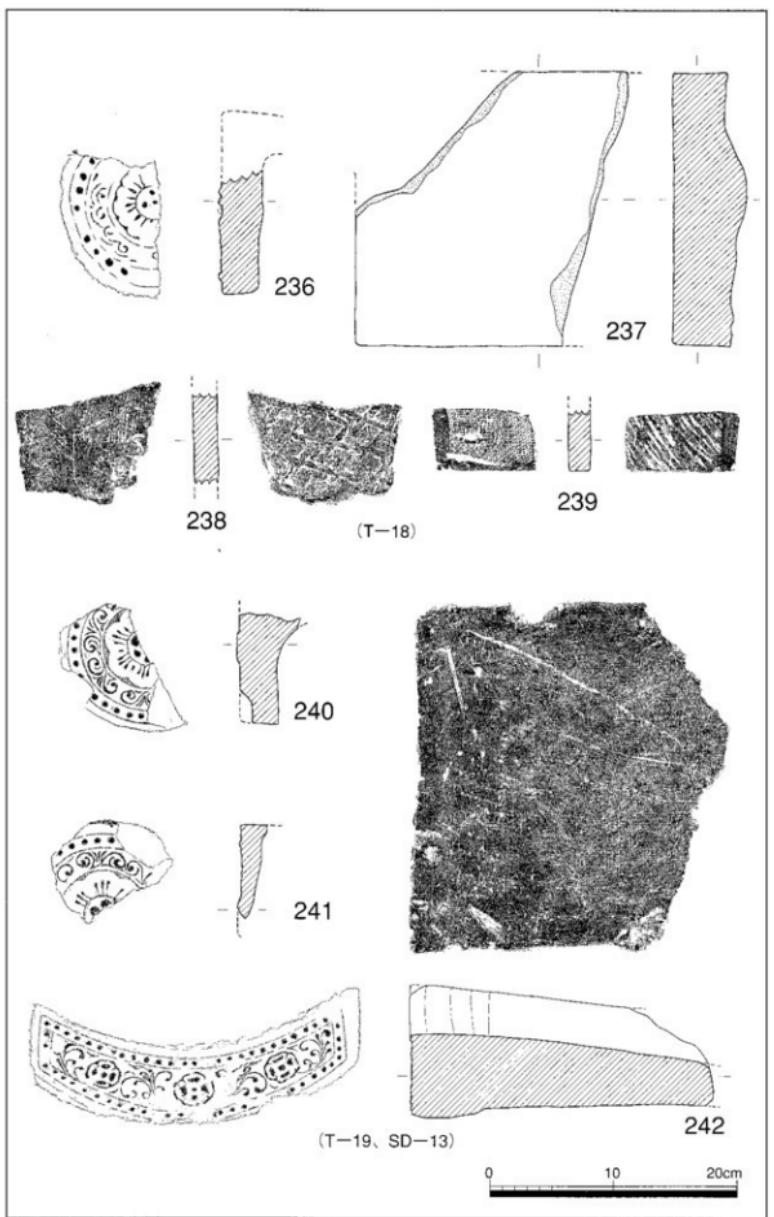
第51図 T-23調査成果図



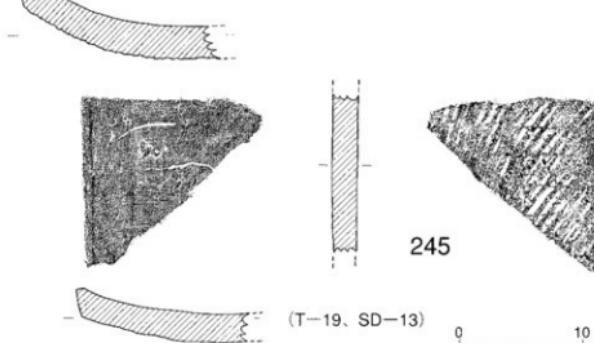
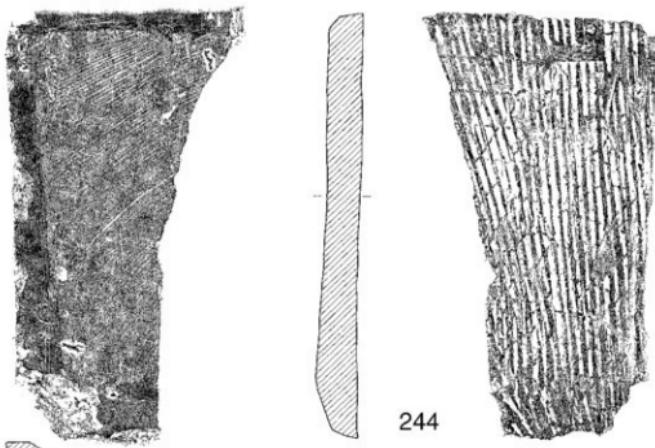
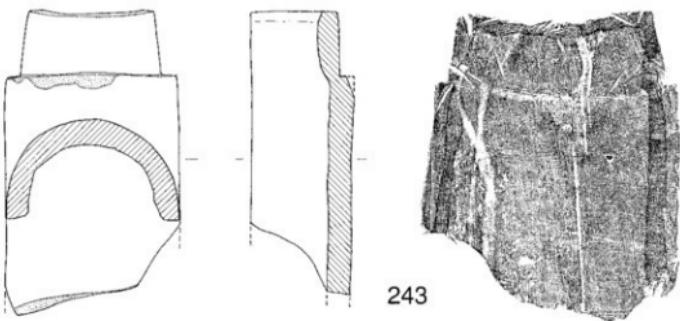
第52図 出土遺物実測図 (平成12年度)



第53図 出土遺物実測図（平成12年度）



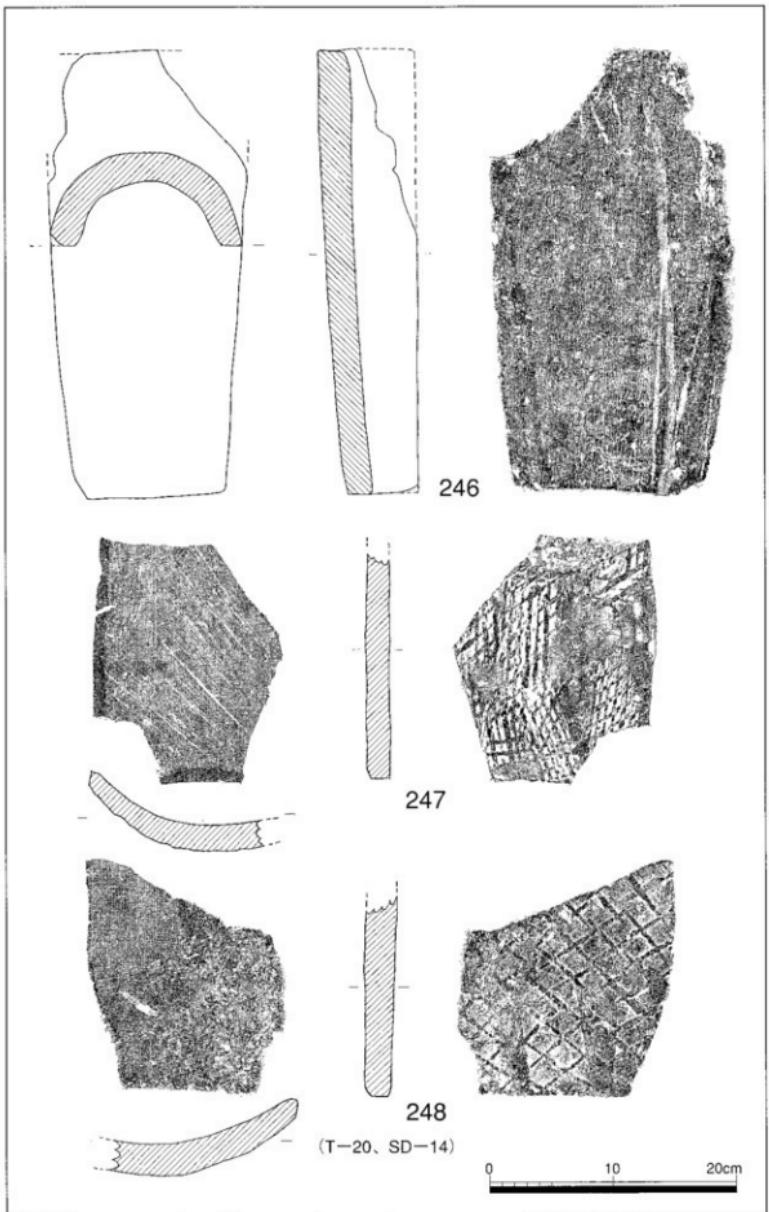
第54図 出土遺物実測図（平成12年度）



(T-19、SD-13)

0 10 20cm

第55図 出土遺物実測図（平成12年度）



第56図 出土遺物実測図（平成12年度）

(4) 平成13年度調査

平成13年度の調査は、寺域の北限および南限を確認する目的で史跡指定地の北東部および南東部において調査を実施した。トレンチは中心伽藍の主軸に直交または平行方向でトレンチを8箇所（T-24～31）設定した。

①T-24調査区（第57図、第66図）

T-24は寺域南限を確認する目的で、国分寺金堂跡から南方へ109m、中軸線から西へ55mの地点で南北方向に10×2mの規模で設定したトレンチである。

調査の結果、遺構は検出されなかった。

【土層堆積状況】

堆積土のうち、第1～4層は水田閑連の土層で、暗灰～暗灰褐色を呈する粘質土が40cm程度の厚さで見られた。土層中には若干の国分寺閑連の瓦片や須恵器の台付壺片（No.251）を含む。第5層上面では須恵器环身（No.249）、土師器壺片（No.250）が検出されたが、第5層以下は無遺物層で灰色～橙褐色の粘質土が約70cmの厚さで堆積している。この土層全てが整地土層であるかどうかは判断し難いが、下部の第7層では暗灰褐色粘質土と青灰色粘質土が斑層状に見られ、整地土層である可能性が考えられる。

遺構としては、古瓦片の検出されない第4層より下の土層堆積を観察する限りでは、その存在は認められなかった。トレンチ東壁の観察では南北から中央部にかけて第4層下面が緩やかに落ち込んでいるが、西壁ではそのような落ち込みは確認出来ないことから部分的なものと思われる。

②T-25調査区（第58図、第66図）

T-25は寺域南限を確認する目的で、国分寺金堂跡から南方へ109m、中軸線から東へ35mの地点に南北方向に10×2mの規模で設定したトレンチである。

調査の結果、土壤状遺構が2箇所検出された。

【土層堆積状況】

堆積土のうち、第1～3、8層は水田閑連の土層で、暗灰褐色を呈する粘質土が20～40cm程度の厚さで見られた。この土層中から若干の国分寺閑連の瓦片と、第2層中からは須恵器壺片（No.252）が検出された。

水田閑連の土層の下はすぐ地山が現れ、土壤状遺構が2箇所（SK-09、10）検出された。

【SK-09】

トレンチの中央部やや北寄りで検出されたやや不整形な土壤状遺構で、その西側は更に調査区外に伸びている。土壤の規模は南北長1.3m、東西長1.1m以上、深さ0.2mを測る。埋土は地山ブロックを含む灰褐色土（第4層）が堆積しており、埋土中からの出土遺物は検出されなかった。この土壤の性格は不明であるが、土壤の断面形状が袋状を呈しており、粘土探掘坑もしくは部分的な整地の可能性も考えられる。

【SK-10】

トレンチの中央部やや南寄りで検出されたやや不整形な土壤状遺構で、その西側は更に調査区外に伸びている。土壤の規模は南北長2.7m、東西長1.7m以上、深さ0.2mを測る。埋土は地山ブロックを含む灰褐色～暗灰色の埋土（第6～7、9～10層）が堆積しており、埋土中からの出土遺物は検出されなかった。この土壤の性格は不明であるが、土壤埋土の堆積状況が自然な堆積状況ではないので、粘土探掘坑もしくは部分的な整地の可能性も考えられる。

③T-26調査区（第59図、第66図）

T-26は国分寺金堂跡から南へ88m、国分寺中軸線から東方へ35mの地点に4.5×5mの規模で設定したトレンチである。

調査の結果、土壤状遺構が2箇所検出された。

【土層堆積状況】

堆積土のうち、第1層は水田の耕作土で、灰褐色を呈する粘質土が約20cm程度の厚さで見られた。この耕作土を取り除くと、トレンチ北側の一部で基盤層である青灰色の粘質土が現われ、大小2箇所の土壤状遺構（SK-14、15）が切り合った状態で検出された。トレンチ中央部に設定したサブトレンチでの上層観察では、SK-15がSK-14を切る状況が観察された。

【SK-14】

トレンチ南側で検出された不整形な土壤状遺構で、トレンチ外に広がる大きなものであるため、規模は不明である。深さは0.6mを測り、地山面（第6層）まで掘り込まれている。埋土は黒褐色土と淡灰褐色土の斑層で、埋土中からの出土遺物は検出されなかった。この土壤の性格は不明であるが、埋土の特徴から粘土探掘坑の可能性も考えられる。

【SK-15】

トレンチ北側で検出された不整形な土壤状遺構で、トレンチ外に広がる大きなものであるため、規模は不明である。深さは0.4mを測り、地山面（第6層）まで掘り込まれている。埋土は地山ブロックの混じる黒褐色土で、埋土中から須恵器の合付壺片（No253）が検出された。この土壤の性格は不明であるが、埋土の特徴から粘土探掘坑の可能性も考えられる。

④T-27調査区（第60図、第66～67図）

T-27は国分寺南門跡から東方へ65mの地点で南北方向に10×3m、3.5×3mの規模で設定したトレチである。

調査の結果、溝状遺構が1箇所検出された。このため西方に拡張区を設定した。

【土層堆積状況】

堆積土のうち、第1～3層は水田関連の土層で、茶褐色を主体とした粘質土が約30cm程度の厚さで堆積している状況が観察された。第2層中からは須恵器の环盞（No.254）が検出された。この土層を取り除くと東西に走る溝状遺構（SD-16）が検出された。

【SD-16】

トレチの北側を東西に走る溝状遺構である。西側に追加した拡張区でも検出されており、東西に長く伸びる溝状遺構であることが想定される。遺構検出面では多量の国分寺関連の丸瓦片（No.267）、半瓦片（No.268）が検出された。溝はやや不整形な形であるが、上端幅1.2～2.8m、深さ約0.3mを測る。埋土は黒灰色を呈する土層である。

⑤T-28調査区（第61図、第66～68図）

T-28は国分寺金堂跡から南へ88m、国分寺中軸線から東方へ109mの地点に東西方向で10×7mの規模で設定したトレチである。また平成12年度の調査トレチT-20から南へ15mの地点で、T-20で検出されたSD-14の南延長部を確認することを目的として設定した。

【土層堆積状況】

土層堆積状況は第1～3層までが水田関連の土層で、暗灰褐色～暗褐色を呈する粘質土が約40cmの厚さで堆積している。

当初、本調査地点では3×10mの東西に長いトレチを設定していたが、第4層上面で多量の国分寺関連の瓦片（No.269～271）と、小縫が入り混じて検出されたことから、その範囲を確認するため南北2mずつ拡張した。その結果、この古瓦と小縫の広がりは幅約2.5mほどの東西方向の帯状をなすものであることが判った。この面での出土遺物には、古瓦に混じって江戸期の唐津焼きと思われる陶器片（No.255）も検出されている。

北側に拡張した2×10mの範囲で最下層の橙～灰白色粘質土上面に達するまで掘り下げたところ、なんら遺構の存在を示すものは確認できなかった。

出土遺物としては瓦片、土師質土器片（No.256）が基盤層の直上まで検出されている。

⑥T-29調査区

T-29は国分寺金堂跡から北へ109m、国分寺中軸線から東方へ88mの地点に設定したトレントである。ちょうど水田の畦畔が存在することから、畦畔を挟んで南と北にトレントを分けて設定して調査を行った。

調査の結果、T-29北では溝状遺構1箇所、土壤状遺構1箇所、T-29南では上層状遺構1箇所が検出された。

a) T-29北(第6-2図、第6-6図、第6-8~6-9図)

厚さ約0.2mの耕作土を取り除くと、トレント北側では直径約4mの半円状のプラン(SK-11)、南側では幅約1mの東西方向の帯状プラン(SD-17)を検出した。トレントの東端と西端にサブトレントを入れて土層堆積状況を観察すると、東壁では溝状遺構SD-17の断面のみが確認でき、西側ではSK-11がSD-17を切る状況が確認できた。

SD-17は東西方向の溝であり、深さは検出面から約1m、幅は上端で約1mを測り、断面形状はU字形を呈する。溝の方位は国分寺の主軸をTNとするとき、TN-90°-Eとなり、国分寺の主軸と直交する。トレント東側での土層堆積状況から、この溝は一度掘り直しが行われているものと考えられ、古段階の埋土は灰~暗灰褐色の埋土(東壁:第6~7層)、新段階の埋土は淡灰~淡灰褐色の埋土(東壁:第3、5層)であるものと考えられる。

出土した主な遺物としては、SD-17の古段階の遺構底面から国分寺関連の軒平瓦片(No.274)などの瓦片が数片検出された。また、新段階の遺構底部(西壁:第8層)より、人頭大の石一つと、棒状の木材(長さ約1m、断面は三角形、片端は折損、片端は工具による切跡)が検出された。

SK-11は検出面からの深さ約0.8m、平面形は検出された部分で、上端径約4m、底部径約3.4mの半円状を呈するが、トレントの西側に伸びているため円形になる可能性が考えられる。断面形は底部が平坦であり、壁面は急角度で立上がる。トレント西壁での土層堆積状況から、この土壤は溝状遺構SD-17の掘り直しが行なわれた後に掘り込まれ、更にその後にこの土壤自体も一度掘り直しが行なわれているものと考えられ、古段階の埋土は第3、6、7層、新段階の埋土は2、4、5層であるものと考えられる。

検出された遺構の掘り込まれた順をまとめると、まず、SD-17が掘り込まれ、次にSD-17が掘り直された後、SK-11がSD-17を切る形で掘り込まれ、さらに掘り直しが行なわれている。

出土遺物としては、古段階の遺構底面からは土師器壺片(No.262)が検出され、新段階の遺構底面および埋土中からは須恵器の高台坏片(No.257、258)、壺類片(No.260、263)、国分寺関連の丸瓦片(No.273)、平瓦片(No.276、277)、土師器壺片(No.261)が検出された。

b) T-2 9南 (第62図、第67図)

厚さ約0.2mの耕作土を取り除くと、トレンチ中央部の東よりにやや不整形な土壤状遺構 (SK-12) が検出された。

SK-12の平面形は検出された部分で半円状を呈する。遺構の規模は、検出面からの深さ約1.1m、上端幅1.6mを測る。断面形は壁面上部が若干窄まる袋状を呈する。埋土は灰色～黒灰色を呈する (第4～10層)

出土遺物は埋土中より須恵器の高台坏片 (No.264、265)、高台付皿 (No.266) や国分寺関連の古瓦片が検出された。

⑦T-3 0調査区 (第64図、第69図)

T-3 0は国分寺南門跡から東方へ86mの地点で南北方向に10×3mの規模で設定したトレンチである。

調査の結果、溝状遺構が1箇所 (SD-18) 検出された。

【土層堆積状況】

堆積土のうち、第1層は水田の耕作土で、茶褐色を主体とした粘質土が約20cm程度の厚さで堆積している状況が観察された。耕作土中に遺物はほとんど含まれない。耕作土の下には淡灰褐色粘質土と地山ブロックの斑層 (第3層) と黒灰色 (第10層) が存在し、SD-18もこのレベルで検出された。地山は浅く、耕作土の直下に一部現れ、深い部分でも表土下30cm (第3層下) で確認された。

【SD-18】

トレンチのやや南寄りを東西に走る溝状遺構である。トレンチの東西両側の壁に断面が見られるところから、トレンチの外へ東西方向に長く伸びる溝状遺構であることが想定される。遺構の規模は溝の上端幅で約2.4m、下端幅で約1.6m、深さ約0.2mを測る。断面は遺構肩部から底部にかけて緩やかに落ち込む形状を呈する。

埋土は暗茶褐色～黒褐色を呈し、出土遺物としては、国分寺関連の丸瓦片 (No.278)、平瓦片 (No.279～280) などがある。特にNo.278丸瓦の外側にはヘラ書きで「牛」と記されていることが注目される。

⑧T-3 1調査区 (第65図、第69図)

T-3 1はSD-18の東延長部を確認する目的で、T-3 0から10m東方 (国分寺南門跡から東方へ96mの地点) に南北方向で10×3mの規模で設定したトレンチである。

調査の結果、溝状遺構が1箇所 (SD-19) 検出された。

【土層堆積状況】

堆積土のうち、第1層は本田の耕作土で、約20cmほどの厚さを測り、土層中に遺物はほとんど含まない。第1層の下はトレンチ南側では暗褐色土と地山の斑層（第2層）、トレンチ中ほどから北側では暗褐色土（第3層）の堆積が見られた。これらの土層中には国分寺関連の軒丸瓦片（No.281）、丸瓦片（No.282）をはじめ瓦片を多く含む。第2、3層の下にはすぐ地山が存在するが、地山の深さは第2層下部から第3層下部にかけて一段下がる状況が見られ、この部分に溝状遺構（SD-19）が存在することが推定された。

【SD-19】

トレンチの南寄りを東西に走る溝状遺構で、国分寺の主軸をTNとすると、TN-90°-Eとなり、国分寺の主軸と直交する。トレンチの東西両側の壁に断面が見られることから、トレンチ外にも東西方向に長く伸びる溝であることが想定される。T-3で検出されたSD-18とつながる可能性が高いものと思われる。遺構の規模は上端幅で約0.5m、下端幅で0.15m、深さ0.25mを測る。

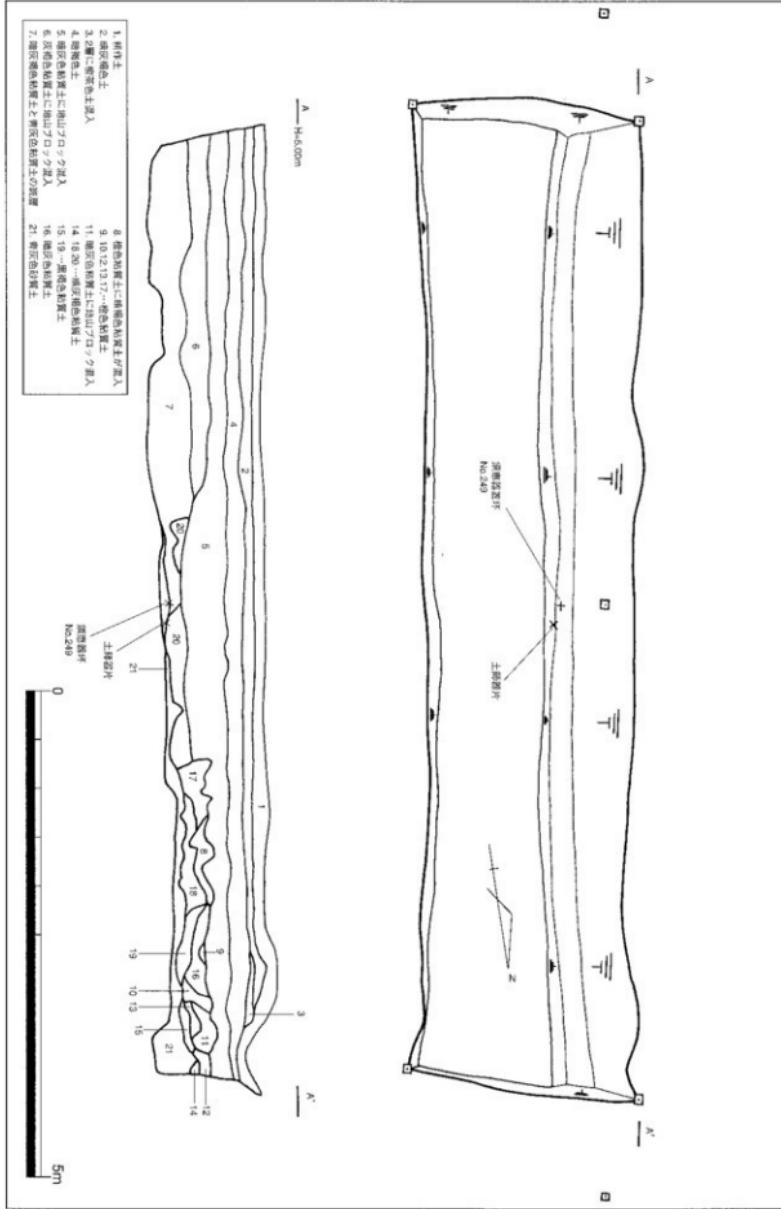
⑨平成13年度調査まとめ

平成13年度の調査の結果、寺域の区画溝の可能性が考えられる溝状遺構が4箇所で発見された。

SD-17は国分寺の金堂跡から北方へ113.5mの地点に存在し、金堂跡を中心として方2町範囲を一応の寺域の目安とした場合の距離（金堂跡から1町北=109m）に近いことから、国分寺の寺域北限区画溝の可能性が考えられた。ただし、平成11年度のT-5、13で検出されたSD-06とは同一延長線上にならない（SD-06は金堂跡から北へ95m地点）ことが疑問として残った。しかし、SD-06の東延長線上に設定したT-8では関連する溝状遺構が検出されていないことを考え合わせると、T-6からT-8の間で流路が変化している可能性が考えられた。

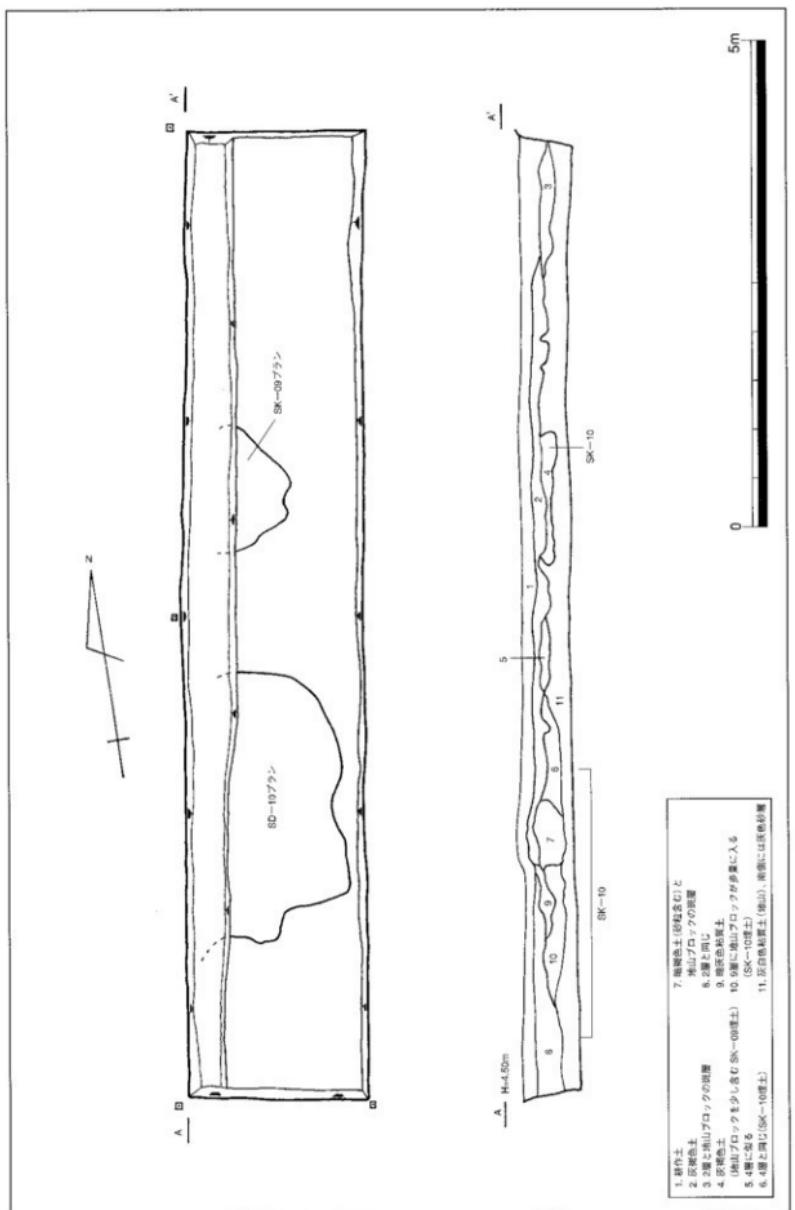
一方、国分寺南側で検出されたSD-16、18、19はほぼ同一延長線上に存在し、一連の溝状遺構であると考えられた。金堂跡から南方へ1町（109m）地点より近く、71~73m地点に位置するが、国分寺の中軸線に直交することと、南門跡真東の延長線上に存在することから、国分寺の寺域南限区画溝の可能性が推定された。

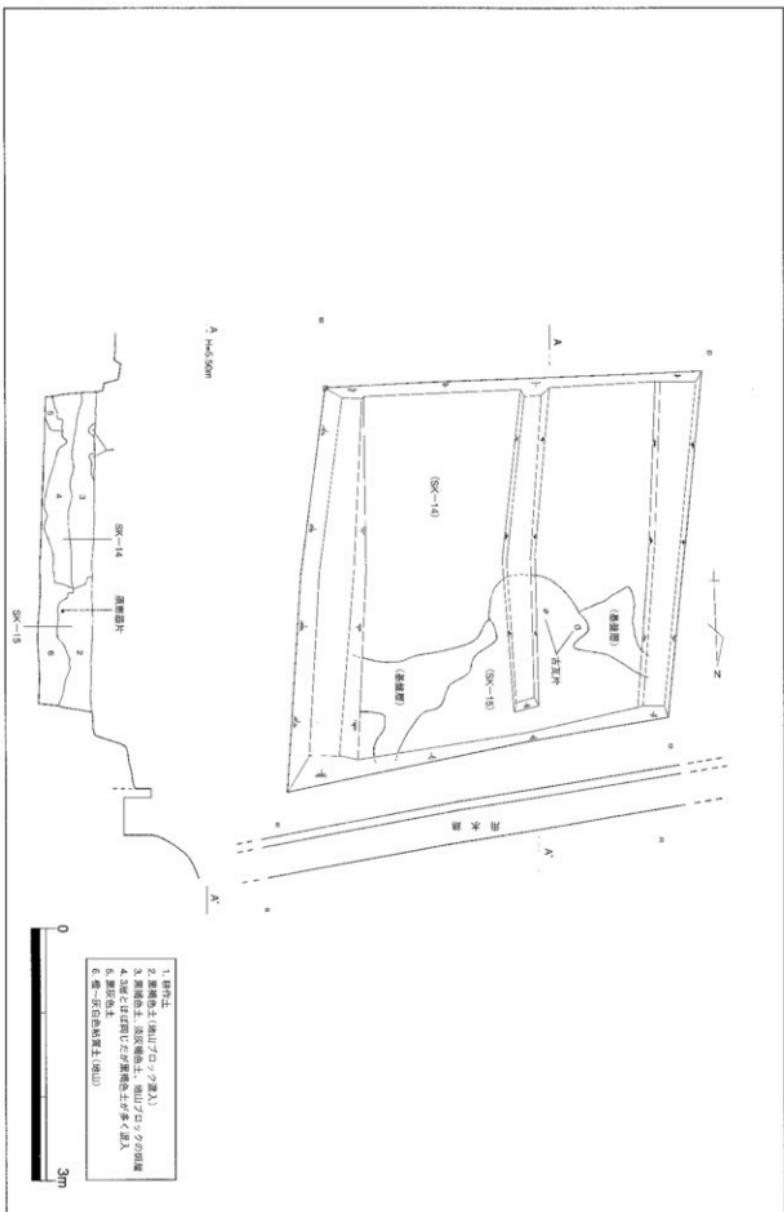
一方、整地層の広がりについては、国分寺南西部に設定したT-24ではやや厚く最大80cmを測るが、国分寺南部～南東部にかけては薄く、最大で20cm程度しか確認されなかった。



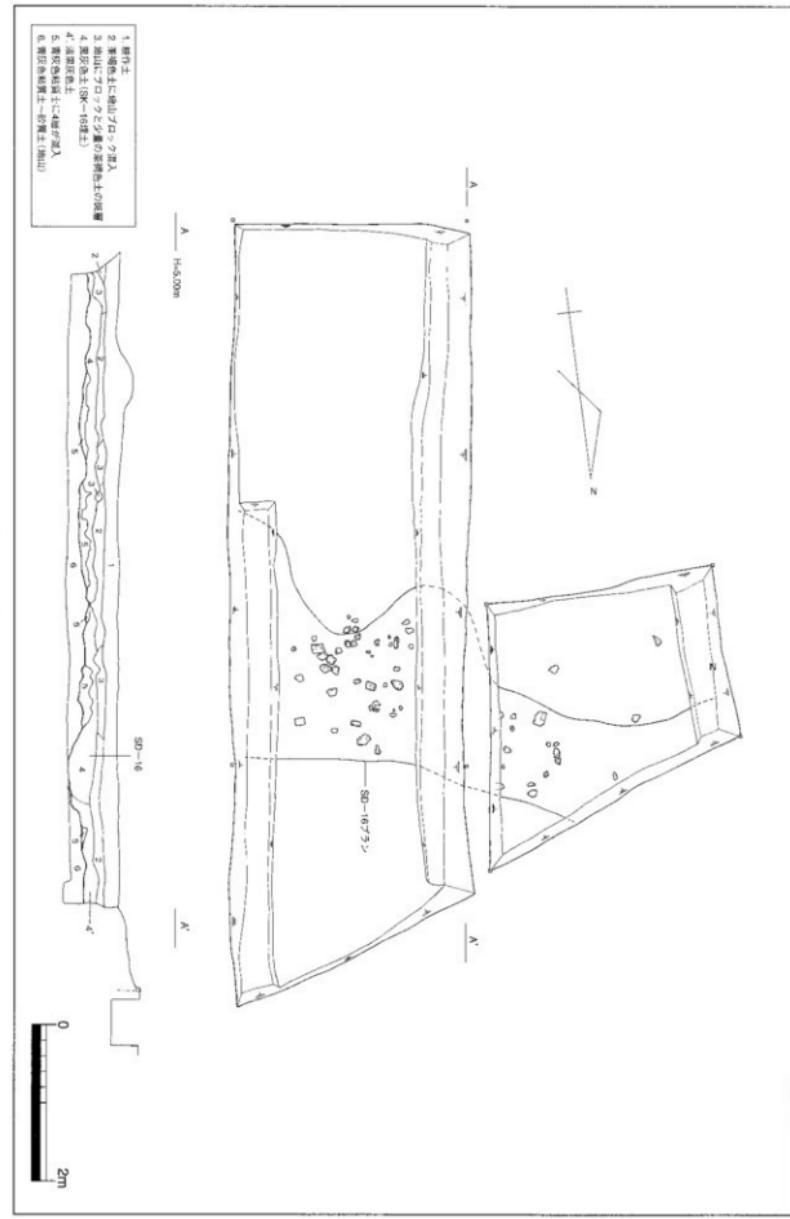
第57回 トトロ調査成績

第58図 T-25調査成果図

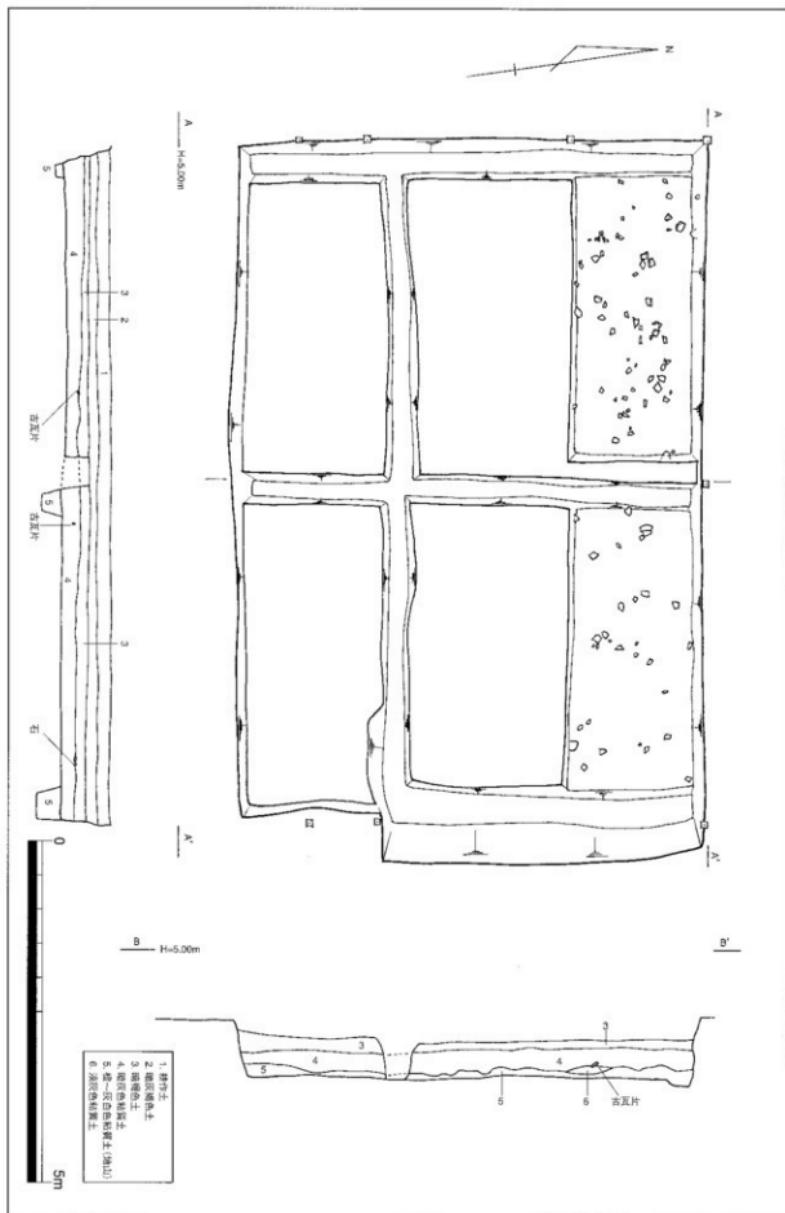




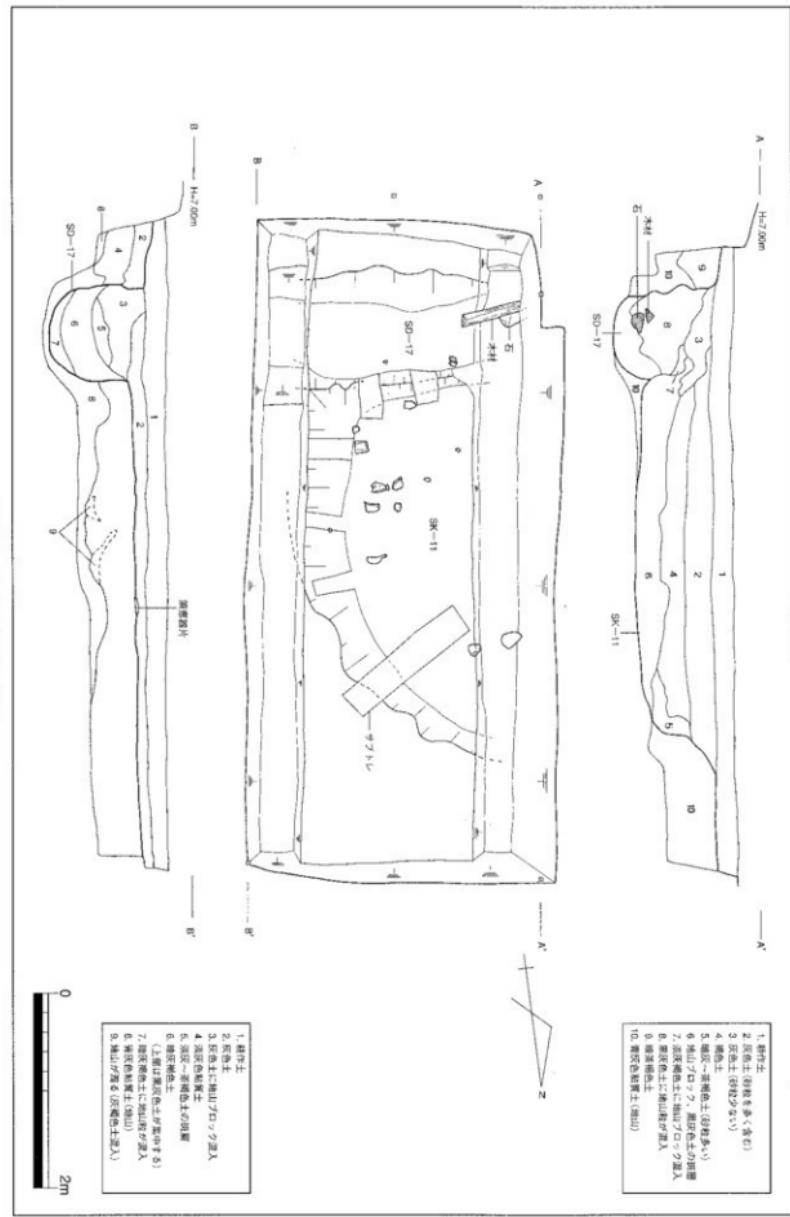
第59図 T-26調査成果図



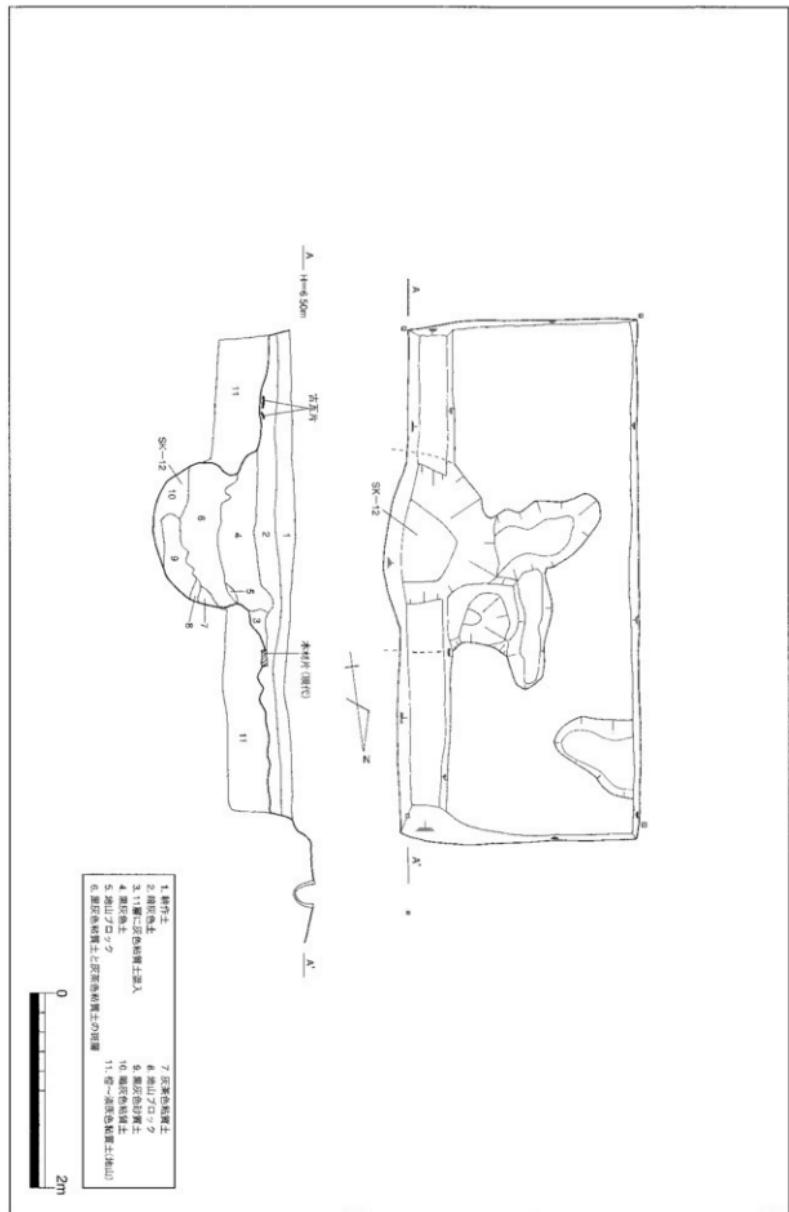
第60図 T-27調査成績図



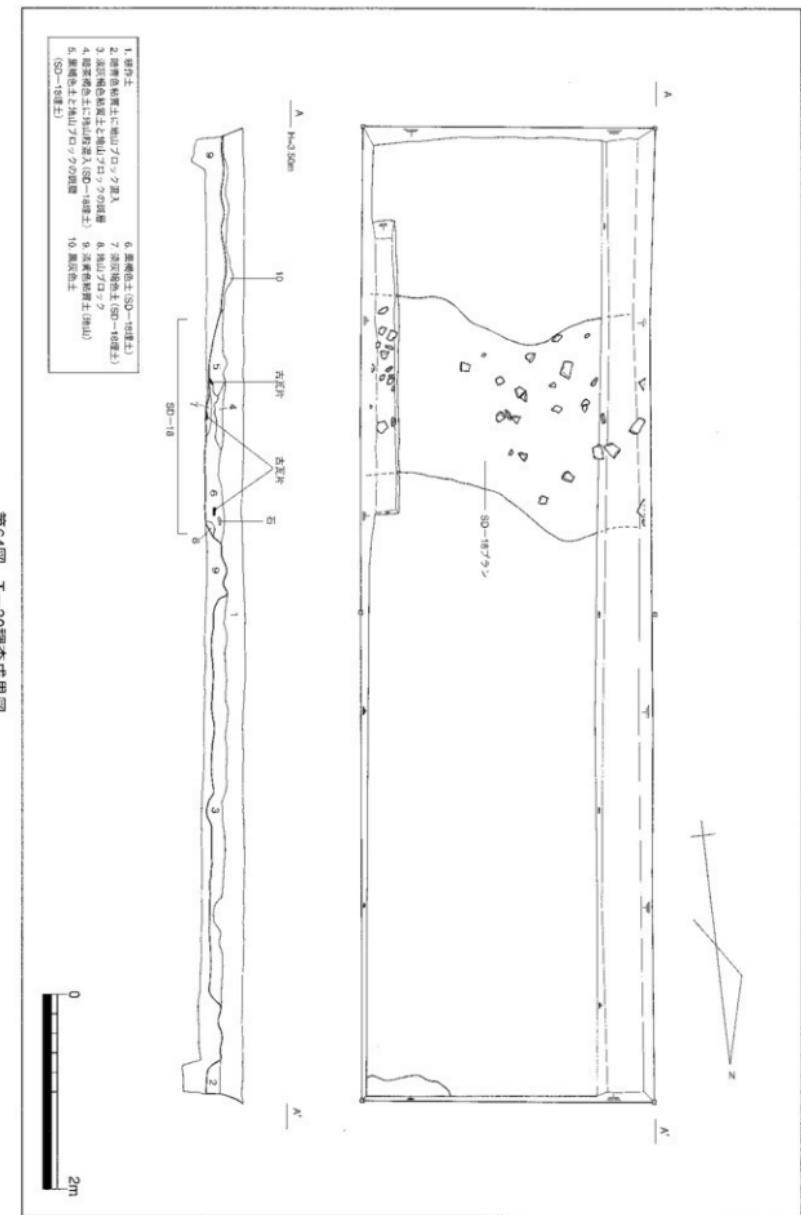
第61図 T-28調査成果図



第62図 T-29北調査成果図



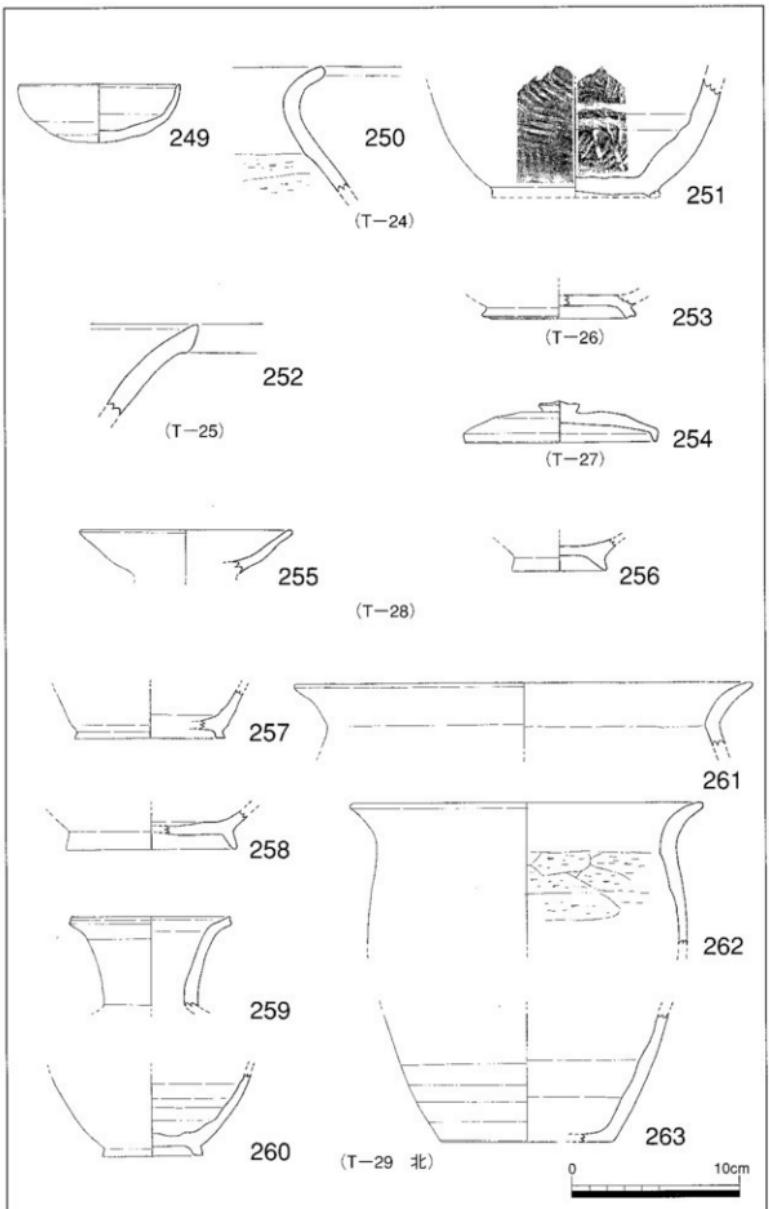
第63図 T-29N調査成果図



第64図 T-30調査成果図



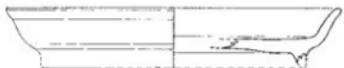
第65図 T-31調査成果図



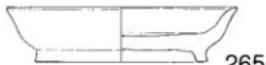
第66図 出土遺物実測図（平成13年度）



264

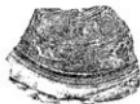


266

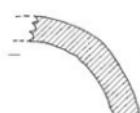


265

(T-29 南)



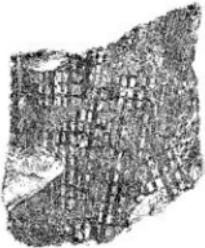
0 10cm



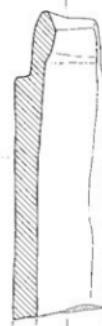
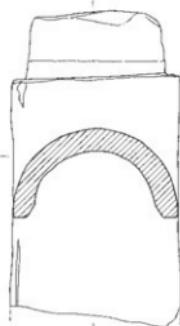
267



268

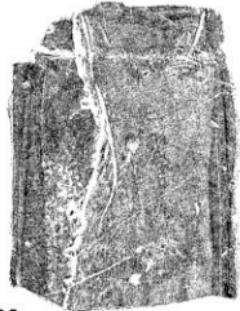


(T-27)



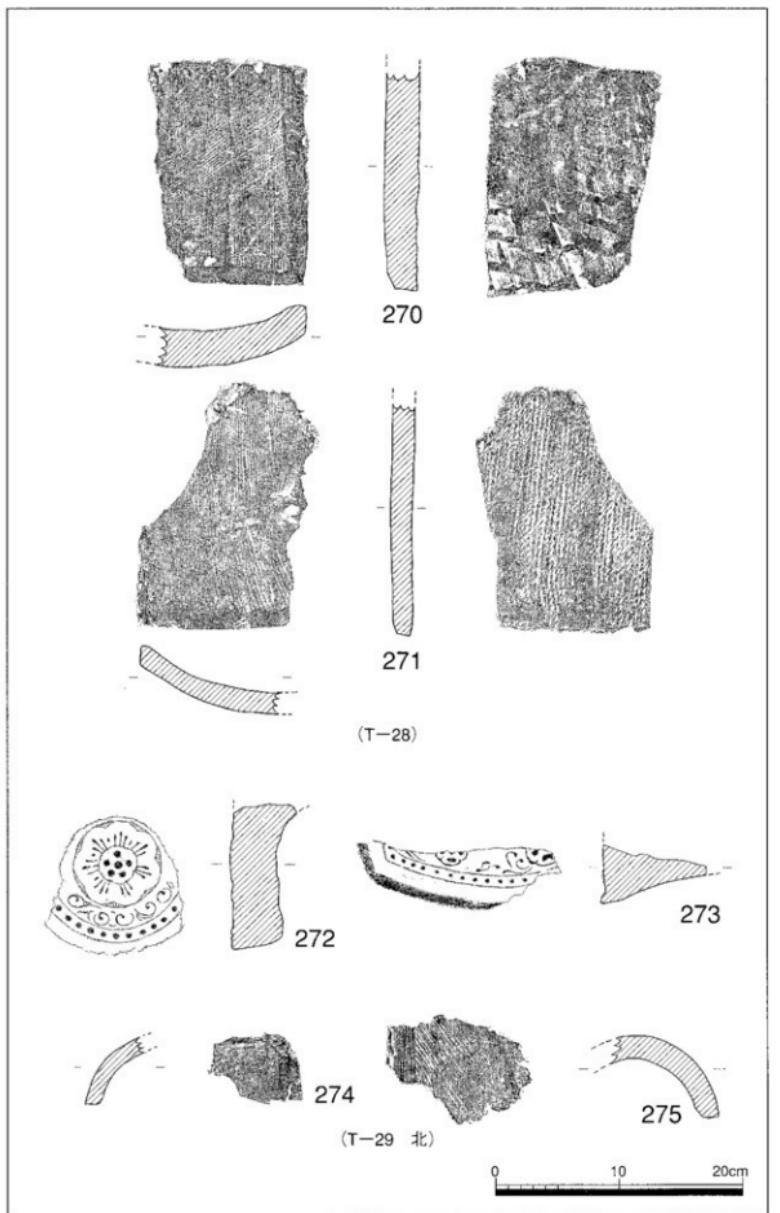
269

(T-28)

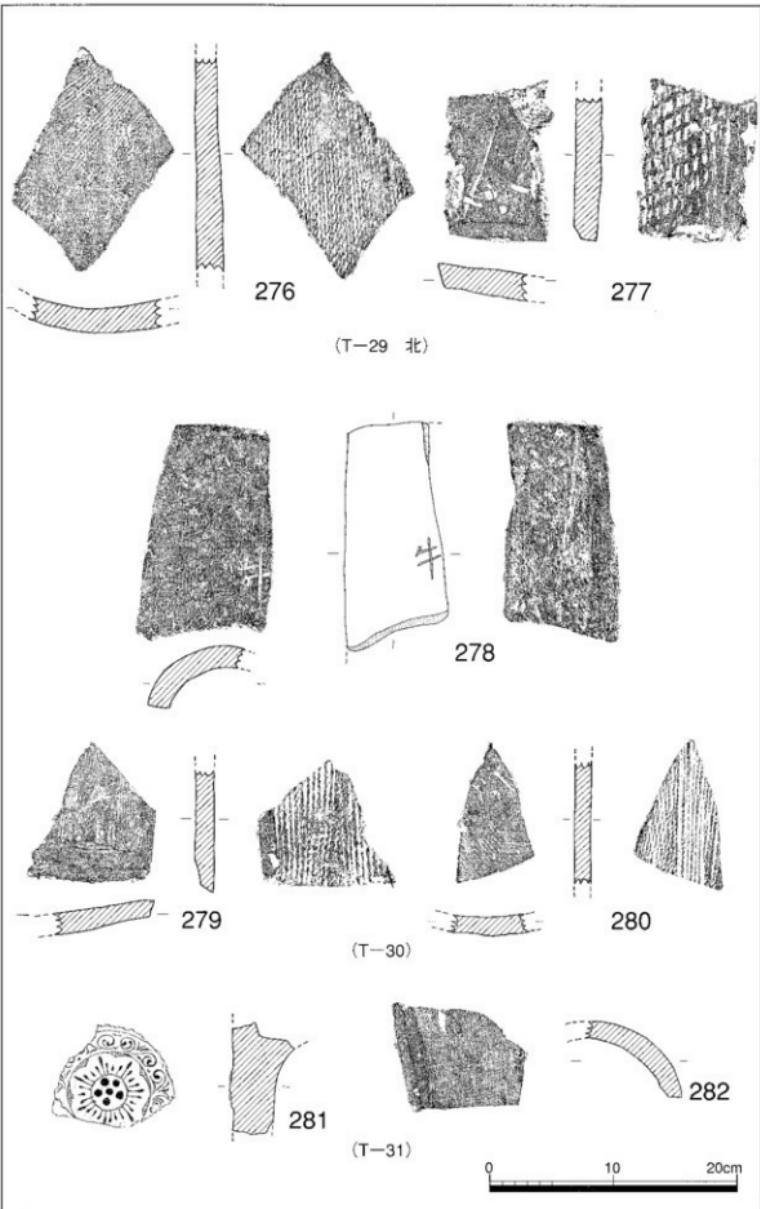


0 10 20cm

第67図 出土遺物実測図 (平成13年度)



第68図 出土遺物実測図（平成13年度）



第69図 出土遺物実測図（平成13年度）

(5) 平成14年度調査

平成14年度の調査は、寺域確認調査としては寺域の北限および南限、東限を確認する目的で史跡指定地の北東部および南東部、東部にトレンチを4箇所（T-32～35）、また中門跡、回廊跡の遺構確認調査としてトレンチを2箇所（T-36～37）設定した。

（※本報告書ではT-36、37の概要報告は割愛する。）

① T-32調査区（第70図、第75～76図）

T-32は国分寺金堂跡から北方へ112～116m、中軸線から東方へ109～116mの地点で寺域北東部のコーナーを確認する目的で7×4mの規模で設定したトレンチである。

調査の結果、溝状遺構が1箇所（SD-20）検出された。

【土層堆積状況】

堆積土のうち第1～4層は水田関連の土層で厚さ70cm程度で均一に存在する。上層中には若干の国分寺関連の瓦片を含む。

第5層は遺物を多く包含し、須恵器の壺蓋片（No.283）や無高台の壺片（No.285）、砥石（No.287）などが検出された。第5層以下は青灰色粘質土と橙褐色粘質土の斑層であったため、当初は国分寺造成時の整地層かと思われたが、土層断面で溝状に落ち込む暗灰色砂質土（第9層）が確認されたことから、溝状遺構が存在することが推定された。なお、出土層位は不明であるが、須恵器貢の丸明皿もしくは鏡とも思われる遺物（No.286）が1片検出された。

【SD-20】

SD-20は第6層上面で検出された溝状遺構で、トレンチを東西に横断する形で検出され、トレンチの東西の壁で断面が観察されたので、さらにトレンチの東西方向に伸びるものと考えられる。溝の規模は、幅1.4m、深さ0.3m程度で、暗灰色で砂質の埋土（第9層）が堆積していた。埋土中からの出土遺物として、須恵器の無高台の壺片（No.284）、平瓦片（No.300）などが検出された。

なお、SD-20の検出時には、東西方向のプランに直行する方向のプランも確認された。しかしサブトレなどによる断面観察では溝状遺構であるかどうか判然としなかった。

② T-33調査区

T-33は国分寺金堂跡から北方へ5～7m、国分寺中軸線から東方へ105～130mの地点で寺域東限の区画溝を確認する目的で設定したトレンチである。水田の畦畔を挟んで東側をT-33東、西側をT-33西とした。

a) T-33東（第71図、第75～76図）

12.5×2mの規模で設定したトレンチである。調査の結果、柱穴と思われるビットが14箇所検出された。

【土層堆積状況】

堆積土のうち第1～2層は水田関連の上層で厚さ25cm程度で均一に存在する。土層中には若干の国分寺関連の瓦片を含む。この層の下には暗茶褐色を呈する遺物包含層（第3層）が存在し、須恵器の皿片（No.288）や高台坏片（No.292～294）、須恵器壺片（No.295）、国分寺関連の軒丸瓦（No.301）、軒平瓦（No.302）などが検出された。第4層上面は遺構面であり、柱穴と思われるピットが14箇所検出された。

【ピット群】

第4層上面で検出されたピット群は、合計14穴である。このうち東西方向に柵列状に並ぶピット列（P-1、3、5、8、13）が検出された。ピット列の方向は国分寺の主軸をTNとすると、TN-49°～Eでほぼ直交する方位をとる。ピットの間隔は2.12～2.27mでほぼ等間隔、いずれも直径25cm前後、深さ20～28cmを測る。ピット中からの出土遺物は、P-1から国分寺関連の平瓦片（No.306）、P-4から丸瓦片（No.305）、P-8から平瓦片（No.303）、P-13からは須恵器壺片（No.296）および平瓦片（No.304、307）が検出されたことから、国分寺関連の施設である可能性が高い。その他の遺構は検出されなかった。

b) T-3 3西（第71図、第75～77図）

10×2mの規模で設定したトレンチである。調査の結果、土壤状遺構が1箇所（SK-13）検出された。

【土層堆積状況】

堆積土のうち第1～2層は水田関連の上層で厚さ25cm程度で均一に存在する。土層中には国分寺関連の軒平瓦片（No.308）など、若干の国分寺関連の瓦片を含む。この層の下は黄褐色～茶褐色を呈する粘質土が非常に乱れた状態で堆積しており、これが整地によるものなのか、後世の耕地整理によるものなのか不明である。この土層中からの出土遺物はトレント北壁に設定したサブトレの第6層から検出された土師器壺（No.299）のみである。

【SK-13】

トレント東側で、耕作土上面から0.4m下（第14層下）で検出された土壤状遺構である。トレントの北側に伸びているため全形は不明であるが、ほぼ円形の平面プランで、規模は東西1.8m、南北1.6m以上、深さ0.3mを測る。遺構検出面では完形の国分寺関連の平瓦（No.309）と墨書き土器（No.297）が検出された。墨書き土器は無高台の坏底面に「升上」と読める文字が書かれている（注1）。その他土壌の埋土中からも若干の瓦片が検出された。

（注1）島根県古代文化センター主任研究員、平石充氏のご教示による。

③T-34調査区（第73図）

T-34は史跡指定地内において国分寺金堂跡から北方へ92~98m、中軸線から東方へ55~57mの地点で、平成11年度に検出されたSD-06の東延長部を確認する目的で6×2mの規模で設定したトレンチである。

調査の結果、表土（整備盛土）の下はすぐ地山で遺構は検出されなかった。出土遺物は盛土中から若干の瓦片が検出されたのみである。

④T-35調査区（第74図、第77図）

T-35は史跡指定地内において国分寺金堂跡から南方へ68~74m、国分寺金堂跡から真東へ20~22mの地点で、平成13年度に検出されたSD-16、18、19の延長部を確認する目的で6×2mの規模で設定したトレンチである。

調査の結果、溝状遺構が1箇所（SD-26）検出された。

【土層堆積状況】

堆積土のうち第1~6層は木田関連および史跡整備時の造成盛土で、厚さ85cmを測る。第5層を除去した段階で瓦溜り状に多量の国分寺関連の瓦片が検出され、溝状遺構（SD-26）のプランも検出された。

【SD-26】

トレンチ南側で検出された東西方向の溝状遺構で、トレンチ東西壁よりさらに外側に伸びる状況が観察された。溝の規模は上端幅2m以上、下端幅1.0m、深さ1.2mを測る。遺構検出面および埋土中にも国分寺関連の瓦片（N:310）を包含することから、同時期の溝状遺構であると考えられる。埋土は暗褐色~暗灰色を呈する粘質土であった。

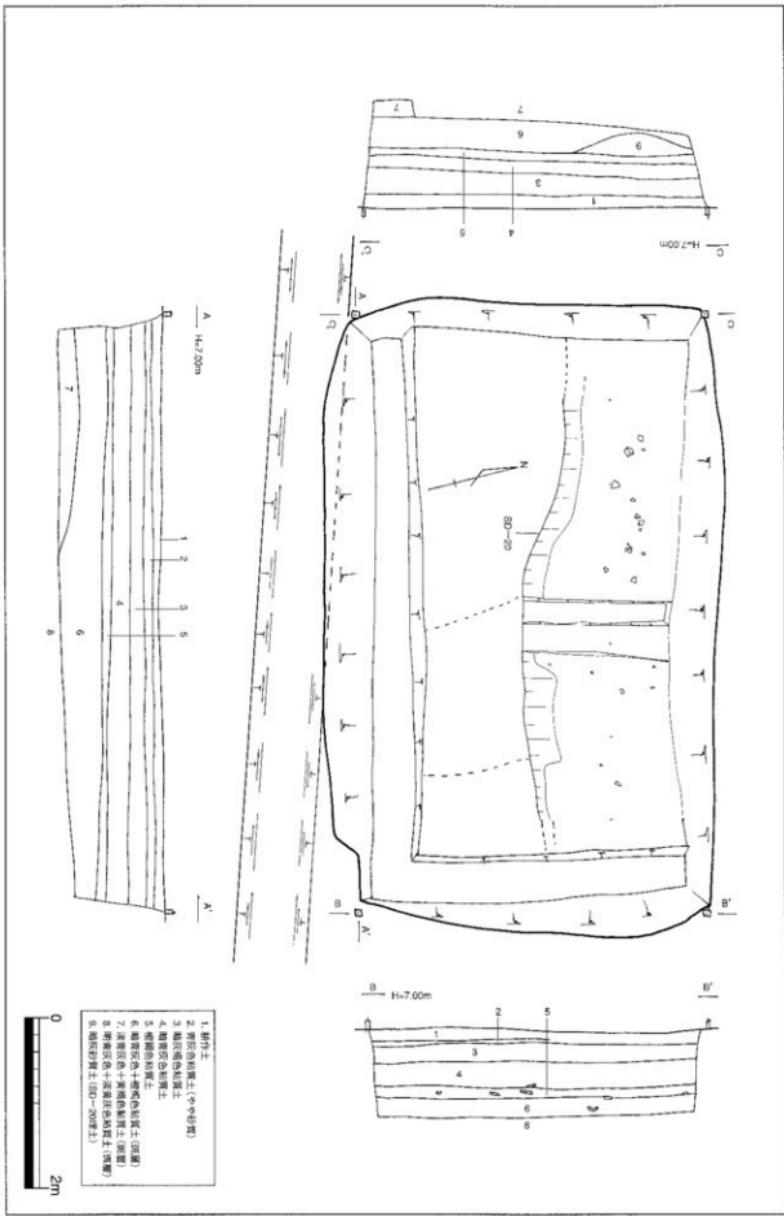
⑤平成14年度調査まとめ

平成14年度の調査の結果、寺城の区画溝の可能性が考えられる溝状遺構が1箇所で発見された。

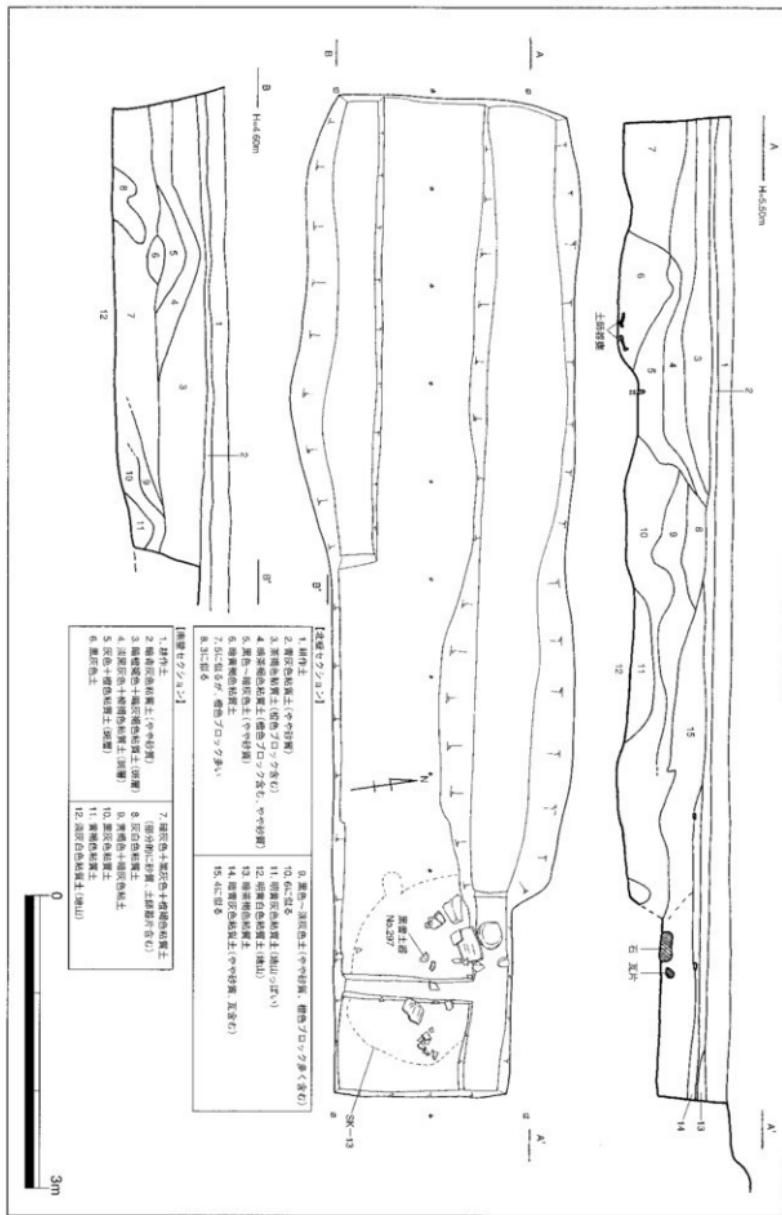
S D - 2 6 は国分寺の金堂跡から南方へ72mの地点に存在し、平成13年度に検出された S D - 1 6 、 1 8 、 1 9 と同一延長線上に位置する溝状遺構であるものと考えられ、これらを繋いだ溝の方位は国分寺の主軸に対してほぼ直交することから国分寺の南側の区画溝である可能性が考えられる。ただしこの南側の区画と考えられる溝状遺構の埋土はあまり砂質を含まない粘質土が多く、特に S D - 2 6 は粘質土を一度に埋め戻したかのような状況であった。この点について平成14年度に文化庁記念物課の玉田調査官を招いて現地指導会を開催した際に、この南側区画溝が国分寺南門の真東方向に当たることや埋土の性質から、南門につながる土解または築地解を造る際に粘土を採掘した跡が溝状に繋がっているのではないかとの指摘を受けた。

北側の区画溝を検出する目的で設定した T - 3 4 では、平成11年度に検出された S D - 0 6 の延長部は確認されず、史跡指定地より北方に迂回して東方の S D - 1 7 、 2 0 に繋がることが推定される。

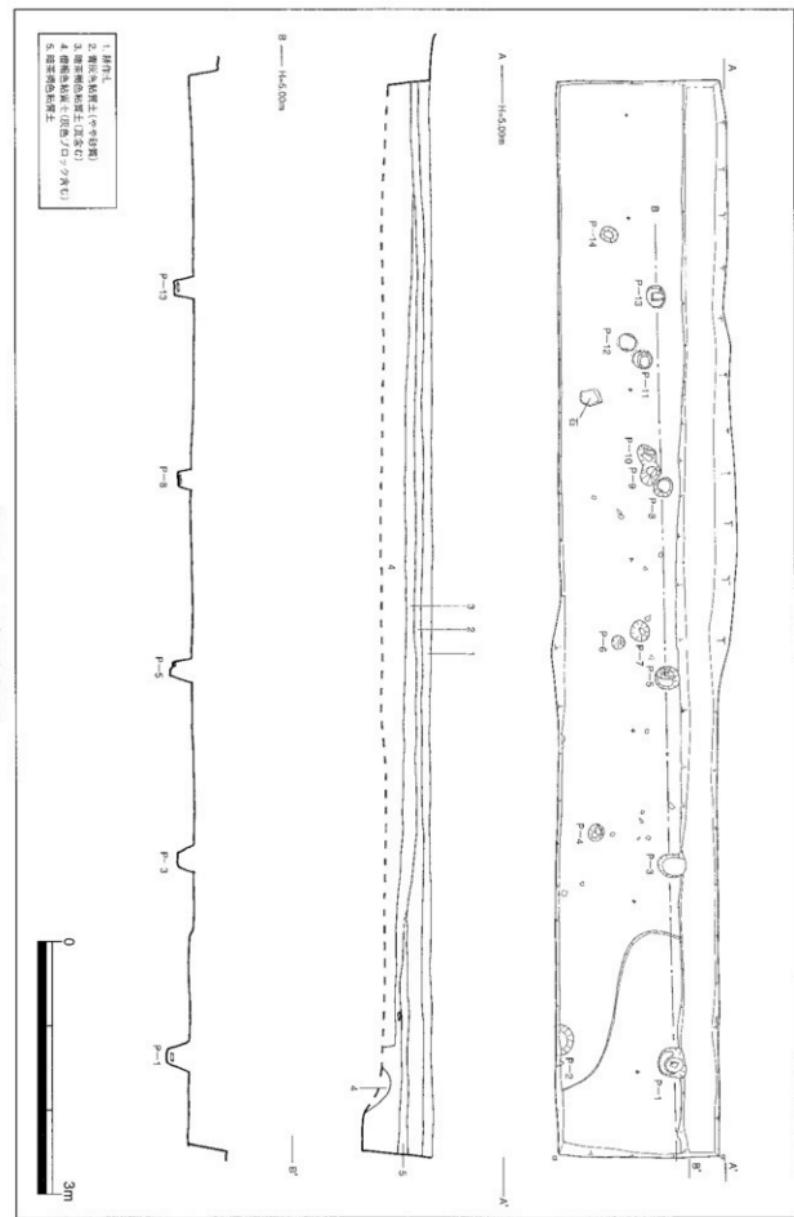
東側の区画溝を検出する目的で設定した T - 3 3 では、土層の状態が悪く、溝状遺構は検出されなかったが、ピット列が検出されている。平成11年度調査で近隣に設定した T - 6 でも同様なピット列が検出されており、この辺に建物跡の存在が推定される。その他に S K - 1 3 から墨書き器が検出されたことは有意義であった。



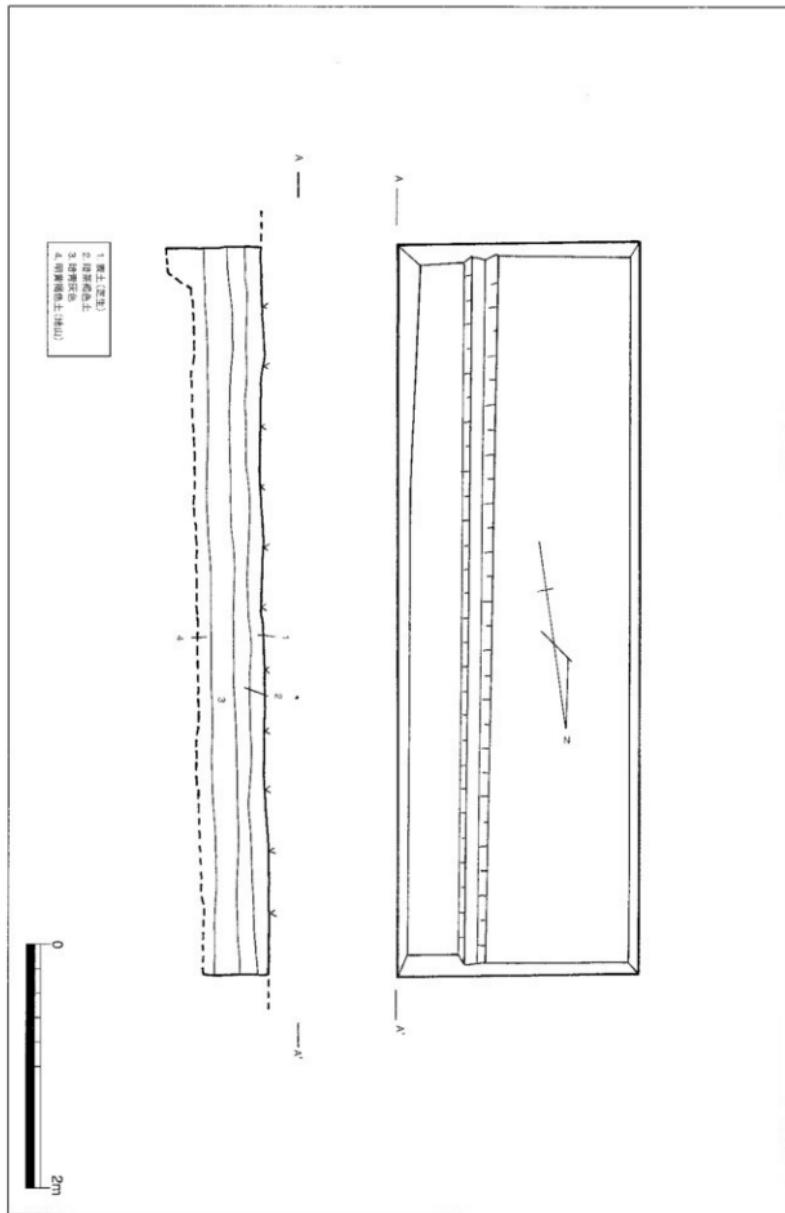
第70図 T-32調査成果図



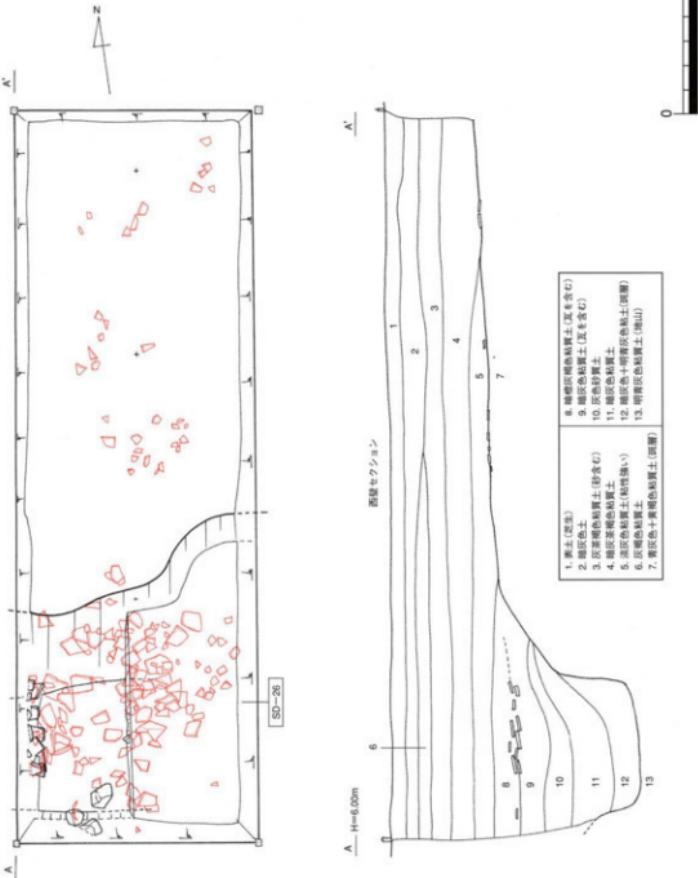
第71図 T-33西調査成果図



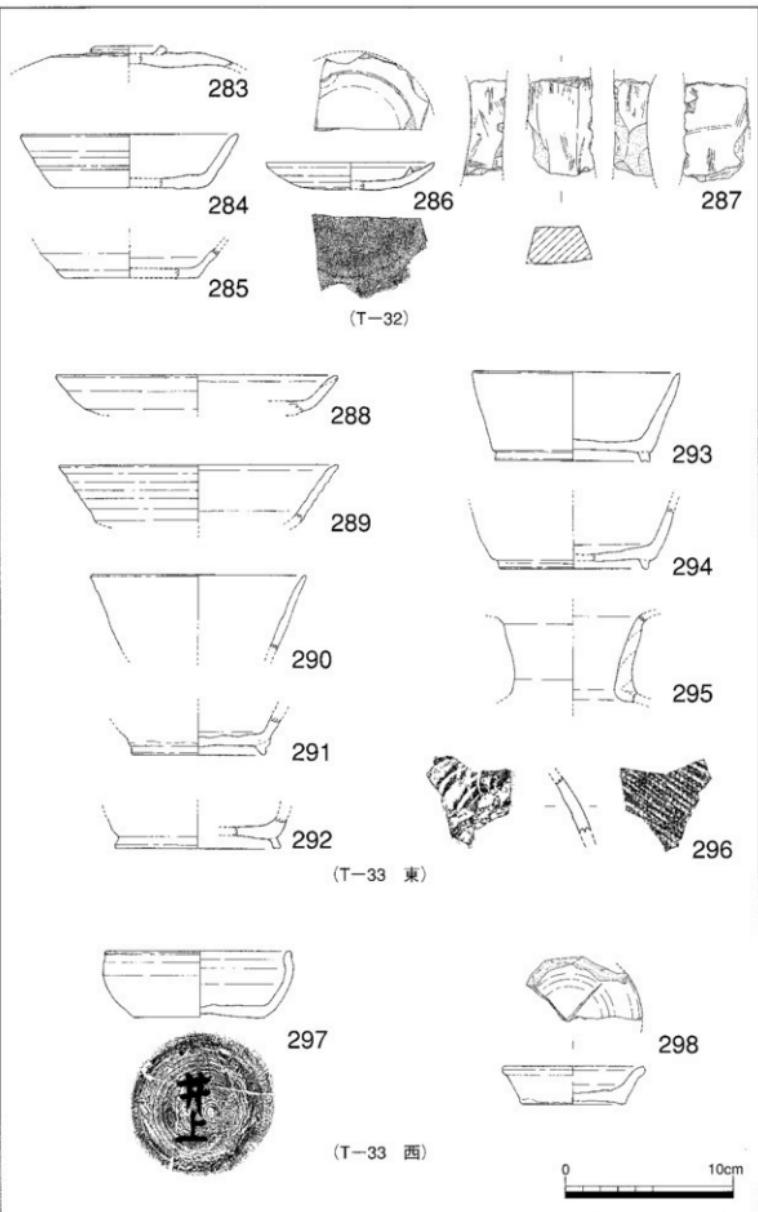
第72図 T-33東調査成図



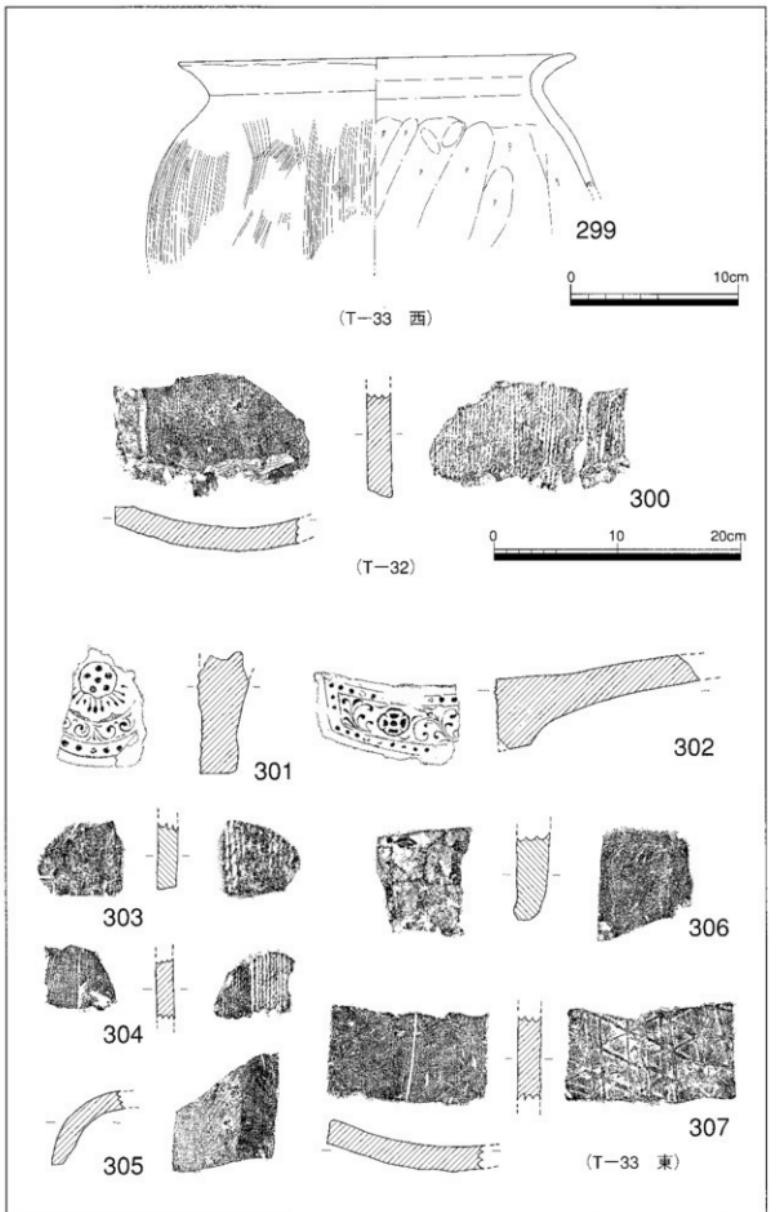
第73图 T-34调查成果图



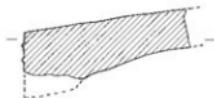
第74図 T-35調査成果図



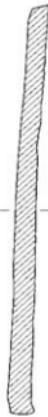
第75図 出土遺物実測図（平成14年度）



第76図 出土遺物実測図（平成14年度）



308



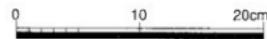
309

(T-33 西)



310

(T-35)



第77図 出土遺物実測図（平成14年度）

第4章 考 察

(1) 寺域について

平成10年度から14年度の調査の結果、寺域の北限、東限、南限を示すと考えられる溝状遺構が検出されている。

(寺域北限区画関連溝状遺構)

	上端幅	下端幅	深さ	溝底高	備考
SD-06 (T-13)	5.0m	3.5m	0.5m	9.6m	金堂から北へ95m地点
SD-06 (T-5)	3.0m	0.3m	1.1m	8.9m	金堂から北へ95m地点
SD-17 (T-29)	1.0m	0.7m	1.0m	5.5m	金堂から北へ113.5m地点
SD-20 (T-32)	1.8m以上	1.5m以上	0.3m	5.77m	金堂から北へ114m地点

(寺域東限区画関連溝状遺構)

	上端幅	下端幅	深さ	溝底高	備考
SD-12 (T-13)	1.3m~2.2m	0.9m~1.8m	0.2m	5.45m	金堂から東へ112.6m地点
SD-09 (T-9, 16)	2.0m	1.0m	0.2m	5.3m	金堂から東へ112m地点
SD-13 (T-19)	2.3m以上	1.2m以上	0.4m	4.07m	金堂から東へ112m地点
SD-14 (T-20)	4.4m	3.6m	0.45m	3.08m	金堂から東へ111m地点

(寺域南限区画関連溝状遺構)

	上端幅	下端幅	深さ	溝底高	備考
SD-26 (T-35)	1.0m以上	1.0m	1.2m	3.64m	金堂から南へ72m地点
SD-16 (T-27)	1.5m~3.0m	0.6m	0.3m	3.64m	金堂から南へ71m地点
SD-18 (T-30)	1.8m~2.0m	1.5m	0.2m	3.62m	金堂から南へ72m地点
SD-19 (T-31)	0.6m	0.3m	0.2m	3.6m	金堂から南へ73m地点

このうち北側区画溝は、金堂跡中心から北へ95m位置に存在するSD-06が最も確実な遺構として位置付けられる。しかし東方の延長線上で設定したT-34、T-8ではSD-06の延長部が確認されなかった。このことからさらに北方へ迂回している可能性が考えられ、T-29、32の調査で検出されたSD-17およびSD-20が北側区画溝にあたるものと推定される。ただし、北東コーナー部にあたるT-32で検出されたSD-20は、東側区画溝との接点部から更に東方に延びる状況が確認されたことから、T字状となって、寺域からさらに東方へ排水をしていることが推定される。

東側区画溝は、金堂跡中心から東へ111~112.6m位置で南北に繋がるSD-12、09、13が確実な遺構として考えられる。南東部では後世の耕地整理などの影響で遺構の残存状況が悪く、明確な遺構は検出されなかったが、T-20で検出されたSD-14が位置的に東側区画溝の延長部として考えられる。

南側区画溝は、金堂跡から1町南方の地点ではこれまでの調査で明確な遺構は確認されなかったが、金堂跡から南方72mの地点で、南門跡の真東方向に続く一連の溝状遺構（SD-35、16、18、19）が注目される。T-35で検出されたSD-26は文化庁記念物課の玉田調査官の現地指導で、土堀築造時の粘土探掘坑であるとの指摘を受けたことにより、これに連続するSD-16、18、19も一連の遺構であると考えられる。このため、直接的に寺域の区画溝とは断定できない部分もあるが、一応これまでの調査成果の中では確実に寺域と判断できる南限を示す遺構として捕らえられるものと思われる。

第5章 小 結

平成10年度～14年度までの調査の結果、寺域の北限、東限、南限がおよそ把握できたことは大変意義であった。従来の学説では一般的に国分寺の寺域は方2町（約218m）範囲とされてきたが、近年の他国の国分寺跡調査事例では、必ずしも区画が方形でなかったり、広さも方2町にあてはまらない事例が多く報告されている。出雲国分寺跡の場合、北側の区画溝は国分寺中軸線上付近では金堂跡中心から北方へ95m地点とやや近いのに対し、北東コーナー部では金堂中心から北方へ114m地点に存在するので、途中で北方へ屈曲する可能性が考えられる。東側の区画溝は金堂跡中心から東方へ111～112.6m地点でほぼ一直線に南北に繋がり、方2町範囲の位置に近い。南側の区画溝は金堂跡中心から南方へ71～73mの距離しかないが、これは南門跡の真東延長線上であるためである。さらに南方に区画溝が存在する可能性も捨て切れないが、南方ほど遺構の残りが悪く、これまでの調査では明確な遺構が確認できなかった。このため、南門の東西延長ラインが現時点での一応の寺域南限として考えたい。西側は発掘調査では確認されていないが、丘陵が迫っている地形上の制約から、方2町範囲より狭い可能性が高いものと考えられる。

また、これまでの調査で多量の上器類、瓦類が検出されている。このうち須恵器については、その形態の特徴や切り離し手法から、高広編年のIV A～IV B期のものが大勢を占める。この年代については、高広遺跡の報告書中では、出雲国府跡SD005とSD034付近で、国府第4形式上器群に出雲国分寺軒丸瓦第2類が共伴して検出されていることから、8世紀末以降の形式であるとし、これとの併行関係から、高広IV A形式を8世紀中葉～後半、高広IV B形式を8世紀末～9世紀前半に比定されている（注1）。また国府跡から西方の台地上に位置する黒田畦跡（注2）では、SK-10出土の一括資料中に律令様式の須恵器と高広IV A期の壺が共伴しており、8世紀中～後半の年代観が与えられている。また、近年では静止系切りと回転系切りが多くは同時併存するとの考え方から、III BとIV Aとの時期差を短く考えて全体を古く考える傾向もあり、「山陰古代出土文字資料集成Ⅰ（出雲・石見・隱岐編）」（注3）では、高広IV A形式の蓋に「三太三」と記された墨書き器があることから、これを「出雲國風土記」に記載された、神龜二（726）年に民部省口宣によって「美談」の表記に変更される以前のものと考え、高広IV A形式を8世紀前半代と考える見方もある。

出雲国分寺は聖武天皇により天平13（741）年に発せられた国分寺建立の詔により設置されたものである。建立年代について実年代を知ることは困難であるが（注4）、出土遺物の年代観によると8世紀前半ないし8世紀の中頃には造営されたことが窺われる。一方、出雲国分寺の存続期間については、承応二（1653）年の『懷橘談』に、「竹屋と云所に昔国分寺在と語れども、今は礎石のみにて其形なし」と見られるように、近世には所伝を失っているようである（注5）が、昭和45～46年の調査時の出土遺物からおよそ鎌倉時代頃までは存続していたものと考えられている。今後の資料の増加を待って検討したい。

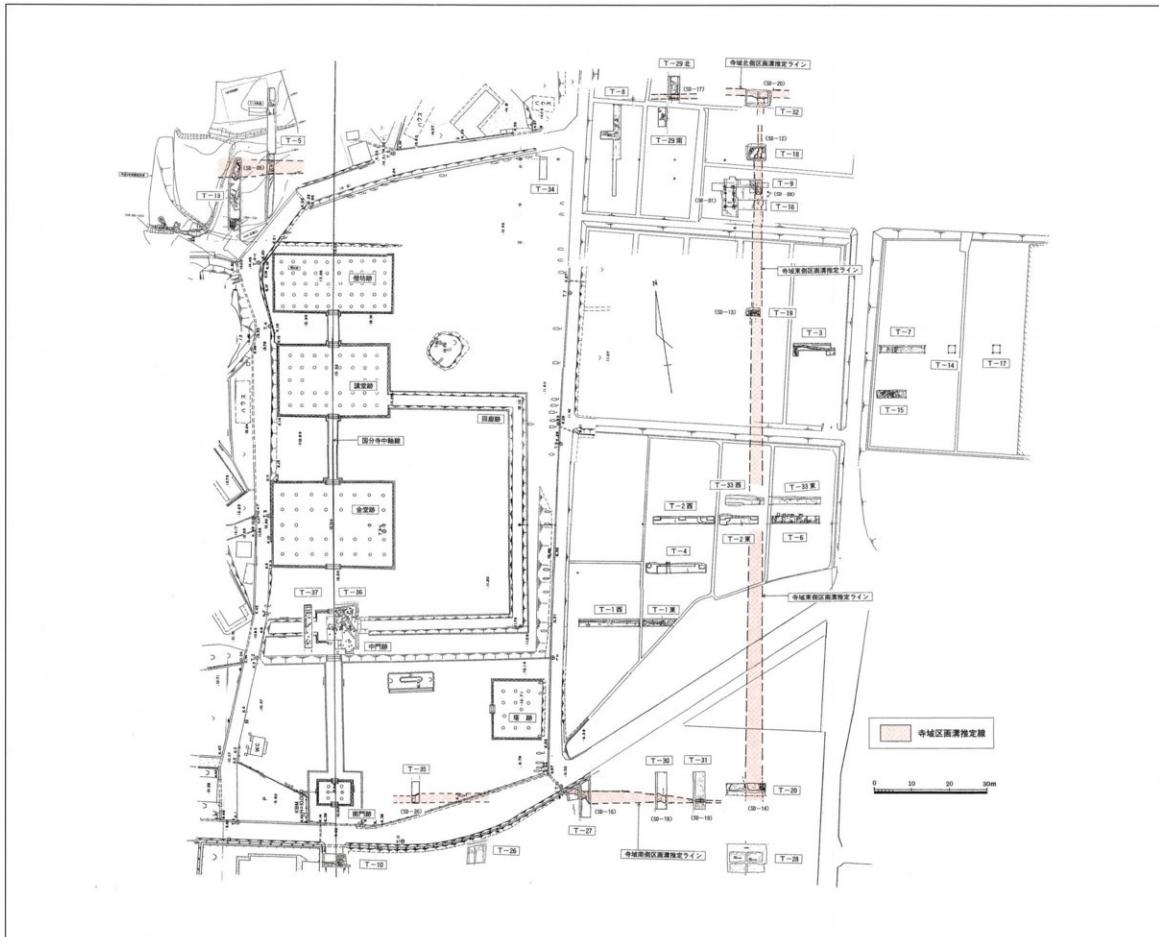
（注1）『高広遺跡発掘調査報告書一和田団地造成工事に伴う発掘調査一』島根県教育委員会、1984年

（注2）『出田畔遺跡発掘調査報告書』松江市教育委員会、財団法人松江市教育文化振興事業団、1995年

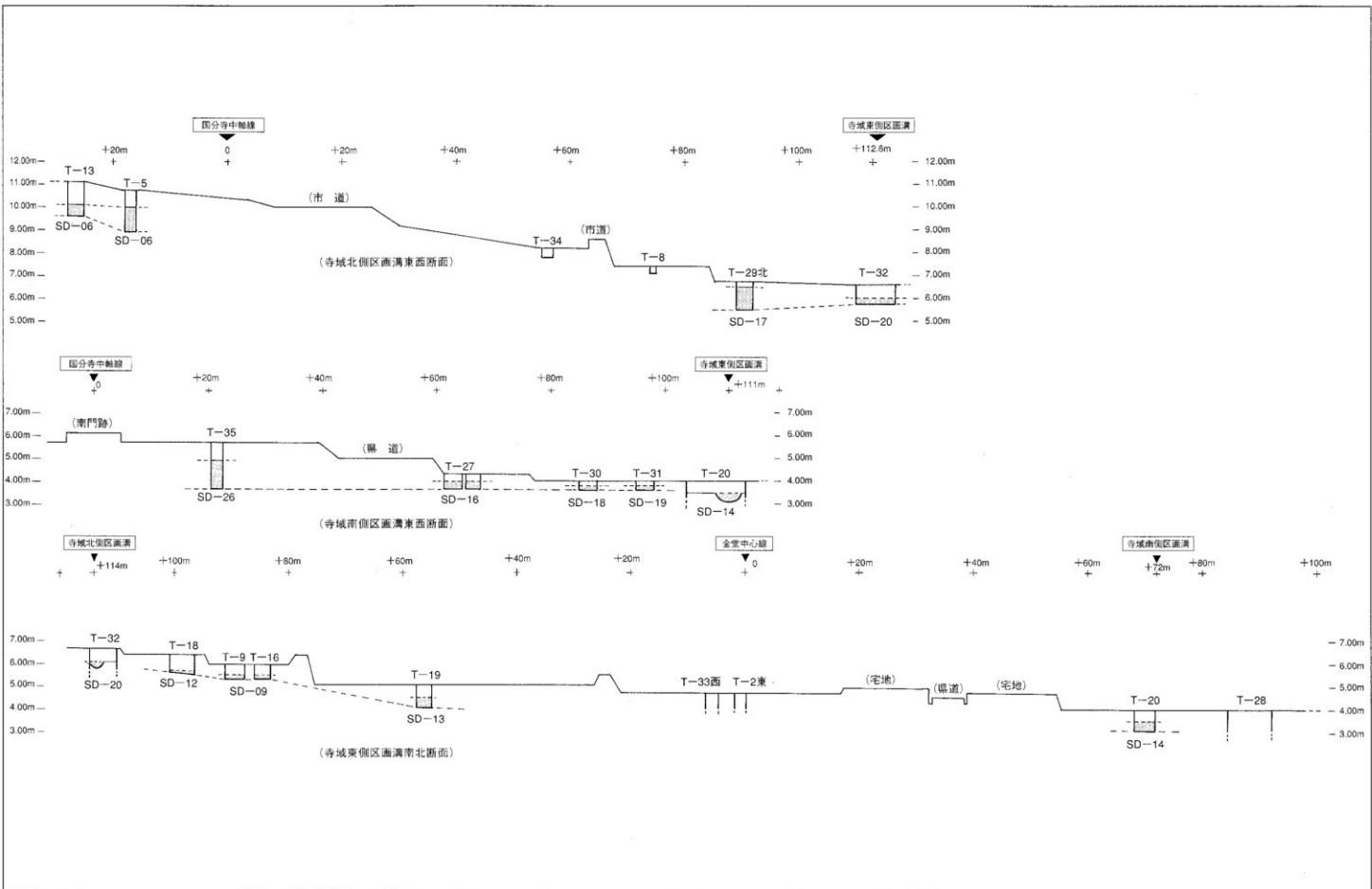
（注3）『山陰古代出土文字資料集成』（出雲・石見・隠岐編）島根県古代文化センター、2003年

（注4）『古代出雲文化展』図録（島根県教育委員会、1997年）によると、国分寺建立の詔は天平13（741）年に発せられたが、天平9（737）年の詔で国ごとに懃迦仏像等の造置が命じられており、実質的な国分寺造営は天平13年より以前に始まっていた可能性も指摘されている。

（注5）『八雲立つ風土記の丘周辺の文化財』島根県教育委員会、1975年



第78図 出雲国分寺跡寺地区画清推定位置図



第79図 出雲国分寺跡寺城区面図断面図

出土遺物観察表

出土地点	種別	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	その他
1 T-1西第4層	須恵器	蓋	つまみ径 2.0cm	天井部に楕円珠状のつまみを付ける 底部は脚から直線的に立ち上がる	内面ナデ仕上げ 外面部に回転系切痕	焼成: 良好、色調: 漆青灰色
2 T-1西第4層	須恵器	蓋	口径 19.4cm	底部は脚から下方に屈曲する	外面部ナデ仕上げ	焼成: 良好、色調: 漆青灰色
3 T-1西第4層	須恵器	高台坏	底径 9.6cm	底部は脚から直線的に立ち上がる	底部外面部に回転系切痕	焼成: 良好、色調: 漆青灰色
4 T-1西第4層	須恵器	高台坏	底径 9.0cm	底部は脚から直線的に立ち上がる	底部外面部に回転系切痕	焼成: 良好、色調: 漆青灰色
5 T-1西第4層	須恵器	高台坏	底径 11.8cm	底部は脚から直線的に立ち上がる	底部外面部に回転系切痕	焼成: 良好、色調: 漆青灰色
6 T-1西第4層	土師質土器	坏	底径 7.0cm	底部は底部から直線的に立ち上がる	風化のため不明	焼成: やや良好、色調: 明茶褐色
7 T-1西第4層	須恵器	高台坏	底径 8.6cm	底部は脚から直線的に立ち上がる	底部外面部に回転系切痕	焼成: 良好、色調: 漆青灰色
8 T-1西第4層	須恵器	高台坏	底径 10.0cm	底部は脚から直線的に立ち上がる	底部外面部に回転系切痕	焼成: 良好、色調: 漆青灰色
9 T-1西第4~6層	須恵器	長颈瓶	最大径 10.0cm	頸部に2条の沈線が退る	内外面ナデ仕上げ	焼成: 良好、色調: 漆青灰色
10 T-1西第4~6層	土師器	把手	把手径 2.0cm	斜め上方に伸びる	粗頭圧痕が残る	焼成: やや良好、色調: 明茶褐色
11 T-1, SD-02	須恵器	蓋	つまみ径 4.0cm	天井部に輪状つまみを付ける	内面ナデ仕上げ	焼成: 良好、色調: 漆青灰色
12 T-1, SD-02	須恵器	蓋	口径 14.6cm	底部が小さく下方に屈曲する	外面部ナデ仕上げ	焼成: 良好、色調: 漆青灰色
13 T-1, SD-02	須恵器	高台坏	口径 13.0cm	底部は脚から直線的に立ち上がる	底部外面部に回転系切痕	焼成: 良好、色調: 漆青灰色
14 T-1, SD-02	須恵器	坏	底径 9.0cm	口縁部は外方に屈曲する	内外面ナデ仕上げ	焼成: 良好、色調: 漆青灰色
15 T-1, SD-02	土師質土器	坏	底径 8.0cm	底部は底部から直線的に立ち上がる。内面に黒色物の付着あり	風化のため不明	焼成: やや良好、色調: 明茶褐色
16 T-1, SD-02	土師質土器	高台坏	底径 9.0cm	脚部は脚から外方にふんばる	外面部ナデ仕上げ	焼成: やや良好、色調: 明茶褐色
17 T-1, SD-02	須恵器	高台坏	底径 8.0cm	底部は脚から直線的に立ち上がる	底部外面部に回転系切痕	焼成: 良好、色調: 漆青灰色
18 T-1, SD-02	土師質土器	高台坏	底径 9.6cm	脚部はややくぼ垂下する	風化のため不明	焼成: やや良好、色調: 明茶褐色
19 T-1, SD-02	土師器	土玉	直径 3.0cm	球形の真に透6mmの穿孔があり	手づくねにより整形される	焼成: やや良好、色調: 明茶褐色
20 T-1, SD-02	青めのう	未製品か?	—	各面に剥離痕あり	—	色調: 青緑色
21 T-1東, SD-03	須恵器	坏	口径 不明	底部は直線的に開く	内外面ナデ仕上げ	焼成: 良好、色調: 漆青灰色
22 T-1東, SD-03	須恵器か?	坏	口径 12.4cm	底部は直線的に開く	内外面ナデ仕上げ	焼成: やや不良、色調: 漆褐色
23 T-1東, SD-03	須恵器	坏	底径 12.6cm	底部は大きく開いて直線的に開く	底部外面部に回転系切痕	焼成: 良好、色調: 漆青灰色
24 T-1東, SK-01	須恵器か?	坏	口径 11.2cm 底径 7.4cm	底部は直線的に開く。無底台	底部外面部に直切痕が残る	焼成: やや不良、色調: 漆灰色
25 T-1東, SK-01	土師器	甌	口径 25.2cm	縁部は外方に屈曲する大きく外方に開く	内外面ナデ仕上げ	焼成: やや良好、色調: 明茶褐色
26 T-1西, P-7	須恵器	蓋	—	天井部はやや肥厚する	内外面ナデ仕上げ	焼成: 良好、色調: 漆青灰色
27 T-1西, P-7	土製品	ふいご羽口	—	天井部はやや肥厚する	内外面ナデ仕上げ	焼成: 漆青灰色
28 T-1西, P-8	須恵器	蓋	口径 12.8cm	底部が小さく下方に屈曲する	内外面ナデ仕上げ	焼成: 良好、色調: 漆青灰色
29 T-1東, P-9	土師質土器	坏	口径 12.6cm 底径 7.0cm	底部は直線的に開く。無底台	風化のため不明	焼成: やや不良、色調: 漆灰色
30 T-1東, P-21	須恵器	蓋	—	底部が小さく下方に屈曲する	内外面ナデ仕上げ	焼成: 良好、色調: 漆青灰色
31 T-1東, P-21	須恵器	蓋	—	底部が小さく下方に屈曲する	内外面ナデ仕上げ	焼成: 良好、色調: 漆青灰色
32 T-1東, P-21	須恵器	蓋	つまみ径 8.4cm	天井部に輪状つまみを付ける	内外面ナデ仕上げ	焼成: 良好、色調: 漆青灰色
33 T-1東, P-21	須恵器	坏	口径 14.0cm	底部は直線的に開く	内外面ナデ仕上げ	焼成: 良好、色調: 漆青灰色
34 T-2東, 第2層	土師質土器	高台坏	底径 9.4cm	底部は脚から外方に開く	風化のため不明	焼成: やや不良、色調: 漆灰色
35 T-2東, 第3層	須恵器	甌	底径 9.2cm	内部に内窓して伸びる	底部外面部に直切痕が残る	焼成: 良好、色調: 漆青灰色
36 T-2西, SD-04	須恵器	高台坏	口径 21.4cm 底径 16.4cm 器高 3.9cm	脚部はやや短く垂下し、底部は緩やかに立ち上がる	風化のため不明	焼成: やや不良、色調: 漆灰色
37 T-3, 第6層	須恵器	蓋	—	天井部に輪状つまみを付ける	内外面ナデ仕上げ	焼成: 良好、色調: 漆青灰色
38 T-3, 第6層	須恵器	高台坏	底径 6.8cm	底部は脚から直線的に立ち上がる	底部外面部に直切痕が残る	焼成: 良好、色調: 漆青灰色
39 T-3, 第6層	須恵器	高台坏	底径 10.4cm	脚部は短く垂下する	底部外面部に直切痕が残る	焼成: 良好、色調: 漆青灰色
40 T-3, 第6層	土師質土器	高台坏	底径 6.6cm	脚部はやや短く外方にふんばる	内外面ナデ仕上げ	焼成: やや良好、色調: 明茶褐色
41 T-3, 第6層	須恵器	高台坏	口径 14.0cm 底径 9.0cm 器高 3.9cm	脚部はやや短く垂下し、底部は緩やかに立ち上がる	底部外面部に直切痕が残る	焼成: 良好、色調: 漆青灰色
42 T-3, 第6層	須恵器	壺底部	底径 9.2cm	脚部は短く垂下する	底部外面部に静止系切り抜きナデ	焼成: 良好、色調: 漆青灰色
43 T-3, SD-01	須恵器	蓋	つまみ径 2.0cm	天井部に楕円珠状のつまみを付ける	天井部外面部に直切痕が残る	焼成: 良好、色調: 漆青灰色
44 T-3, SD-01	須恵器	坏	口径 13.4cm	口縁部はやや外反する	内外面ナデ仕上げ	焼成: 良好、色調: 漆青灰色
45 T-3, SD-01	須恵器	坏	口径 11.6cm	口縁部は内窓して伸びる、口縁部はやや外反する	内外面ナデ仕上げ	焼成: 良好、色調: 漆青灰色
46 T-3, SD-01	須恵器	高坏	脚部径 5.0cm	底部はやや内窓して伸びる	内外面ナデ仕上げ	焼成: 良好、色調: 漆青灰色
47 T-3, SD-01	須恵器	坏	口径 15.0cm	底部はやや内窓して伸びる	内外面ナデ仕上げ	焼成: 良好、色調: 漆青灰色

出土地点	種別	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	その他
48 T-3, SD-01	須恵器	壺	口径 16.6cm	壺部は内窪して伸び、口縁部はやや外反する	内外面ナデ仕上げ	焼成: 良好、色調: 漆青灰色
49 T-3, SD-01	須恵器	壺	口径 20.8cm	口縁部は短く、外反する	焼成: 良好、色調: 漆青灰色	
50 T-3, SD-01	須恵器	高台杯	底径 8.6cm	壺部は側から直線的に立ち上がる	焼成: 良好、色調: 漆青灰色	
51 T-3, SD-01	須恵器	高台杯	底径 8.2cm	壺部は圓からやや内窩気味に立ち上がる	焼成: 良好、色調: 漆青灰色	
52 T-3, SD-01	須恵器	高台杯	底径 10.0cm	壺部は圓から直線的に立ち上がる	焼成: 良好、色調: 漆青灰色	
53 T-3, SD-01	須恵器	高台杯	底径 10.0cm	壺部は圓からやや内窩気味に立ち上がる	焼成: 良好、色調: 漆青灰色	
54 T-3, SD-01	須恵器	台付皿	底径 11.2cm	脚部は短く臺下する	焼成: 良好、色調: 漆青灰色	
55 T-3, SD-01	須恵器	蓋	—	天井部はやや肥厚する	天井部外面上に余切穂が残る	焼成: 良好、色調: 漆青灰色
56 T-3, SD-01	須恵器	高台杯	底径 10.6cm	壺部は側から直線的に立ち上がる	底部外面上に余切穂が残る	焼成: 良好、色調: 漆青灰色
57 T-3, SD-01	須恵器	台付皿	底径 15.0cm	壺部は圓からやや内窩気味に立ち上がる	底部外面上に余切穂が残る	焼成: 良好、色調: 漆青灰色
58 T-3, SD-01	須恵器	帶底部	底径 12.4cm	壺部は側から底底部から直線的に立ち上がる	内外面ナデ仕上げ	焼成: 良好、色調: 漆青灰色
59 T-3, SD-01	須恵器	台付臺底盤	底径 11.4cm	壺部は側から直線的に立ち上がる	内面はナデ仕上げ、外縁にタマシを残す	焼成: 良好、色調: 漆青灰色
60 T-3, SD-01	土師質土器	壺	底径 8.6cm	壺部は側から直線的に立ち上がる	風化のため不明	焼成: やや良好、色調: 明茶褐色
61 T-4, SK-02	土師器	壺	口径 25.0cm	口縁部はやさしく開き、肩部は肩が頑らない	面部外面上は刷毛目、内面はケズリ仕上げ	焼成: 良好、色調: 暗茶褐色
62 T-1東、4~6層	瓦	軒丸瓦	瓦当面径 15.6cm	国分寺 1類軒丸瓦	瓦当裏面に指顔圧痕残る	焼成: 良好、色調: 漆灰色
63 T-1東、4~6層	瓦	軒丸瓦	瓦当面径 16.0cm	国分寺 1類軒丸瓦	瓦当裏面に指顔圧痕残る	焼成: 良好、色調: 漆灰色
64 T-1西、4層上間	瓦	軒丸瓦	—	国分寺 2類軒丸瓦	風化のため不明	焼成: やや不良、色調: 暗灰色
65 T-1東、4~6層	瓦	軒平瓦	瓦当上下幅 7.9cm	国分寺 2類軒平瓦、曲線頭をもつ	瓦平面上に布目痕残る、肩部はナデ仕上げ	焼成: 良好、色調: 漆灰色
66 T-1東、4~6層	瓦	軒平瓦	瓦当上下幅 5.5cm	国分寺 2類軒平瓦、段頭をもつ	瓦平面上に布目痕残る、肩部はナデ仕上げ	焼成: 良好、色調: 漆灰色
67 T-1東、4~6層	瓦	軒平瓦	瓦当上下幅 7.0cm	国分寺 1類軒平瓦、曲線頭をもつ	瓦平面上に布目痕残る、肩部はナデ仕上げ	焼成: 良好、色調: 漆灰色
68 T-1西、SD-02	瓦	軒丸瓦	—	国分寺 1類軒丸瓦	焼成: 良好、色調: 漆灰色	
69 T-1西、SD-02	瓦	軒丸瓦	—	国分寺 2類軒丸瓦	焼成: やや不良、色調: 暗灰色	
70 T-1東、SD-02	瓦	軒平瓦	瓦当上下幅 5.0cm	国分寺 2類軒平瓦、段頭をもつ	瓦平面上に布目痕残る、肩部はナデ仕上げ	焼成: 良好、色調: 漆灰色
71 T-1西、SD-02	瓦	丸瓦	—	内面に布目痕残る	焼成: 良好、色調: 漆灰色	
72 T-1西、SD-02	瓦	平瓦	厚さ 1.8cm	内面に布目痕、外面に格子叩き模様残る	焼成: やや良好、色調: 漆褐色	
73 T-1東、SD-03	瓦	軒平瓦	瓦当上下幅 5.0cm	段頭か?	焼成: 良好、色調: 漆灰色	
74 T-1東、SD-03	瓦	平瓦	厚さ 2.5cm	内面に布目痕、外面に繩目叩き模様残る	焼成: 良好、色調: 漆灰色	
75 T-1東、P-20中	瓦	軒平瓦	瓦当上下幅 6.0cm	段頭	瓦平面上に布目痕残る	焼成: 良好、色調: 漆灰色
76 T-1東、P-20中	瓦	道具瓦	金長 28.0cm	内面に布目痕残る	焼成: 良好、色調: 漆灰色	
77 T-2西、第4層	瓦	軒丸瓦	瓦当面径 14.0cm	国分寺 1類軒丸瓦	焼成: 良好、色調: 漆灰色	
78 T-2西、第4層	瓦	軒平瓦	瓦当上下幅 5.0cm	段頭をもつ	焼成: 良好、色調: 漆灰色	
79 T-3、第6層	瓦	軒平瓦	瓦当上下幅 7.5cm	国分寺 1類軒平瓦か? 形状は不明	瓦平面上に布目痕残る	焼成: 良好、色調: 漆灰色
80 T-3、第6層	瓦	軒平瓦	瓦当上下幅 5.0cm	国分寺 3類軒平瓦、段頭をもつ	瓦当面上に自然粘がかかる	焼成: 良好、色調: 漆灰色
81 T-3, SD-01	瓦	軒丸瓦	—	国分寺 1類軒丸瓦	焼成: 良好、色調: 漆灰色	
82 T-3, SD-01	瓦	軒丸瓦	—	国分寺 1類軒丸瓦	焼成: 良好、色調: 漆灰色	
83 T-3, SD-01	瓦	軒平瓦	瓦当上下幅 6.5cm	国分寺 2類軒平瓦か? 段頭をもつ	内面に布目痕残る	焼成: 良好、色調: 漆灰色
84 T-3, SD-01	瓦	平瓦	厚さ 2.3cm	内面に布目痕、外面に格子叩き模様残る	焼成: やや不良、色調: 暗白色	
85 T-3, SD-01	瓦	平瓦	厚さ 1.8cm	内面に布目痕、外面に繩目叩き模様残る	焼成: 良好、色調: 漆灰色	
86 T-4、第4層	瓦	軒丸瓦	瓦当面径 15.5cm	国分寺 2類軒丸瓦	焼成: やや不良、色調: 暗灰色	
87 T-4、第4層	瓦	軒丸瓦	瓦当面径 5.4cm	国分寺 4類軒平瓦	焼成: やや不良、色調: 暗灰色	
88 T-4, SD-05	瓦	軒平瓦	瓦当上下幅 5.0cm	国分寺 2類軒平瓦、段頭をもつ	風化のため不明	焼成: やや不良、色調: 暗灰色
89 T-4, SD-05	瓦	平瓦	厚さ 1.5cm	内面に布目痕、外面に繩目叩き模様残る	内面に布目痕、外面に繩目叩き模様残る	焼成: やや良好、色調: 漆灰色
90 T-4, SD-05	瓦	平瓦	厚さ 2.3cm	内面に布目痕、外面に繩目叩き模様残る	内面に布目痕、外面に繩目叩き模様残る	焼成: 良好、色調: 漆青灰色
91 T-5上段	須恵器	蓋	つまみ径 1.4cm	天井部に擬宝珠状のつまみを付ける	内面ナデ仕上げ	焼成: 良好、色調: 漆青灰色
92 T-5上段、第5層	須恵器	蓋	つまみ径 4.6cm	天井部に輪郭のつまみを付ける	内面ナデ仕上げ、外面に自然粘かかる	焼成: 良好、色調: 漆青灰色
93 T-5上段	須恵器	蓋	口径 13.8cm	かえりは短い	内外面ナデ仕上げ	焼成: 良好、色調: 漆灰色
94 T-5上段	須恵器	坏身	口径 10.3cm	かえりは深く内壁残す	内外面ナデ仕上げ	焼成: 良好、色調: 漆灰色
95 T-5上段、第5層	須恵器	坏身	口径 9.3cm	肥厚氣味の底盤から环部は内窩気味に立ち上がり、かえりは短く内壁残す	底部外面上はヘラ切り後ナデ仕上げ	焼成: 良好、色調: 漆灰色
96 T-5上段、第5層	須恵器	台付皿	口径 20.0cm 底径 12.0cm 器高 4.5cm	環部から环部は内窓してゆるやかに立ち上がる。	底部外面上ナデ仕上げ、底部外面上は風化のため不明	焼成: やや良好、色調: 暗茶色

出土地点	種別	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	その他
97 T-5上段、第5層	須恵器	合付臺低部	底径 11.0cm	脚部は外方に短くふんばる はナゲ	底部外面は不明、内面 はナゲ	焼成：良好、色調：淡青灰色
98 T-5上段、第5層	須恵器	高杯	脚部径 8.1cm	すかしを2方向につける	内外面ナテ仕上げ	焼成：良好、色調：淡青灰色
99 T-5上段、第5層	須恵器	底	脚部径 9.0cm	脚部下部はヘラケズリ	脚部下部はヘラケズリ	焼成：良好、色調：淡青灰色
100 T-5上段、第5層	須恵器	垂露部	-	脚部外側に1条の弦線を施す	内外面ナテ仕上げ	焼成：良好、色調：淡青灰色
101 T-5上段、第5層	須恵器	短颈壺	口径 8.4cm	口縁部はやや外反気味に開き、 脚部は脚部三角状を呈する	内外面ナテ仕上げ	焼成：良好、色調：淡灰色
102 T-5上段、第5層	須恵器	台付臺底部	底径 6.6cm	脚部は外方に短くふんばる	内外面ナテ仕上げ	
103 T-5上段、第5層	須恵器	甕口縁部	-	大きく外反して開く、口縁部外側に波文状を施す	内面はナテ仕上げ	焼成：良好、色調：淡青灰色
104 T-5上段、第5層	土師質土器	高台杯	口径 16.8cm	环部は直線的に開く	内外面ナテ仕上げ	焼成：やや良好、色調：明橙褐色
105 T-5上段、第5層	土師質土器	高台杯	底径 7.0cm	脚部は悪く外方にふんばる	風化のため不明	
106 T-5上段、第5層	土師質土器	外	底径 5.5cm	手底の底部から外輪は直線的	風化のため不明	焼成：やや不良、色調：明橙褐色
107 T-5上段、第5層	土師器	把手	-	的に立ち上がる	指捺圧痕が残る	焼成：やや良好、色調：明橙褐色
108 T-5上段、第5層	土師器	ミニチュア器	口径 3.4cm 器高 2.0cm	-	手づくねで整形する	
109 T-5上段、第5層	土師器質	不規	全長 5.8cm 直径 3.2cm	円柱形の中心に径7ミリの 穿孔を施す	-	焼成：やや良好、色調：明橙褐色
110 T-5上段、第5層	土師器	土製支脚	全高 8.0cm	-	手づくねで整形する	焼成：やや良好、色調：明橙褐色
111 T-5上段、第5層	須恵器	土馬	全長 17.3cm 全高 12.2cm	-	手づくねで整形する	焼成：良好、色調：淡灰色
112 T-5西振張区	土師器	甕	口径 31.4cm	口縁部は大きく外反する	脚部外側に刷毛目、内 面はヘラケズリ	焼成：良好、色調：淡茶褐色
113 T-5西振張区	須恵器	环蓋	口径 11.3cm 器高 4.2cm	やや暗済氣味の天井部から 内空気味に口縁部に至る	天井部前面はヘラ切り後 ナテ仕上げ	焼成：良好、色調：淡灰色
114 T-5西振張区	須恵器	环身	口径 9.1cm 器高 3.4cm	やや暗済氣味の底部から内 空気味で立ち上がる。	底部外側はヘラ切り後 ナテ仕上げ	焼成：良好、色調：淡灰色
115 T-5西振張区	手づくね土器	椀	口径 9.0cm 脚径 4.3cm	天井の底部から内窓で立 てたがり口縁部に至る	内外面に指捺圧痕が残 る	焼成：良好、色調：淡茶褐色
116 T-5西振張区	須恵器	台付臺	底径 6.2cm	脚部は「ハ」字に開く	内外面ともにナテ仕上 げ	焼成：良好、色調：淡灰色
117 T-5下段, SD-06	土師質土器	高台杯	底径 8.6cm	脚部は「ハ」字に開く	風化のため不明	焼成：やや良好、色調：淡褐色
118 T-5下段, SD-06	土師器	把手	-	-	指捺圧痕が残る	焼成：やや良好、色調：淡茶褐色
119 T-13, SD-06	須恵器	蓋	口径 17.8cm	外輪部ともにナテ仕上 げ、下方に屈曲する	-	焼成：良好、色調：灰褐色
120 T-13, SD-06	弥生土器	甕	口径 15.8cm	口縁部外面に3条の印線が 巡る	口縁部は外面ともに ナテ、脚部内面の頸部 以下はヘラケズリ	焼成：良好、色調：淡茶褐色
121 T-13, SD-06	弥生土器	甕	-	口縁部外面に3条の印線が 巡る	口縁部は外面ともに ナテ、脚部内面の頸部 以下はヘラケズリ	焼成：良好、色調：淡茶褐色
122 T-13, SD-06	弥生土器	甕底部	底径 5.0cm	底部は厚手の平底	外側に一部刷毛目が残 る	焼成：良好、色調：淡茶褐色
123 T-13, SD-10	須恵器	皿	口径 14.5cm 底径 12.0cm 器高 2.2cm	底部は平底の底部から短く 立ち上がり、口縁部はやや 外側する	底部外側に系切り痕が 残る	焼成：良好、色調：暗青灰色
124 T-13, SD-10	須恵器	高台杯	底径 9.1cm	脚部はやや「ハ」字に開き、 环部はやや内窓氣味で立ち 上がる	底部外側は系切り後ナ デか？	焼成：良好、色調：淡青灰色
125 T-13, SD-10	須恵器	垂露部	口径 13.6cm	口縁部は大きく外反した 後、上方に屈曲する	内外面ともにナテ仕上 げ	焼成：良好、色調：淡青灰色
126 T-13, SD-10	土師質土器	高台杯	底径 8.3cm	脚部は「ハ」字状に開く	風化のため不明	焼成：やや良好、色調：淡青灰色
127 T-13, SD-10	土師質土器	甕	口径 11.8cm 底径 6.0cm 器高 4.0cm	环部は平底の底部から内窓 気味に立ち上がる	底部外側に回転糸切り 痕が残る	焼成：やや良好、色調：淡褐色
128 T-13, SD-10	土師質土器	甕	底径 5.0cm	环部は平底の底部から内窓 気味に立ち上がる	底部外側に回転糸切り 痕が残る	焼成：やや良好、色調：淡褐色
129 T-13, SD-10	土師質土器	高台杯	底径 6.8cm	脚部はやや「ハ」字に開き、 环部はやや内窓氣味に立ち 上がる	風化のため不明	焼成：やや良好、色調：淡青灰色
130 T-13邊縁棱出面	甕	甕	長辺 35.2cm 短辺 23.2cm 厚さ 8.0cm	-	-	焼成：良好、色調：灰白色
131 T-6, P-2	須恵器	蓋	つまみ径 2.0cm	天井部に擬宝珠状のつまみ を付ける	天井部外面は回転ヘラ ケズリ	焼成：良好、色調：淡青灰色
132 T-6, P-19	須恵器	蓋	-	口縫施脂はやや屈曲する	内外面ともにナテ仕上 げ	焼成：良好、色調：淡青灰色
133 T-6, SK-03	須恵器	蓋	-	口縫施脂はやや屈曲する	内外面ともにナテ仕上 げ	焼成：良好、色調：淡青灰色
134 T-6, P-1	土師器	甕	-	口縫施脂は大きく外反する	内外面ともにナテ仕上 げ	焼成：やや良好、色調：黄褐色
135 T-6, P-19	須恵器	甕	-	口縫施脂はやや屈曲して外 する	内外面ともにナテ仕上 げ	焼成：良好、色調：淡青灰色
136 T-6, SK-03	須恵器	甕	口径 15.0cm	口縫施脂はほぼ直線的に伸び る	内外面ともにナテ仕上 げ	焼成：良好、色調：茶褐色
137 T-6, SK-02	須恵器	甕	口径 13.8cm	口縫施脂はほぼ直線的に伸び る	内外面ともにナテ仕上 げ	焼成：良好、色調：淡灰色

出土地点	種別	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	その他
138 T-6, SK-02	須恵器	高台坏	底径 9.8cm	脚部は短く「ハ」字状に開き、坏部は直線的に立ち上がる	内外面ともにナデ仕上げ	焼成：良好、色調：淡青灰色
139 T-6、ピット検出面	須恵器	壺	口径 19.2cm	口縁部は短く外反し、脚部は若干上下に拡張する	脚部外面に平行タキ、内面に同心円状のあて巻痕が残る	焼成：良好、色調：淡青灰色
140 T-6, P10	土師質土器	壺	底径 6.5cm	平底の底部から坏部は内窓気味に立ち上がる	風化のため不明	焼成：やや良好、色調：淡黄褐色
141 T-7、遺構検出面	須恵器	壺	—	坏部は平底の底部から短く立ち上がり、口縁部はやや外反する	内外面ともにナデ仕上げ	焼成：良好、色調：淡青灰色
142 T-7、遺構検出面	土師質土器	壺	底径 5.4cm	脚部は壺部で大きく聞く	風化のため不明	焼成：やや良好、色調：淡黄褐色
143 T-7、遺構検出面	須恵器	台付壺？	底径 11.2cm	脚部は短く「ハ」字状に開き、脚部は直線的に立ち上がる	内外面ともにナデ仕上げ	焼成：良好、色調：青灰色
144 T-7、遺構検出面	須恵器	壺	—	脚部壺部にかけてゆるやかに聞く	内外面ともにナデ仕上げ	焼成：良好、色調：淡青灰色
145 T-7、整地土層中	土師器	甕	—	二重口縁、外縁の縁はやや鈍く、口縁部は平坦面をもつ	内外面ともにナデ仕上げ	焼成：やや良好、色調：灰白色
146 T-7、整地土層中	土師器	甕	—	単純口縁で大きく外反する	外面に一部刷毛目が残る、脚部内面はハラケアリ	焼成：やや良好、色調：暗灰褐色
147 T-15、遺構面	須恵器	蓋	つまみ径 2.0cm	天井部に擬宝珠状のつまみを付ける	内面はナデ仕上げ	焼成：良好、色調：淡青灰色
148 T-15、第4層中	須恵器	台付壺	底径 8.1cm	短い高台で「ハ」字状にふらばる	脚部外面は糸切り後ナデ？	焼成：良好、色調：暗青灰色
149 T-15、第4層中	須恵器	高台坏	底径 8.7cm	脚部は高台部からゆるやかに立ち上がる	脚部外面に糸切り痕残る	焼成：良好、色調：淡青灰色
150 T-15、第4層中	須恵器	高台坏	口径 22.2cm 器高 16.7cm	直立気味の脚部から坏部は直線的に立ち上がり、口縁部はわざかに外反する	内外面ともにナデ仕上げ	焼成：良好、色調：淡青灰色
151 T-15、整地層上面	須恵器	壺	口径 19.4cm	口縁部は短く、外反する	内外面ともにナデ仕上げ	焼成：良好、色調：淡青灰色
152 T-15、第4層中	土師器	土製支輪	残存長 8.5cm	全面に指頭圧痕が残る	焼成：やや良好、色調：淡褐色	
153 T-15、第4層中	土師器	土躰	全長 6.7cm	長軸方向に徑7ミリの穿孔あり	ナデ仕上げ	焼成：やや良好、色調：淡灰褐色
154 T-8, SD-08段	須恵器	壺身	口径 9.1cm 器高 3.0cm	やや肥厚気味の底部から坏部はゆるやかに立ち上がり、カスリは短く内側する	底部外面はヘラ切り後ナデ	焼成：良好、淡青灰色
155 T-8, SD-08中	土師器	甕	口径 16.0cm	口縁部は大きく外反する、底部はまるい	口縁部へ肩部にかけて刷毛目が残る	焼成：やや良好、茶褐色
156 T-8, SD-08中	土師器	甕	口径 19.1cm	肥厚気味の口縁部は短く外反する	脚部外面に内面が脚部以下ラケアリ	焼成：やや良好、淡青灰色
157 T-8, 水溜中	須恵器	蓋	—	口縁部はゆるやかに外反する	内外面ともにナデ仕上げ	焼成：良好、淡青灰色
158 T-9, SD-09中	須恵器	蓋	口径 17.2cm	低い天井部からゆるやかに口縁部に至る、脚部はわずかに下方に屈曲する	天井部外面はヘラヶズリ後ナデ仕上げ	焼成：良好、淡青灰色
159 T-16, SD-09中	須恵器	高台坏	口径 12.2cm 底径 9.0cm 器高 4.7cm	直立気味の脚部から坏部はやや内窓気味に立ち上がる	底部外面に糸切り痕残る坏部の外面はナデ仕上げ	焼成：良好、淡青灰色
160 T-9, SB-01, P-7中	須恵器	高台坏	底径 12.0cm	直立気味の脚部から坏部はやや内窓気味に立ち上がる	底部外面に糸切り痕残る坏部の外面はナデ仕上げ	焼成：良好、淡青灰色
161 T-9, SB-01, P-7中	須恵器	墨書き土器	—	坏部の底部外面に墨書きあり、判読不能	糸切り痕残る	焼成：良好、淡青灰色
162 T-10, 第22層	須恵器	高台坏	底径 7.2cm	「ハ」字状に聞く高台部から坏部は直線的に立ち上がる	坏部外面ナデ仕上げ、脚部外面は風化のため不明	焼成：良好、淡青灰色
163 T-10, 第22層	須恵器	高台坏	底径 10.8cm	直立気味の高台部から坏部はゆるやかに立ち上がる	底部外面に糸切り痕残る坏部の外面はナデ仕上げ	焼成：良好、淡青灰色
164 T-10, 第22層	須恵器	甕	—	口縁部が大きく外反して開き、脚部は肥厚する	口縁部外面に波状又あり	焼成：良好、暗灰色
165 T-10, 第22層	須恵器	壺	—	外面にタキ、カキ目、内面にあて具痕残る	内外面ともにナデ仕上げ	焼成：良好、淡青灰色
166 T-12	須恵器	蓋	—	口縁部は唇曲する	底部外面は糸切り後ナデ仕上げ	焼成：良好、淡青灰色
167 T-12	須恵器	高台坏	底径 8.6cm	やや「ハ」字に聞く高台部から坏部は直線的に立ち上がる	底部外面は糸切り後ナデ仕上げ？	焼成：良好、暗青灰色
168 T-11	須恵器	高台坏	底径 8.8cm	やや「ハ」字に聞く高台部から坏部は直線的に立ち上がる	脚部外面ナデ仕上げ、脚部外面は風化のため不明	焼成：良好、淡青灰色
169 T-5上段、第5層中	瓦	軒平瓦	瓦当高 6.3cm	国分寺1類軒平瓦、脚部は段頭に近い	内面に布目痕が残る	焼成：やや不良、色調：淡灰白色
170 T-5上段、第5層中	瓦	軒平瓦	瓦当高 7.9cm	国分寺1類軒平瓦、脚部は脚根	内面に布目痕が残る	焼成：良好、淡青灰色
171 T-5, SD-06中	瓦	軒平瓦	—	国分寺2類軒平瓦、脚部は脚根	脚部はナデ仕上げ	焼成：良好、淡青灰色
172 T-5, SD-06中	瓦	軒平瓦	瓦当高 5.0cm	国分寺4類軒平瓦、瓦当面に格子状のタキを施す、脚部は脚根	風化のため不明	焼成：やや不良、色調：淡灰白色

出土地点	種別	器種	法量	形態の特徴	手洗の特徴	その他
173 T-5, SD-06中	瓦	平瓦	厚さ 2.0cm	内面に布目、外面上に格子タキ痕が残る	焼成：良好、暗青灰色	
174 T-5, SD-06中	瓦	平瓦	厚さ 2.3cm	内面に布目、外面上に格子タキ痕が残る	焼成：良好、暗青灰色	
175 T-13, サブトレ中	瓦	軒丸瓦	瓦当径 14.2cm	国分寺2類軒丸瓦 瓦当裏面には指頭圧痕が残る	焼成：やや不良、色調：淡黄褐色	
176 T-13, SD-10中	瓦	軒丸瓦	瓦当径 14.9cm	国分寺1類軒丸瓦 瓦当裏面には指頭圧痕が残る	焼成：やや不良、色調：淡黄褐色	
177 T-13, SD-10中	瓦	軒丸瓦	瓦当径 14.7cm	国分寺1類軒丸瓦 瓦当裏面には指頭圧痕が残る	焼成：良好、暗青灰色	
178 T-13, SD-10中	瓦	軒丸瓦	—	国分寺3類軒丸瓦 風化のため不明	焼成：やや不良、色調：暗灰色	
179 T-13, SD-10中	瓦	軒平瓦	瓦当高 5.6cm	国分寺2類軒平瓦、頸部は段階に近い	内面に布目痕が残る 焼成：良好、暗青灰色	
180 T-13, SD-10中	瓦	軒平瓦	瓦当高 6.7cm	国分寺1類軒平瓦、頸部は段階に近い	内面に布目痕が残る 焼成：良好、暗青灰色	
181 T-13, SD-10中	瓦	軒平瓦	瓦当幅 24.2cm	国分寺3類軒平瓦、頸部は段階に近い	内面に布目痕が残る 焼成：やや不良、色調：暗灰色	
182 T-13, SD-10中	瓦	軒平瓦	瓦当幅 26.5cm	国分寺1類軒平瓦、頸部は段階をもつ	内面に布目痕が残る 焼成：良好、暗青灰色	
183 T-13, SD-10中	瓦	軒平瓦	瓦当幅 31.0cm	国分寺4類軒平瓦、頸部は付けない	内面に布目痕、外面上に瓦当面に同じ格子状タキ痕が残る 焼成：やや不良、色調：暗灰色	
184 T-13, SD-10中	瓦	軒平瓦	瓦当幅 25.8cm	国分寺4類軒平瓦、頸部は付けない	内面に布目痕、外面上に瓦当面に同じ格子状タキ痕が残る 焼成：やや不良、色調：暗灰色	
185 T-13, SD-10中	瓦	平瓦	幅 24.3cm 残存長 30.2cm	内面に布目痕、外面上に格子状のタキ痕が残る	焼成：やや不良、色調：灰白色	
186 T-6, ピット棟出端	瓦	軒丸瓦	—	国分寺1類軒丸瓦	焼成：やや不良、色調：黄白色	
187 T-6, ピット棟出端	瓦	軒平瓦	瓦当高 5.7cm	国分寺2類軒平瓦、頸部は段階をもつ	頸部はナデ仕上げ 焼成：良好、青灰色	
188 T-6, P-2中	瓦	丸瓦	厚さ 1.6cm	内面に布目痕が残る	焼成：良好、淡灰色	
189 T-6, P-15中	瓦	丸瓦	厚さ 1.6cm	内面に布目痕が残る	焼成：やや不良、灰白色	
190 T-6, P-1中	瓦	平瓦	厚さ 2.5cm	内面に布目痕、外面上に格子状タキ痕が残る	焼成：やや不良、灰白色	
191 T-6, P-4中	瓦	平瓦	厚さ 2.3cm	内面に布目痕、外面上に縦目タキ痕が残る	焼成：良好、淡灰色	
192 T-6, P-10中	瓦	平瓦	厚さ 2.6cm	内面に布目痕、外面上に縦目タキ痕が残る	焼成：やや良好、淡青灰色	
193 T-7, サブトレ中	瓦	軒丸瓦	瓦当径 14.0cm	国分寺1類軒丸瓦	内面に布目痕、外面上に瓦当裏面には指頭圧痕が残る 焼成：やや不良、灰白色	
194 T-15, 第4層中	瓦	軒丸瓦	—	国分寺2類軒丸瓦	焼成：やや不良、灰白色	
195 T-15, 第4層中	瓦	軒平瓦	瓦当高 5.0cm	国分寺1類軒平瓦、頸部をわずかに作り出す	内面に布目痕が残る 焼成：良好、暗褐色	
196 T-15, 第4層中	瓦	軒平瓦	瓦当高 8.2cm	国分寺1類軒平瓦、頸部は無段階	内面に布目痕、頸部はナデ仕上げ 焼成：良好、青灰色	
197 T-15, 第4層中	瓦	軒平瓦	厚さ 2.5cm	内面に布目痕、外面上に縦目タキ痕が残る	焼成：やや不良、灰白色	
198 T-9, SD-09中	瓦	軒丸瓦	瓦当径 14.6cm	国分寺1類軒丸瓦	内面に布目痕、外面上に瓦当裏面には指頭圧痕が残る 焼成：良好、淡灰色	
199 T-9, SD-09中	瓦	軒平瓦	瓦当高 6.1cm	国分寺2類軒丸瓦、頸部は段階に近い	内面に布目痕が残る 焼成：良好、茶褐色	
200 T-9, SB-01, P-2中	瓦	軒平瓦	瓦当高 6.2cm	国分寺2類軒丸瓦、頸部は段階に近い	内面に布目痕が残る 焼成：良好、淡青灰色	
201 T-9, SB-01, P-2中	瓦	平瓦	厚さ 2.0~3.6cm	軒平瓦の平瓦跡か？	内面に布目痕、外面上に縦目タキ痕が残る 焼成：良好、淡青灰色	
202 T-16, SD-09中	瓦	平瓦	上部幅 24.0cm 下部幅 28.8cm 長さ 4.0cm	完形品	内面に布目痕、外面上に縦目タキ痕が残る 焼成：良好、青灰色	
203 T-10, 第22層中	瓦	軒丸瓦	瓦当径 13.7cm	国分寺1類軒丸瓦	瓦当裏面には指頭圧痕が残る 焼成：良好、淡灰色	
204 T-10, 第22層中	瓦	軒丸瓦	瓦当径 15.4cm	国分寺1類軒丸瓦か？	瓦当裏面には指頭圧痕が残る 焼成：やや不良、淡青灰色	
205 T-10, 第10層中	瓦	軒平瓦	瓦当幅 25.4cm 瓦当高 6.4cm	国分寺2類軒丸瓦、頸部は段階に近い	内面に布目痕が残る 焼成：良好、茶褐色	
206 T-10, 第22層中	瓦	丸瓦	厚さ 1.7cm	玉掛け	内面に布目痕が残る 瓦当裏面には指頭圧痕が残る 焼成：良好、淡青灰色	
207 T-12	瓦	軒丸瓦	瓦当径 14.1cm	国分寺1類軒丸瓦	内面に布目痕が残る 焼成：良好、淡青灰色	
208 T-10, 第22層中	瓦	丸瓦	厚さ 1.6cm	行基式	内面に布目痕が残る 内面に布目痕、外面上に格子状タキ痕が残る 焼成：良好、淡灰色	
209 T-10, 第22層中	瓦	平瓦	厚さ 2.3cm	—	内面に布目痕、外面上に格子状タキ痕が残る 焼成：良好、淡青灰色	
210 T-10, 第22層中	瓦	平瓦	厚さ 1.9cm	—	内面に布目痕、外面上に縦目タキ痕が残る 焼成：良好、橙褐色	
211 T-18, SD-12中	須恵器	高台壺	底径 8.8cm	高台部はやや「ハ」字に開く	底部は直線的に開く 焼成：やや良好、暗青灰色	
212 T-18, SD-12中	須恵器	壺	—	壺部は直線的に開く	外側とともにナデ仕上げ 焼成：やや良好、暗青灰色	
213 T-19, SD-13中	須恵器	蓋	口径 13.0cm 器高 3.3cm つまり径 2.4cm	低い天井部からゆるやかに口縁部に至る、端部はわずかに下方に屈曲する、底平なつまみを付ける	天井部外面はヘラケズり後ナデ仕上げ 焼成：良好、灰褐色	
214 T-19, SD-13中	須恵器	蓋	口径 13.7cm 器高 3.3cm つまり径 2.0cm	低い天井部からゆるやかに口縁部に至る、端部はわずかに下方に屈曲する、底平なつまみを付ける	天井部外面はヘラケズり後ナデ仕上げ 焼成：良好、暗褐色	

出土地点	種別	器種	法 番	形態の特徴	手法の特徴	その 他
215 T-19, SD-13中	須恵器	环身	口径 11.5cm 底径 7.5cm 器高 3.9cm	平底の底部から内需気味に立ち上がり口縁部に至る	底部外面は回転糸切り痕が残る。环部は内外面ともにナデ仕上げ	焼成: 良好、灰褐色
216 T-19, SD-13中	須恵器	环身	口径 11.7cm 底径 9.4cm 器高 4.2cm	平底の底部から内需気味に立ち上がり口縁部に至る	底部外面は回転糸切り痕が残る。环部は内外面ともにナデ仕上げ	焼成: 良好、灰褐色
217 T-19, SD-13中	須恵器	皿	口径 13.0cm 底径 8.4cm 器高 2.3cm	平底の底部から直線的に立ち上がり口縁部に至る	底部外面は回転糸切り痕が残る。环部は内外面ともにナデ仕上げ	焼成: 良好、暗灰色
218 T-19, SD-13中	須恵器	皿	口径 14.0cm 底径 10.0cm 器高 2.6cm	平底の底部から内需気味に立ち上がり口縁部に至る	底部外面は回転糸切り痕が残る。环部は内外面ともにナデ仕上げ	焼成: 良好、青褐色
219 T-19, SD-13中	須恵器	高台环	底径 8.4cm	高台部は短く直立する	高台部外面は回転糸切り痕が残る	焼成: やや不良、灰白色
220 T-19, SD-13中	須恵器	高台环	底径 11.2cm	高台部は短く直立する	环部外面はナデ仕上げ、底部外面はナデ仕上げあり後ナデ仕上げか?	焼成: 良好、灰白色
221 T-19, SD-13中	須恵器	台付皿	底部径 11.0cm	高台部は短く直立する	底部外面は回転糸切り痕が残る	焼成: やや不良、灰白色
222 T-19, SD-13中	須恵器	蓋	口径 11.8cm	口縁部は大きく開いた後、腹部で屈曲して上方に伸びる	内外面ともにナデ仕上げ	焼成: 良好、灰褐色
223 T-19, SD-13中	須恵器	台付皿	底径 8.2cm	高台部は「ハ」字状に開く	内外面ともにナデ仕上げ	焼成: 良好、淡青灰色
224 T-19, SD-13中	須恵器	蓋	-	口縁部は大きく開く、外面は波状文様	内外面ともにナデ仕上げ	焼成: 良好、淡青灰色
225 T-19, SD-13中	須恵器	短颈壺	口径 19.0cm	口縁部は小さく開き、颈部はわずかに屈曲する	内外面ともにナデ仕上げ	焼成: やや良好、淡青白色
226 T-19, SD-13中	土師器	甕	口径 27.8cm	口縁部は大きく開く	口縁部外面ナデ仕上げ、内面は颈部以下ヘラケズリ	焼成: やや良好、淡青灰白色
227 T-19, SD-13中	土師器	甕	-	口縁部は大きく開く	口縁部外面ナデ仕上げ	焼成: やや良好、淡青灰白色
228 T-20	須恵器	蓋	つまみ径 5.4cm	天井部に横祐つまみ付き	天井部外面は回転ヘラケズリ後ナデ仕上げ	焼成: 良好、淡青灰色
229 T-20	須恵器	蓋	口径 13.0cm	低い天井部からゆるやかに口縁部に至る。底部はわずかに下方に屈曲する	内面と外側ともにナデ仕上げ	焼成: 良好、淡青灰色
230 T-21	須恵器	环身	底径 7.6cm	やや肥厚気味の底部	底部外面は回転糸切り痕が残る	焼成: 良好、淡灰色
231 T-22, 第2-3層中	須恵器	环身	底径 8.0cm	平底の底部から环部は卓りやかに立ち上げる	底部外面は回転糸切り痕が残る	焼成: 良好、淡灰色
232 T-20	須恵器	甕	-	口縁部は大きく開く、颈部外面に3条の沈線と波状文様	内外面ともにナデ仕上げ	焼成: 良好、灰褐色
233 T-21, 地山上層中	須恵器	甕	-	口縁部は大きく開く、颈部外面に1条の沈線と波状文様	内外面ともにナデ仕上げ	焼成: 良好、灰褐色
234 T-21, 地山上層中	須恵器	甕	厚さ 0.8cm	外面に平行タキ、内面に同心円状の凹凸がある	外面に平行タキ、内面に同心円状の凹凸がある	焼成: 良好、淡灰色
235 T-23, 池山上層中	須恵器	壺	底径 11.0cm	平底の底部から肩部は直線的に立ち上がる	内外面ともにナデ仕上げ	焼成: やや良好、灰白色
236 T-18	瓦	軒丸瓦	瓦当径 15.0cm	国分寺2類軒丸瓦	瓦当裏面には指頭压痕が残る	焼成: やや不良、淡青灰白色
237 T-18, 西壁		セン	短邊 22.4cm 長邊 22.3cm以上	表面は平滑な仕上げ、裏面には凸凹がある	裏面は一部ヘラで仕上げる	焼成: やや良好、灰白色
238 T-18, SD-12中	瓦	平瓦	厚さ 2.1cm	内面に布目痕、外間に格子状タキ痕が残る	内面に布目痕、外間に格子状タキ痕が残る	焼成: 良好、淡褐色
239 T-18, SD-12中	瓦	平瓦	厚さ 1.8cm	内面に布目痕、外間に格子状タキ痕が残る	内面に布目痕、外間に格子状タキ痕が残る	焼成: 良好、淡灰色
240 T-19, SD-13中	瓦	軒丸瓦	瓦当径 13.8cm	国分寺1類軒丸瓦	瓦当裏面は一部ヘラで仕上げる	焼成: やや良好、灰白色
241 T-19, SD-13株	瓦	軒丸瓦	瓦当径 約15.0cm	国分寺1類軒丸瓦	焼成: やや良好、暗灰色	
242 T-19, SD-13株	瓦	軒平瓦	瓦当幅 27.2cm 瓦当高 5.0cm	国分寺1類軒平瓦、脚部をむすびに作り出す玉縁式	内面に布目痕が残る	焼成: やや良好、淡青灰白色
243 T-19, SD-13底	瓦	丸瓦	幅 14.3cm 残存長 23.0cm	内面に布目痕が残る	内面に布目痕が残る	焼成: 良好、淡灰色
244 T-19, SD-13株	瓦	平瓦	全長 34.8cm 残存幅 17.0cm	内面に布目痕、外間に格子状タキ痕が残る	内面に布目痕、外間に格子状タキ痕が残る	焼成: 良好、淡灰色
245 T-19, SD-13底	瓦	平瓦	厚さ 2.1cm	内面に布目痕、外間に格子状タキ痕が残る	内面に布目痕が残る	焼成: 良好、暗青灰色
246 T-20	瓦	丸瓦	幅 16.0cm 全長 38.7cm	行基式	内面に布目痕が残る	焼成: やや良好、淡灰色
247 T-20	瓦	平瓦	厚さ 2.1cm		内面に布目痕、外間に格子状タキ痕が残る	焼成: 良好、淡青灰色
248 T-20	瓦	平瓦	厚さ 2.5cm		内面に布目痕、外間に格子状タキ痕が残る	焼成: やや良好、淡青白色
249 T-24第5層上	須恵器	壺か?	口径 9.8cm 器高 3.5cm	やや丸く肥厚気味の底部から内需して立ち上がり口縁部に至る	底部外面はヘラ切り後内面ともにナデ仕上げ	焼成: 良好、淡青灰色
250 T-24第5層上	土師器	甕	-	口縁部は大きく外反して開く	口縁部外面ともにナデ仕上げ、内面は頸部以下ヘラケズリ	焼成: やや良好、淡青灰白色

出土地点	種別	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	その他
251 T-24、第3上層面 須恵器	台付壺	高径 10.2cm	脚部は短く、「ハ」字状に開く			
252 T-25、第2層中 須恵器	壺	-	口縁部は大きく外反して開く	内外面ともにナデ仕上げ	焼成：良好、青灰色	
253 T-26、SK-15 底面	台付壺	底径 8.2cm	脚部は短く、「ハ」字状に開く	底部内面はナデ仕上げ	焼成：良好、暗青灰色	
254 T-27、第2層中 須恵器	壺	口径 11.6cm 器高 2.5cm	やや肥厚気味の天井部にボタン状のつまみを付ける。 口縁部は扁曲して垂下する	天井部外面はヘラケズリ後ナデ仕上げ	焼成：良好、青灰色	
255 T-28、第4上層面 須恵器	唐津壺	口径 12.8cm	口縁部は大きく開く	内外面に黄灰色の粘がかかる	焼成：良好、黄灰色	
256 T-28 北側拡張区、始山面上 土師質土器	高台壺	底径 5.6cm	脚部は断面三角形状を呈する	内外面ともにナデ仕上げ	焼成：やや良好、淡青灰色	
257 T-29、SK-11 底面	須恵器	高台壺	底径 9.2cm	脚部は短く、直立する	底面外画に糸切り痕がある	焼成：良好、淡青灰色
258 T-29、SK-11 底面	須恵器	高台壺	底径 10.2cm	脚部は短く、「ハ」字状に開く	風化のため不明	焼成：やや良好、淡青灰色
259 T-29、SK-17 17プラン棟出面	壺	口径 9.6cm	口縁部は羅錐付近で屈曲して外反する	内外面ともにナデ仕上げ	焼成：良好、暗青灰色	
260 T-29北、SK-11 底面	台付壺	底径 6.2cm	脚部は短く、「ハ」字状に開く	内外面ともにナデ仕上げ	焼成：良好、淡青灰色	
261 T-29北、SK-11 底部	土師器	壺	口径 28.0cm	口縁部は大きく外反して開く	口縁部は内外面ともにナデ仕上げ	焼成：良好、黄灰色
262 T-29北、SK-11 底部	土師器	壺	口径 21.6cm	口縁部は大きく外反して開く	口縁部外面ともにナデ仕上げ、内面は頸部以下ヘラケズリ	焼成：良好、淡青灰色
263 T-29北、SK-11 底面	須恵器	壺	底径 10.6cm	平底の底部からやや内寄り、脚部は立ち上がる	脚部外画は回転ヘラケズリ、内面はナデ仕上げ	焼成：良好、青灰色
264 T-29南、サブレ中央部 須恵器	高台壺	底径 9.0cm	脚部は短く直立する	底面外画に回転糸切り痕がある	焼成：良好、淡青灰色	
265 T-29南、サブレ中央部 須恵器	台付き皿	口径 14.0cm 直径 10.5cm 器高 3.4	短く直立気味の脚部から付ける。部はやや内寄り味に立ち上がり、口縁部はわずかに外反する	底面外画に回転糸切り痕がある、口縁部内外面に回転ナデ	焼成：良好、暗青灰色	
266 T-29南、サブレ中央部 須恵器	台付き皿	口径 20.4cm 底径 16.0cm	短く直立気味の脚部から付ける。部はやや内寄り味に立ち上がり、口縁部はわずかに外反する	底部外画に回転糸切り痕がある、口縁部内外面に回転ナデ	焼成：良好、淡青灰色	
267 T-27、SD-16中 瓦	丸瓦	厚さ 2.2cm		内面に布目痕が残る	焼成：良好、淡青灰色	
268 T-27、SD-16中 瓦	平瓦	厚さ 2.2cm		内面に布目痕、外面上に横筋タキ痕が残る	焼成：やや良好、淡青灰色	
269 T-28、始山面上 瓦	丸瓦	幅 13.9cm 残存長 26.0cm	主縁式	内面に布目痕が残る	焼成：やや良好、灰白色	
270 T-28、北側拡張区始山面上 瓦	平瓦	厚さ 3.2cm		内面に布目痕、外面上に横筋タキ痕が残る	焼成：やや良好、淡青灰色	
271 T-28、第4上層面 瓦	平瓦	厚さ 2.0cm		内面に布目痕、外面上に横筋タキ痕が残る	焼成：良好、淡青灰色	
272 T-29北、耕作土下 瓦	軒丸瓦	瓦当径 14.2cm	国分寺1類軒丸瓦	瓦当裏面は一部ヘラで上げる	焼成：やや良好、灰白色	
273 T-29北、SK-11 底面	瓦	軒平瓦	-	国分寺1類軒平瓦、脚部は曲線型	不明	焼成：やや良好、淡青灰色
274 T-29北、SK-11 底面	瓦	丸瓦	厚さ 1.3cm	内面に布目痕が残る	焼成：良好、茶褐色	
275 T-29北、SD-17 新プラン瓦移出面	瓦	丸瓦	厚さ 1.9cm	内面に布目痕が残る	焼成：良好、青灰色	
276 T-29北、SK-11 底面	瓦	平瓦	厚さ 2.1cm	内面に布目痕、外面上に横筋タキ痕が残る	焼成：やや良好、淡青灰色	
277 T-29北、SK-11 底面	瓦	平瓦	厚さ 2.1cm	内面に布目痕、外面上に横筋タキ痕が残る	焼成：やや良好、淡青灰色	
278 T-30、SD-18中 瓦	丸瓦	残存長 18.8cm	外面にヘラ書き文字「牛」 あり	内面に布目痕が残る	焼成：やや良好、黄灰色	
279 T-30、SD-18中 瓦	平瓦	厚さ 2.0cm		内面に布目痕、外面上に横筋タキ痕が残る	焼成：良好、淡青灰色	
280 T-30、SD-18中 瓦	平瓦	厚さ 1.6cm		内面に布目痕、外面上に横筋タキ痕が残る	焼成：やや良好、淡青灰色	
281 T-31、第2層中 瓦	軒丸瓦	-	国分寺1類軒丸瓦	瓦当裏面は一部ヘラで上げる	焼成：良好、淡青灰色	
282 T-31、始山面 瓦	丸瓦	厚さ 1.6cm		内面に布目痕が残る	焼成：やや良好、黄灰色	
283 T-32、第5層下面 須恵器	蓋	つまみ径 4.6cm	天井部に輪状つまみを付ける。	天井部外面は回転ヘラケズリ後ナデ仕上げ	焼成：良好、淡青灰色	
284 T-32、SD-20中 須恵器	坏身	口径 13.2cm 底径 9.0cm 器高 3.2cm	半底の底部から坏部は直線的に立ち上がる	底部内面に回転糸切り痕がある	焼成：良好、青灰色	
285 T-32、第5層下面 須恵器	坏身	底径 8.0cm	半底の底部から坏部は直線的に立ち上がる。	風化のため不明	焼成：やや不良、暗灰色	
286 T-32 須恵器	灯明窓	口径 10.2cm 器高 1.3cm	底部はやや丸みを帯びる。 片端内面に僅みを付けて突起を造らせる	底部外画は回転糸切り後ナデ仕上げ	焼成：良好、青灰色	
287 T-32、第5層中 石製品	硯石	残存長 5.8cm 幅 4.0cm	4面に使用跡痕が残る		色調：淡青灰色	
288 T-33東、第3層上面 須恵器	皿	口径 17.2cm	高台の有無は不明	口縁部は内外面ともにナデ仕上げ	焼成：良好、暗青灰色	
289 T-33東、第3層上面 須恵器	坏	口径 17.0cm	高台の有無は不明	口縁部は内外面ともにナデ仕上げ	焼成：良好、青青灰色	

出土地点	種別	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	その他
290 T-33東、P-5中	須恵器	环	口径 13.0cm	高台の有無は不明	口縁部は内外面ともにナデ仕上げ	焼成：良好、暗青灰色
291 T-33東、第3層上面	須恵器	高台环	底径 8.0cm	高台は近く「ハ」字状に開く	内外面ともにナデ仕上げ	焼成：良好、暗青灰色
292 T-33東、第3層上面	須恵器	高台环	底径 10.0cm	高台は近く「ハ」字状に開く	底部外面に糸切り痕がある	焼成：やや良好、暗赤褐色
293 T-33東、第3層上面	須恵器	高台环	口径 13.0cm 底径 9.4cm 器高 5.4cm	短い高台部から环部は直線的に立ち上がる	环部内外面ナデ仕上げ、 环底部外面は糸切り後ナデ仕上げか？	焼成：良好、深青灰色
294 T-33東、第3層上面	須恵器	高台环	底径 10.0cm	短い高台部から环部は直線的に立ち上がる	直化のため不明	焼成：やや不良、淡灰白色
295 T-33東、第3層上面	須恵器	束	—	口縁部は鶴部付近で屈曲して外反する	内外面ともにナデ仕上げ	焼成：良好、暗青灰色
296 T-33東、P-13中	須恵器	束	厚さ 1.0cm	—	外面にタタキ、内面に圓心円状のあて具痕がある	焼成：良好、暗青灰色
297 T-33西、SK-13	須恵器	墨書き器	口径 11.0cm 底径 8.0cm 器高 4.0cm	平底の底部から环部は内窓気味に立ち上がり、口縁部はわざわざに屈曲して外反する。底盤外面に墨書き（井上）あり	底部外面に回転糸切り痕が残る、口縁部内外面は回転ナデ	焼成：良好、青灰色
298 T-33西	須恵器	灯明皿？	口径 8.4cm 底径 6.4cm 器高 2.3cm	平底の底部から环部は強く立ち上がる。口縁部はわずかに屈曲して外反する。	底部外面に回転糸切り痕が残る、口縁部はわざわざに屈曲して外反する。	焼成：良好、青灰色
299 T-33西、サブレ底部	土師器	束	口径 23.8cm	口縁部は大きく外反して開く	口縁部は内外面ともにナデ仕上げ。頂部外面はタテ方向の削毛目、内面は頭部以下へラケズリ	焼成：良好、青灰色
300 T-32、SD-20中	瓦	平瓦	厚さ 2.0cm	—	内面に布目痕、外面上縁目タタキ痕が残る	焼成：良好、淡青褐色
301 T-33東、第3層上面	瓦	軒丸瓦	瓦当径 14.0cm	国分寺1類軒丸瓦	瓦当裏面は一部ヘラで仕上げる	焼成：良好、淡灰色
302 T-33東、第3層上面	瓦	軒平瓦	瓦当高 6.0cm	国分寺1類軒平瓦、頭部は段階	内面に布目痕が残る	焼成：良好、深青灰色
303 T-33東、P-8中	瓦	平瓦	厚さ 1.7cm	—	内面に布目痕、外面上縁目タタキ痕が残る	焼成：やや良好、灰白色
304 T-33東、P-13中	瓦	平瓦	厚さ 1.5cm	—	内面に布目痕、外面上縁目タタキ痕が残る	焼成：やや良好、灰白色
305 T-33東、P-4中	瓦	丸瓦	厚さ 1.8cm	—	内面に布目痕が残る	焼成：良好、暗青灰色
306 T-33東、P-1中	瓦	平瓦	厚さ 2.8cm	—	内面に布目痕、外面上縁目タタキ痕が残る	焼成：やや良好、灰白色
307 T-33東、P-13中	瓦	平瓦	厚さ 2.0cm	—	内面に布目痕、外面上縁目タタキ痕が残る	焼成：良好、淡灰色
308 T-33西、新作土下	瓦	軒平瓦	—	国分寺2類軒平瓦、頭部の形状は不明	内面に布目痕が残る	焼成：良好、茶褐色
309 T-33西、SK-13	瓦	平瓦	全長 33.7cm 最大幅 21.7cm 厚さ 2.0cm	—	内面に布目痕、外面上縁目タタキ痕が残る	焼成：良好、淡灰色
310 T-35、SD-26中	瓦	平瓦	厚さ 3.6cm	—	内面に布目痕、外面上縁目タタキ痕が残る	焼成：やや良好、淡灰白色

図 版



出雲国分寺跡全景(昭和30～31年発掘調査時)
地方史研究所『出雲国分寺址・国府址調査報告』昭和38年刊より転載



出雲国分寺跡全景(昭和30~31年発掘調査時)
地方史研究所「出雲国分寺址・国府址調査報告」昭和38年刊より転載



T-1西：第4層上面遺物出土状況（東方より）



T-1西：SD-02検出状況（東方より）



T-1西：ピット検出状況（東方より）



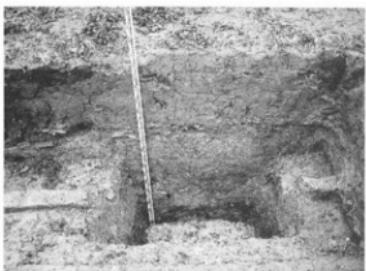
T-1西：P-9近景（北方より）



T-1西：西壁セクション（東方より）



T-1西：西側坪塗状況（東方より）



T-1西：東側坪塗状況（南方より）



T-1東：第4層上面遺物出土状況（東方より）



T-1東：第4層上面出土状況近景（南東より）



T-1東：SD-02検出状況（東方より）



T-1東：SD-03検出状況（南方より）



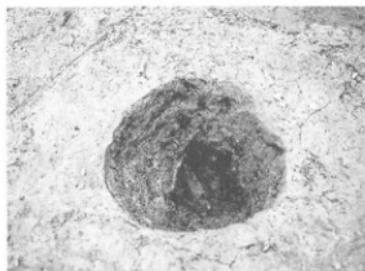
T-1東：SD-02実掘状況（東方より）



T-1東：整地層上面ピット検出状況（東方より）



T-1東：SK-01、P21近景（北方より）



T-1東：P-18近景（北方より）



T-1東：P-20近景（北方より）



T-1東：西側坪塗状況（南東より）



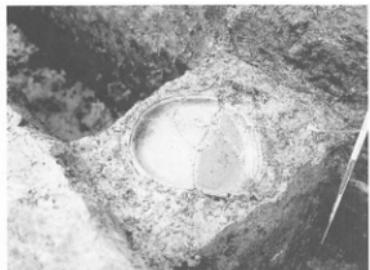
T-1西：東側坪塗状況（東方より）



T-2西：第4層上面遺物出土状況（南西より）



T-2西：SD-04検出状況（西方より）



T-2西：SD-04出土須恵器（No.36）



T-2西：西側坪塗状況（東方より）



T-2西：中央部坪塗状況（南方より）



T-2西：東側坪塗状況（南方より）



T-2東：完掘状況（西方より）



T-2東：完掘状況（南西より）



T-2東：西侧評塙状況（南方より）



T-2東：東側評塙状況（南方より）



T-3：第6層遺物出土状況（西方より）



T-3：SD-01検出状況（東方より）



T-3：SD-01検出状況（西方より）



T-3：SD-01検出状況（北方より）



T-3: A-Cセクション（東方より）



T-3: C-Dセクション（北方より）



T-3: SD-01発掘状況（東方より）



T-3: 西側断面状況（南方より）



T-3: 東側断面状況（南方より）



T-3: 東側断面状況（西方より）



T-4: 第4層上面遺物出土状況（西方より）



T-4: 第4層上面遺物出土状況（南方より）



T-4: SK-02半掘状況 (南方より)



T-4: SK-02実掘状況 (南方より)



T-4: 北壁セクション (南面より)



T-4: SD-05軒平瓦No.88検出状況 (南方より)



T-4: 完掘状況 (西方より)



T-4: 東側坪塀状況 (南方より)



T-5、13調査区全貌 (南東より)



T-5上段: 第23層遺物出土状況 (南西より)